

日中国交正常化40周年記念
徐福東渡2222年

徐福フォーラム in 神奈川 2012

資料集

2012年12月3日（月）
県立かながわ県民センター

徐福フォーラム in 神奈川 2012

開催日時：2012年12月3日(月) 午前10時～17時
場所：かながわ県民センター2階ホール

日程と目次

総合進行：大会委員長 前田豊、総合司会：湊真帆 (以下敬称略)

1. 開演挨拶 記録係：岡本明久、鈴木信治
10:00～ (5分) 徐福フォーラム実行委員長 前田豊
10:05～10:10 (5分) 神奈川徐福研究会の活動紹介 河野通広
2. 基調講演
10:20～11:10 (50分) 日本・韓国・中国の徐福学とその背景 池上正治
11:10～12:00 (50分) 徐福一行と神奈川、大和王権との関わり 前田豊
12:00～13:00 (60分) 昼食休憩
3. 研究発表(予定) タイムキーパー 森田将夫
13:00～13:15 (15分) 神皇紀の世界 津越由康 (神奈川)
13:15～13:30 (15分) 各地の研究発表 (1) 鳥居貞義 (山口)
13:30～13:45 (15分) 各地の研究発表 (2) 土橋寿 (山梨)
13:45～14:00 (15分) 各地の研究発表 (3) 益田宗児 (徳之島)
14:00～14:10 (10分) 中間休憩
14:10～14:25 (15分) 各地の研究発表 (4) 石川幸子 (伊根)
14:25～14:40 (15分) 各地の研究発表 (5) 大串達郎 (佐賀)
14:40～14:55 (15分) 各地の研究発表 (6) 赤崎敏男 (八女)
14:55～15:10 (15分) 遠志保 (国際非物質文化遺産)
14:10～15:30 (20分) 特別研究報告 禹珪日 (濟州島と徐福東渡)
15:30～15:45 (15分) 質疑 * 発表者確定時点で時間調整の予定あり。
15:45～16:00 (15分) 休憩
4. パネル討論会 進行コーディネーター：前田
16:00～16:45 (45分) パネル討論：講演・発表者代表
(池上・鳥居、土橋、大串、赤崎、達、山本各氏)
テーマ：徐福研究の行方 ～神話・伝説の域を超えて総合人間学へ～
歴史、宗教、科学、技術、国際関係を含む総合文化・文明論への昇華を！
会場参加者を含めた質疑討論
5. 閉会
16:45～16:55 (10分) 講評：河野通広
閉会挨拶：田島孝子
6. 参考 フォーラム参加費：資料代 1000 円 連絡先：前田豊 Tel/Fax0463-76-4086
7. 懇親会 閉会后希望者による懇親会を別会場にて開催します。
時間：17:30～20:00 場所：大陸 (中国料理、J R横浜駅 東口 徒歩3分)
費用：5000 円 司会進行：津越由康

主催

徐福フォーラム in 神奈川 実行委員会

247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-2-1 地球市民かながわプラザ 1F
神奈川県日本中国友好協会 気付 Tel045-896-0124、Fax045-896-0125

後援

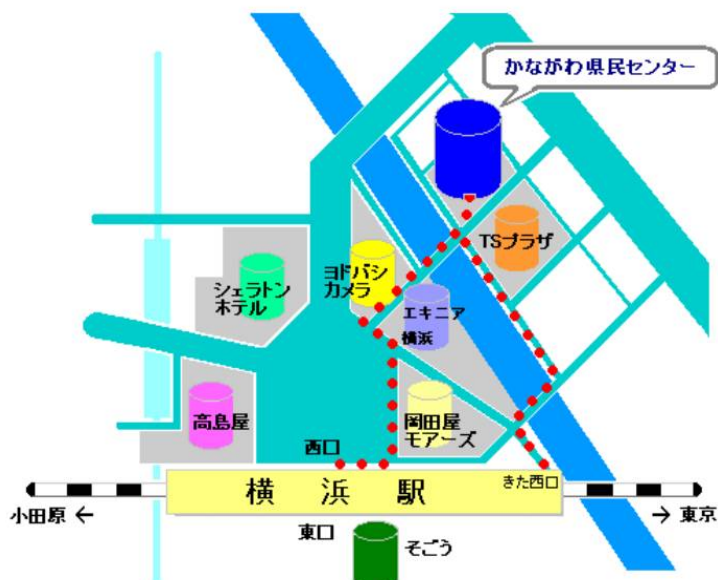
中国大使館友好交流部

(財) かながわ国際交流財団

会場

神奈川県民センター2階ホール

JR 横浜駅西口徒歩 5 分 Tel 0 4 5 - 3 1 2 - 1 1 2 1
神奈川区鶴屋町 2 - 4 2 - 2



神奈川徐福研究会の活動ご紹介

NPO 神奈川日中友好文化教育センター専務理事
神奈川県日中友好協会常任理事
河野通広



本日は、師走で平日のお忙しい中、ご参加頂き有難うございました。この”徐福フォーラム in 神奈川”は第1回目を日中友好35周年に当たる5年前の2007年に開催しましたが、実際に計画や運営の総元締めになる事務局長の役割を、作家であり徐福研究の第一人者である池上正治先生にお願いし成功裏に終了いたしました。今年は日中友好40周年、および徐福東渡2222年に当たる年にちなみ、5年ぶりに第2回目となるフォーラムを本日ここに開催の運びとなりました。私たちの会は設立後まだ9年という若い会であり、存在や活動状況等よく御存じでない方もいらっしゃるかと思い、活動状況等を簡単に説明させていただきます。

2003年2月に私達、神奈川県日中友好協会のメンバー5人が、中国開発地区の視察の為、慈溪市を訪問した際、徐福記念館を見学する機会がありました。館長の田島孝子女史と董事長の須田郁彦氏にお会いした所、何と田島女史は神奈川県川崎市の住人であることを知りました。神奈川にも徐福関連の史跡等があるならば、県日中と一緒に神奈川徐福研究会を立ち上げませんか、と軽い提案を行ってみました。帰国後間もなく県日中の事務所にお二人が奥野先生執筆の「ロマンの人徐福」を持参され、その中の藤沢市の妙善寺にある徐福の子孫の墓についての写真と記述があったので、早速現地を訪問しました。墓石と墓碑より神奈川も徐福ゆかりの地であることを確認し、田島女史を会長に据え、神奈川徐福研究会を設立することにしました。

早速神奈川日中の有志や事務局の協力を得て活動を開始し、まずは有識者を講師にお招きしての講演会や“徐福ゆかりの地”を巡るバス旅行などを定期的実施し、それに伴い会員数も増えてきました。諸般の事情に鑑み、2004年9月にNPO法人神奈川日中友好文化教育センターを設立し、神奈川徐福研究会をその主要な事業として位置づけました。そして県日中の協力も得ながら活動は順調に継続してまいりました。

徐福関連の遺跡を巡るバス旅行で富士吉田を訪れた際、土橋寿先生の御尽力により宮下家を訪問し富士古文献を見学する機会を得ました。相模、駿河、甲斐の3国に亘る富士山北麓を舞台とする日本の古代や神代史の記述のあるこの古文書に興味を持つ人が多かったため、渡辺長義氏著“探究、幻の富士古文献”をテキストにし、会員による輪読会を月一回のペースで実施しました。次いで三輪義熙氏が、膨大な富士古文献を30年かけて集大成し、大正時代の初期に発刊された“神皇紀”の現代語への翻訳作業を会員7名で実施し、347頁の書籍とし“現代語訳・神皇紀”と名付けて翻訳者の中の4名の資金分担により、昨年4月に自費出版いたしました。そして現在は次の作業として、富士古文献そのものの写真版を基に、膨大な富士古文献の中の、徐福が直接記述したといわれる“徐福12史談”と称される部分の現代語訳の作業を11人で分担し実施中であり、この作業は時間がか

かりますが、完成後には原文と翻訳文を対比した形式にまとめ、書籍とし或いはネット上で公開をしたいと考えております。

次に、地元神奈川県徐福伝承に関する調査研究でございますが、会社在職中に勤務先の東三河地方の徐福伝承や古代史に関する著作を出版しておられた前田豊氏が、定年後徐福伝承のある神奈川県の秦野市に住居を移されたので、これを機会に神奈川の徐福研究にも力を入れて頂きたいとお願いしたところ、早速活動を開始されその成果を平成 11 年 8 月に“徐福王国相模”という標題の書籍として出版されました。現在、神奈川徐福会の例会で、これをテキストとして講師を前田さんをお願いして学習を行っていますが、終了後は新しいテーマを設定し、会員が分担して、神奈川の徐福伝説の調査研究を深化させる活動に進んでいければと期待しています。

また、中国慈溪市の徐福会では最近徐福物語の漫画を作成いたしました。此れの記事部分を日本語に翻訳して日本の仲間に配布しても宜しいかと、先方に問い合わせたところ、500 部に限定して認めてもらったので、中国語を勉強している当会の伊藤健二氏が日本語に翻訳しそれを池上先生に監修して頂いて印刷物を、本日のフォーラムに間に合わせる事が出来ました。既述の“現代語訳・神皇紀”と“徐福王国相模”それに“徐福物語の漫画本”がこの会場に用意してあります。まだ入手されていない方興味のある方は、お求め頂ければと存じます。

中国や韓国の各地で開催されるフォーラムには極力参加するようにし、又来日される国外の方々のおもてなしも積極的に行き、徐福を媒体とした日中韓の友好交流も実感しております。

近年御承知のように、徐福は益々日中友好の懸け橋になってきた感があります。北京に本部を置く中日友好協会の会長は今年から唐家せん氏(元外交部長で日本でもお馴染みの人、74 歳)が就任いたしました。前任者である宋健会長(今年 81 歳、中国では以前は副総理格の人と聞いている)が、昨年同協会の 10 人の幹部役員と共に来日されました。その時、日本の政治家や諸団体の関係者が 1000 人ほど集まったの歓迎会が開催され、宋会長は熱のこもった御挨拶をされましたが、その中で徐福について触れられたのが印象的でした。その要点は次の様なものでした。

《ここ数年、中国史学界と知識界では徐福東渡の研究がブームになり、中日文化交流史を 700 年も遡らせています。「遡って過去を知るほど、未来をより遠くまで見通すことができる」というチャーチル首相の名言があります。そこで私(宋健さん)も司馬遷(前 145 年)の《史記》を読み返しました。徐福の日本渡航はきっと実際にあった話だと、私は信じています。前漢の史官であった司馬遷が著述した当時、徐福東渡から 50~70 年程しか経っておらず、有史時代のことですから出任せに言ったとは考えられません・・・後略》
これは私達にとって心温まる内容であり、よき応援でありましょう。

ところで今年になって領土問題を契機とし、日中及び日韓の関係は、特に外交上陰悪な状況になり、9 月に開催するはずであった中国象山での徐福フォーラムも直前になって中国政府の命令で中止になってしまいました。日本の国民として、又徐福関係の活動に携わる者として、両国の関係が早く好転し、象山でのフォーラムも早く再開されることを望みつつ筆をおくことに致します。

まえがき

司馬遷の史記によれば、秦の始皇帝の命により徐福が不老不死の靈薬を求めて東海に出航しました。今年はそれから2222年目に当たるとされています。

昨今、日中間で様々な事も起きていますが、それはさておき、日本各地に徐福が来て文化を伝えたという伝説が残っており、徐福東渡は日中交流のさきがけとも言えます。

2012年は日中友好40周年記念の年でもあり、悠久の国際友好を継続する意味も含めて、日本各地の最新徐福研究結果を共有すべく、徐福フォーラム in 神奈川 2012 を企画いたしました。ご参加下さいました皆様にあつく感謝を申し上げます。

本フォーラム資料集の構成としましては、基調講演要旨と研究論文、特別寄稿論文から成り立っております。

まず、基調講演1は、国際的視野に立つ徐福研究の大家・池上正治様に最新の国際的“徐福学”の背景に関する講演をお願いしました。基調講演2は、神奈川の徐福伝承を掘り起こし取りまとめたためか、本フォーラム実行委員長を仰せつかりました前田豊が、神奈川の徐福伝承とそれをベースとした徐福集団とヤマト王権の関わりについて考察し、ご紹介いたします。

研究論文としては、第I部に日本各地で発掘された徐福関連最新情報を共有しようということで、各地の徐福関連紹介論文11件を掲載し、次いで第II部にこれらをベースとして、“徐福学”の更なる発展を目指して、徐福に関連した技術・歴史・文化・交流に関する論文5件を掲載いたしました。

第III部に特別寄稿論文として、韓国済州徐福文化国際交流協会理事長・禹珪日様から投稿を頂きました、徐福東渡に関する貴重な研究論文を掲載させて頂きました。

徐福研究は、単に伝承の発掘とそれを基にした地域振興では飽き足らない時期に達したと考えられます。徐福が歴史的実在人物であるとの認識が広がる中、日本列島への渡海が事実であれば、当然日本の弥生時代の歴史と関わりをもつと考えられることから、日本の歴史解明に繋いでいく必要が考えられます。また徐福が列島にもたらした技術、文化、国際交流などに関する見識のレベルアップも必要であろうと考えられます。

これらのことを、フォーラムの研究発表でご紹介を頂き、最終段階でパネル討論を行い、今後の徐福研究の昇華に繋げていければ幸甚と存じます。

大きな変動の波が押し寄せる昨今、徐福に縁をもつ人々が先頭に立って、世界平和と友好に基づく国際交流の懸け橋になっていくことを祈念して、まえがきとさせていただきます。

文責 大会実行委員長 前田豊

論文集目次

基調講演要旨	4
I. 各地の徐福伝承	8
1. 神奈川の徐福伝承	9
	神奈川徐福研究会 前田豊
2. 「神皇紀」に記されている徐福と「富士古文書」の評価	14
	神奈川徐福研究会 津越由康
3. 北海道にもう1つの徐福家系図	18
	徐福研究者、作家 池上正治
4. 青森県小泊の徐福伝説 ～最近の調査でわかったこと～	22
	小泊の歴史を語る会会長 柳澤良知
5. 秋田県男鹿半島の徐福伝承 ～観光資源として徐福の取り組み～	27
	秋田県男鹿温泉 元湯雄山閣館主 山本次夫
6. 富士山と徐福ーその諸相ー	32
	富士山徐福学立者 元帝京学園短期大学教授 土橋 寿
7. 徐福伝説に思いを馳せて	37
	富士山徐福学会会員 伊藤 進
8. 徐福集団最初の渡来地考察	41
	奈良徐福研究会会長 益田宗児
9. 村人に守り継がれる丹後の徐福	45
	大阪・徐福友好塾会員 石川 幸子
10. 土井ヶ浜遺跡と徐福伝説	48
	徐福友好塾主宰（大阪） 鳥居貞義
11. 古代における有明海沿岸地域と中国・江南地方の興隆について	55
	佐賀県徐福会 大串達郎
II. 徐福に関連した技術・歴史・文化・交流	58
1. 徐福の伝えた技術	59
	童男山・犬尾城址保存会相談役 赤崎敏男
2. 非物質文化遺産と徐福伝説	
- 伝説を取り巻く多様・多重な伝承主体 -	64
	愛知県立大学・中京大学非常勤講師 達志保
3. 富士古文書の一考察	71
	神奈川徐福研究会理事・映画「徐福さん」監督 岡本明久
4. 徐福と大和王権との関わり	78
	神奈川徐福研究会 前田豊
5. 徐福の縁で友好交流	84
	神奈川徐福研究会・会長 田島孝子

Ⅲ. 特別寄稿論文	88
1. 韓国濟州島	
徐福、西歸浦から航海を中止し帰国回航した理由	
～韓国南海岸一帯と日本海沿岸に散在する遺跡について～	89
(社) 濟州徐福文化国際交流協会理事長	禹 珪日
あとがき	99
(中濱勝也さんを悼む)	100

基調講演要旨



基調講演 1. 日本・韓国・中国の徐福学とその背景

作家 池上正治

いまから2000年以上の昔、中国人である徐福は、秦の始皇帝の命により、不老の靈薬を探して東海へ船出したとされる。その徐福の伝承を、東アジア3国（日韓中）は共有し、徐福をめぐる交流も活発となり、それぞれの「徐福学」を発展させている。その背景を明らかにすると同時に、最近の問題との関連についても言及してみたい。

起 —日本での徐福ブーム

いわゆるブームに先行して、佐賀県や和歌山県（新宮）などで徐福の顕彰事業が、あたかも地下水脈のように営々と伝えられてきたことは、特記に値するだろう。

日本での徐福ブームは、20世紀の90年代になってからのことである。日本徐福会の設立（1991年5月13日、会長＝巖谷大四、理事長＝飯野孝宥）は、その先駆けとなった。

その当日、のちに中国徐福会の会長となる李連慶氏がアメリカからの帰路、特別に参加してくれたのは、まさに錦をそえるものとなった。

その後、国内各地および中国との徐福交流には、各種の学術シンポジウムや講演旅行などがあり、じつに多彩である。そうした徐福ブームを背景にして、徐福を主人公としたオペラや映画（いずれも日本と中国の合作）が完成し、公演、上映されたことも記憶に新しい。

総じていえば、日本の「徐福学」は、各地の伝承や記念行事などを基礎とし、それを表現することにより、互いに理解し、刺激するという役割を果たしたといえる。

承 —アジアの徐福ブーム

中国における「徐福の根」がどれくらい深いかは、それこそ計り知れない。徐福の末裔たちがおり、千童鎮のように漢代からの地名があり、望海大会や信子節は「昔からやっている」という。

その中国で徐福がブームとなったのは、論文「秦代に日本に東渡した徐福の郷里跡とその考証」（羅其湘ら、『光明日報』1984年8月16日号）とされる。全国的な地名調査の過程で、羅教授の住まいの徐州から遠くない村こそが、徐福の生れ故郷と確認された、という内容である。

これを受け止め、中国徐福会を組織（1993年10月）したのが李連慶氏（初代会長）である。李先生は、日本と中国が国交を正常化する（1972年）前、すでに外交官として日本に滞在している。日本に徐福の墓があり、徐福の行事があることには、つとに注目していたという。

その後、北京や中国の各地で、中国徐福会が何度も主催した学術シンポや調査旅行に参

加した日本人は少なくない。李先生の主編『徐福賛』（1996）『徐福熱』（2000）などに詳しい。

香港には、香港日本徐福会（理事長＝席正林）などがあり、中国でよく同席する。

台湾には、世界徐氏宗親総会（会長＝徐福、理事長＝徐鴻進）があり、国際交流をふくむ大きな規模の活動をしている。また、『徐福研究』彭双松（1984年）は先駆的な大作である。

韓国の済州では、洪淳晩先生を中心として活発な活動があり、その精華ともいえるべき『正房瀑布徐福遺蹟調査報告書』（1992）のほか、『徐福集団斗済州島』という労作がある。

西帰浦（済州道）には、（社）徐福文化国際交流協会があり、活発な交流を展開、近年では禹珪日先生を中心に毎年「徐福と東亜細亜文化交流」国際シンポを開催、論文集を出している。

南海（慶尚南道）の文化院では、李同善院長や徐性泰先生らが徐福のことを伝承している。

【転】 — 「国境問題」の影響

今般の「国境問題」、尖閣諸島 vs 釣魚台列島、竹島 vs 独島には、一定の歴史的背景がある。

論者が最初に「尖閣列島」を取りあげたのは、雑誌『中国』（主宰＝竹内好）1971年2月号でのこと。そのスタンスは、まず相手の言い分を聞く、というものだった。

少なくとも「尖閣」は、日中の国交正常化（1972年）と平和友好条約（1978年）で、ペンディング（棚上げ）されている。まず、この大前提を再認識することが必要である。

【結】 — 徐福を絆とした交流を

東アジアの3国（日本・韓国朝鮮・中国）は、隣国であり、地政学的にみて不可分の関係にある。戦前、日本がアジアを侵略した時代、日本の当局は、中国伝来の徐福を好ましくないものとし、排除し、否定しようとした。しかし当時の民には知恵があり、祠や社に祭る徐福を「不詳一座」と称し、それを秘かに遷座させ、守りぬいたという歴史がある。

東アジアに黒雲がたちこめ、風波が強まるいまこそ、徐福の精神（互惠平等・平和共存・相互学習）に立ち返らなければならない。「合則両益、離則相傷」である。

<発表者プロフィール>

池上正治（いけがみ しょうじ）

1946年新潟県生れ。東京外語大学中国科卒業。作家・翻訳家。s_ikgmi@ybb.ne.jp
中国に関する著述・翻訳・講演のかたわら、東アジアの交流（文化・医薬など）にも努める。著書に、『徐福』、『気』の3部作、『天津』、『龍と人の文化史百科』、『世界の花蓮図鑑』（共著）など。訳書に、『徐福と始皇帝』『徐福 霧のかなたへ』『中国慈城の餅文化』『チベット』など。総計60余冊。

基調講演2. 徐福一行と神奈川、ヤマト王権との関わり

徐福フォーラム in 神奈川 2012 実行委員長 前田豊

神奈川県には徐福伝承がいくつもある。これらの徐福伝承がなぜこの地に存在するのか、関係する事象を取り上げ、どこまで遡れるのかを調査し、その意義を考察する。

また、徐福が歴史的事実人物であるとの認識が広がる中、日本列島への渡海が事実であれば、当然日本の弥生時代の歴史と関わりをもつと考えられる。日本の各種文献や神社伝承を基にヤマト王権との関わりについて考察した。

1. 神奈川県に存在した徐福伝承

- 1) 藤沢市妙善寺の福岡家の墓碑、
- 2) 秦野市横野にある唐子神社の御祭神（からこ神）、
- 3) 藤野町・栗原家に、徐福持参と伝える木像（昭和39年焼失）と鉄鍬の存在、
- 4) 相模一宮・寒川神社の名称は、富士山麓を流れていた古川の名称であった。
- 5) 徐福に関する漢詩を新宮に残した禅僧・無学祖元の徐福情報は仏教を通じて浸透していた。
- 6) 三浦半島に多数発見された丸石は、徐福船団の船の安定化バラストと考えられる。
- 7) 丹沢山麓の寄木地区のジタンゴ山の名称は震旦郷（古代中国）に由来する、等々。

神奈川県秦野地方には、秦始皇帝に不老長寿の仙薬を勧めた方士徐福が、蓬莱の島を求めて日本の紀伊の熊野に落ち着き帰化し、その子孫が富士山麓に土着し、延暦19年(800)に富士山の大噴火が起こり大きな被害を受け、やむなく秦野に移住したと伝えられている。

神奈川県の徐福伝承は、これら秦氏の流れ、山岳神道や熊野修験道および弘法大師開創の真言宗や臨済宗を中心とした仏教展開の流れにのって、古代から伝わっていたことが考えられる。

2. 徐福と大和王権との関わり

日本の古代を記述する史書は、西暦8世紀の初期に作られた「古事記と日本書紀」（記紀）が最初だといわれている。しかし、両書は当時の政権に都合のよいように変更されている。

一方、最近の徐福研究の進展によって、日本の古代豪族「物部氏」が徐福集団から発生したとの説が有力になってきている。また、徐福のことが記載された日本の古伝「富士古文献」が、「記紀」の原本であったとの情報もある。

徐福が歴史的人物と考えられるようになった今日、日本古代史に現れる人物(神々)に比定されている可能性は高い。

近年発表された書籍に開示された徐福の比定例として、

- ① 天之御中主、②スサノオ命、③神武天皇、④大山津見命、⑤ニギハヤヒ命、⑥熊野権現、⑦イザナギ神、⑧寒川神、⑨大歳（大年）神、⑩大山くい神、⑪大酒神、⑫ヒルコ神＝恵比寿神 などが挙げられる。

物部氏の祖を祀る大和の石上神宮には、布都（ふつ）、布都斯（ふつし）、布留（ふる）という名で、スサノオの父、スサノオ、スサノオの子というスサノオ3代が祀られている。

徐福の中国大陸在住時の名は、徐市（じょふつ）であり、史記に載る正式名は市（ふつ）と呼ばれていた。石神神宮は、「ふつの神」＝「徐市」とその子孫を祀っていたことになる。

記紀によれば、スサノオ神の父神はイザナギ神であるから、スサノオの父が徐福であれば、**イザナギ神は徐福**ということになる。

（注 奈良徐福研究会長の益田宗児氏は、鳥居貞義編『徐福さん』（2005）の論文に於いて、炯眼にも「徐福＝イザナギ神」である事を提言されている。）

イザナギ神は、天照大神とスサノオ神を生んだ。そして天照大神とスサノオ神がうけい（契約）によって皇統となる5男と3女を生んだ。

そして男系の天ノオシホミミ尊の子孫から、ニニギ尊ーヒコホホデミ尊ーウガヤフキアエズ尊を経て、カムヤマトイワレヒコスメラミコト（神武天皇）となる。

また、イザナギ（徐福）とイザナミの子供である大山祇神の子供がコノハナサクヤ姫であり、この姫が天孫ニニギ尊と結婚して、ヒコホホデミ尊を生み、その子孫が神武天皇となる。

従って、大和王権を創った天皇家の男系・女系とも徐福の子孫であったということになる。即ち、ヤマト王権を築いた人々の祖が徐福一行ということになる。

尚、神武天皇の実在性については、日本の歴史学会では様々取りざたされているが、筆者の調査した範囲では、紀元1世紀前半に大和盆地で即位していたと推察している。

<発表者プロフィール>

前田 豊（まえだ ゆたか）

1941年兵庫県生まれ。大阪大学工学部修士課程修了。繊維化学会社を経て、前田技術事務所にて情報関連業務に従事。

愛知県豊橋市在勤中、古代史に興味をもち、「古代神都 東三河」、「倭国の真相」、「消された古代東ヤマト」、「徐福王国相模」を彩流社から出版。

この中で徐福の存在が、日本の神話に反映していることを直感し、徐福研究に注力している。

以上

I . 各地の徐福伝承

I-1 各地の徐福伝承

神奈川の徐福伝承

神奈川徐福研究会 前田豊



1. はじめに

神奈川県には徐福伝承がいくつかある。これらの徐福伝承がなぜこの地に存在するのか、関係する事象を取り上げ、どこまで遡れるのかを調査し、その意義を考察してみたい。

2. 神奈川県に存在した徐福伝承

神奈川県藤沢市の妙善寺にある福岡家の墓碑には、同祖先が秦氏を称し、徐福の子孫であることを明記されている。そこで神奈川県に存在する徐福に関連する書物、伝承、記録を探り求めたところ、以下のような諸事实在存在したことが判明した。

- 1) 藤沢市妙善寺の福岡家の墓碑には、徐福の子孫であることが明記され、祖先は秦野から来たとされている。
- 2) 富士山麓に土着した徐福一行の子孫が、延暦19年(800)に富士山の大噴火が起こり、大きな被害を受け、やむなく秦野に移住したとの伝えがある。そのために宝来山や宝来下という地名が伝えられたのだという。
- 3) 秦野市横野にある唐子神社の御祭神(からこ神)は、富士山から丹沢山系を越えてきた、徐福の子孫であることを伝承していた。
- 4) 藤野町・栗原家には、徐福持参と伝える木像(昭和39年焼失)と鉄鍬が存在していた。
- 5) 相模一宮・寒川神社の存在。寒川の名称は、富士古文献によると富士山麓を流れていた古川の名称であった。寒川町・寒川神社に徐福文献とも称される「宮下文書」が存在し、徐福伝承を伝える宮下宮司らは、延暦年間に起きた、富士山の爆発を逃れて、相模川下流に移動したと記す。
- 6) 秦野市蓑毛の大日堂を管理する宝蓮寺の縁起書には、大日堂の五大尊が、徐福に関係するものであることを伝えていた。
- 7) 鎌倉市の円覚寺は、徐福に関する漢詩を新宮に残した禅僧・無学祖元の開山寺であった。つまり、徐福情報は、仏教を通じて神奈川に浸透していた可能性がある。
- 8) 三浦半島に、丸石が多数発見された。これが、徐福船団が使用した、船の安定化バラストではないかと考えられている。八丈島周辺にも同様の丸石が発見されており、徐福伝説があることから、日本の太平洋岸にたどり着いた一行が難破して各地の海岸に上陸したことが考えられる。(参考情報1)
- 9) 丹沢山系の麓、秦野市の寄木地区に、ジタンゴ山という小山(700m級)がある。

ジタンゴ山の名称は「震旦郷(シタンゴウ)」から、訛って付けられたものと伝えられている。富士古文献に「支那震丹国皇代曆記」という文献があり、震丹とは、古代中国の名称であったという。つまり、秦野市の山奥には、古代中国から渡来した人々が住みついていたことを、暗示する山名である。(参考情報2)

参考情報 1

有賀訓、「新説謎の丸石は徐福がもってきた！！

神奈川県横須賀に集中する石球の正体は船のバラストだった！？」

スーパーミステリーマガジン ムー 2010年9月号 No. 358 p124-127 より抜粋

神奈川県三浦半島の西岸、相模湾に面した横須賀市秋谷（アキヤ）の道路端に、昔から安産祈願の霊石として崇拝されてきた「子産石」が置かれている。

秋谷地区の海岸沿い約200メートルの範囲内を深さ1～2メートルほど掘り起こすと、野球ボール大のものから直径約50センチ以上の大型のものまで、球形の石がごろごろ出てくる。秋谷地区は推定2万年前頃に堆積しはじめた砂泥の地層で覆われている。

逗子市の郷土史研究家の赤埴和晴氏の話では、「秋谷地区の丸石は、この場所で自然にできたものではなく、信仰のために集められたわけでもない。正体は大昔の航海に使われた道具で、木造船の最下層に詰められた“ウェイト”だったと考えられる」とのこと。

木造構造船とは、古代の外洋航海用に建造された大型構造船で、船の重心を下げて荒海を乗り切るために、大量の石材を船底に積み込んだ。また、航海中に発生する船底の水漏れを止めるには、特定の底板にピンポイントで圧力をかける必要があり、その作業を迅速かつ効率的にこなすためにも、球形のウェイト石が不可欠だったという。古代の大型船はドック施設のない渡航先では、砂地の浅瀬に入って干潮を待ち、船体を横倒しにして外装修理を行ったので、その作業の際にも、船体内部で簡単に転がせる大小の丸石は重宝された。

これらの丸石が秋谷地区から集中的に出土するのは、この地区と北側の久留和地区の沖合が、三浦半島周辺海域で最も荒天時に強風が発生しやすいことと関係がある。つまり、丸石の多くは、座礁して壊れた船舶の積載物だった可能性が高い。現在の熊野神社斜面位置までは、2千数百年前には波打ち際だったとみられる。

赤埴氏は、船底に多くのバラスト丸石を積んだ大型構造船で、三浦半島へ上陸した人々は、「徐福伝説」と関係していると推定している。始皇帝の在位期間（BC246～210）や、司馬遷の歴史記述も秋谷地区へ丸石が運び込まれた推定年代と合致する。

八丈島にも徐福伝説が残っており、始皇帝が征服した6国の若い王族子女たちが復讐を企てることを恐れて、中国本土からなるべく遠い土地へ島流しする目的があったという見方が有力化している。その到着地が八丈島だったという伝承に信憑性が感じられる。昔から八丈島に伝わってきた「玉石垣」も古代唐船のバラスト丸石を利用して築かれたと思われる。

徐福伝説に象徴される古代中国人の日本列島への集団渡来は、縄文時代晩期から南関東と東海地域へ活発に入植したようだ。秦帝国ゆかりの人々＝秦氏族は本州内陸部にも入植地域を広げていった。弥生時代初期の甲州地方で「丸石信仰」が大流行し、富士吉田に徐



↑地元の丸石研究者、元逗子市市議会議員
で郷土史研究家の赤埴和晴氏。

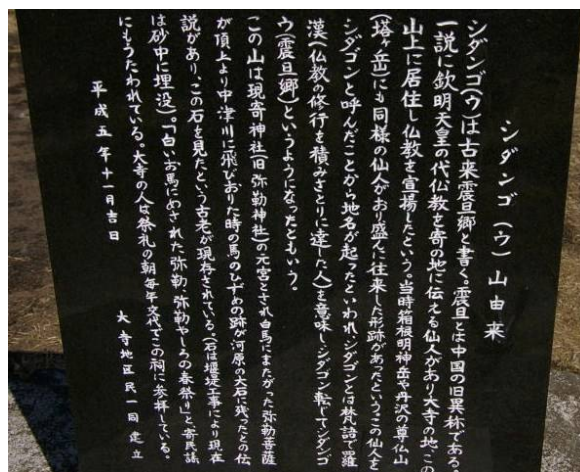
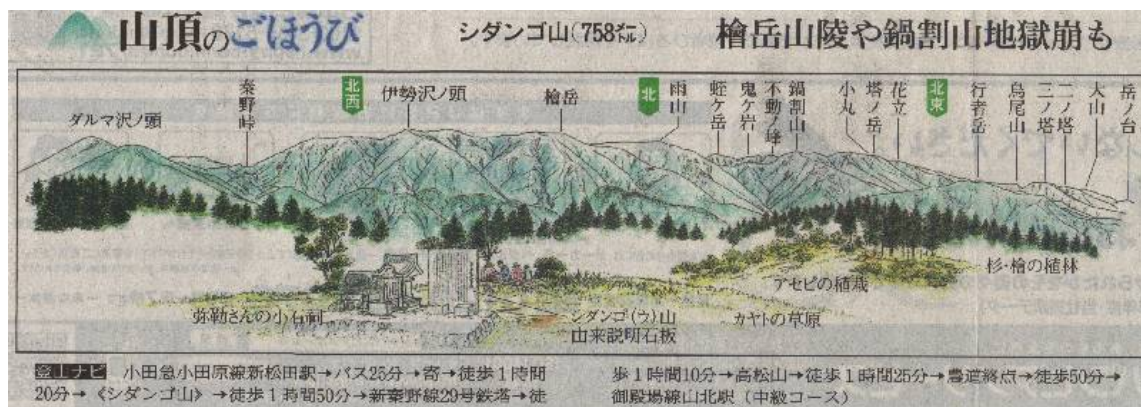
福一行が暮らしたという伝承が残る事実も何よりの証拠である、としている。

参考情報 2

神奈川県丹沢の前山「シダンゴ山 758m」は、古代中国「震旦」に由来する！

丹沢の前山として、手軽に親しまれている「シダンゴ山」は、地元ではシタンゴ、シタンゴウ、ジンダンゴ、ジダンゴなどと呼称されている。

江戸期の「新編相模国風土記稿」に震旦郷が登場するが、震旦とは古代中国のことである。渡来人らによって伝播された文化の一端が、山頂の「弥勒さん信仰」に継承されている。丹沢山系には、徐福一行が不老不死の霊薬を探しにきて住みついたという伝承もあり、「シダンゴ山」は、徐福一行の名付けた山の呼称かも知れない。



参考情報 3

欧陽脩（1007～1072）の日本刀歌には、「其先徐福詐秦氏 採薬淹留艸童老・・・徐福行時書未焚 逸書百篇今尚存」というように、中国では、始皇帝の焚書の難によって、古典の書物が絶滅したが、徐福らが、古典を日本に携えていったため、遠く海を隔てた日本に、かえって散逸しないで先王の大典が保存されているとしている。それが富士古文献に含まれているのかも知れない。

3. 神奈川県鎌倉の円覚寺開山禅僧・無学祖元と徐福

紀伊半島の徐福上陸の伝承地・新宮市には、最初にこの地の徐福の祠に言及した鎌倉時代の禅僧・無学祖元の詠んだ漢詩の碑「徐福祠献晋詩」が保存されている。無学祖元は、鎌倉幕府の執権・北条時宗によって宋から招聘された名僧である。弘安二年(1279)、八代執権・北条時宗の招きで来日。初め建長寺に入り、弘安五年(1282)、円覚寺の開山となる。

注目すべきことは、新宮の徐福祠の建立が、祖元の東渡以前だったということである。無学祖元の詩碑碑文は、「先生採薬未曾回 故国山河幾度埃 今日一香聯遠奇 老僧亦為避秦来」先生薬を採りて未だ曾て回らず 故国の関河幾塵埃、今日一香聊か遠きに寄す老僧亦た秦を避けて来ると為す。つまり、自分自身を徐福に重ねあわせて詠んでいる詩で、当時の中国では、徐福の上陸地は紀州熊野であったと認識されていたようである。弘安4年(1281)頃作られたもので、確かな文献による熊野での徐福伝承の初見とみられている。

4. 秦野宝蓮寺と徐福および無学祖元の関係

秦野市蓑毛・臨濟宗宝蓮寺の縁起書には、徐福や秦始皇帝の話が出てくる。

「後秦の始皇帝29年(BC220頃?)、沙門室利ら18人が、印度から辰旦(秦国)に来た。五大尊、金剛力神などの秘佛をもち来たが、そのとき始皇帝は異俗を嫌って、彼らを殺そうとした。そこで、「徐福」は、「公、仙道を求め欲するなら、殺してはなりません」と上奏し、大悲五大尊の力により宝物は皆大公徐福に遣わされ、18人は皆印度に帰ることができた。その後、秦の始皇帝の裔が彼の五大尊悲像を守護して、80余年にして応神天皇15年甲辰に佛宝物大悲像、五大尊と共に、秦苗裔であると申して本朝に渡来した。

かの秦の苗裔は、東州に下向して、千手観音像を駿河国の有度山に、五大尊は相模の国、足柄上郡に安置された。」宝蓮寺は鎌倉市の建長寺の末寺で、中興の開山・高峰顕日(1316年)は、後嵯峨天皇の皇子で、無学祖元の法を嗣ぎ、鎌倉の諸寺に住山した。高峰顕日が、蓑毛の大日堂に来所した背景には、無学祖元らの徐福の知識を得た上で、五大尊の寺(薬音寺→宝蓮寺)を復興したことが考えられる。

5. 日本の徐福情報と仏教そして相模国(神奈川県)

釈義楚の『義楚六帖』によると、顕徳五年(958)日本僧弘順大師が、「徐福は各五百人の童男童女を連れ、日本の富士山を蓬莱山として永住し、子孫は秦氏を名乗っている」と伝えたところがある。当時日本では、徐福の求めた蓬莱山とは富士山を指し、徐福はこの日本に上陸したのだという説が語られている。徐福の得た「平原広沢」が日本であると指摘した中国初の文献である。その「城郭・日本」という部分に、「日本国は別名を倭国ともいい、東海の中にあり。秦の時、徐福は五百の童男と五首の童女を率いて、この国に止まる…東北千里あまりに山あり、富士と名づけ、別名を蓬莱という。三面は海となり、その山は峻険で、一朶として上に聳え、山頂に火が燃える。日中には、諸宝が流れくんだり、夜には逆に上がる。常に音楽が開こえ、徐福はここに止まる。蓬莱という。今にいたるも、子孫はみな秦氏を名のる…」とある。一方日本国持念弘順大師賜紫寛補は延長五年(927)に寛建の従僧として渡海した真言宗・密教の僧侶だったらしい。

日本人として最初に、真言密教の奥義を究めたのは、弘法大師空海（774-835）で、空海は、15歳の頃、論語・孝経・礼記・春秋左氏伝や、儒教的な「経書」以外の道教的な「緯書」も学び、神仙や陰陽道など雑多な関心をもっていた。華嚴経や雑密（ぞうみつ）に関心が深めたが、東大寺の別当となった良弁（ろうべん）がこの雑密の修行者である。

相模国大山寺縁起によると、大山寺の第三世は、真言宗の開祖・弘法大師であるという。大山山頂の本尊を石尊権現と名づけられたのもこの頃と推定されている。

大山阿夫利神社の由緒書によれば、神社創立は、今から2200余年以前（徐福渡来の時期に合致する）の人皇第10代崇神天皇の御代であると伝えられている。古来より大山は山嶽神道の根源地であり、別名に雨降山、古名を「大福山」と呼ばれていた。大山祇神は、またの名を酒解神（サカワケノカミ）と言ひ、酒造の祖神としてもあがめられている。また、生活の資源、海運・漁獲・農産・商工業に靈験を示されるということは、徐福の特徴をよく反映している。このことから推定すれば、真言宗僧侶の弘順大師寛輔は、弘法大師の教えを受けて、日本の徐福伝承の情報を得た可能性がある。

それも、相模大山寺の住職経験をもつ弘法大師が、秦野において「徐福伝承」を聞き知ったことに、原因がありそうである。特に、大山寺の開山は、良弁僧正である。良弁は秦氏であるとの情報もあり、良弁を通じて秦氏のもつ徐福情報が、弘法―弘順と伝わり、中国の後周の僧・義楚「六帖」に記載されることになったと考えられる。

6. まとめ（日本における徐福伝承の流れ）

秦野には、秦始皇帝に不老長寿の仙薬を勧めた方士徐福が、蓬莱の島を求めて日本の紀伊の熊野に落ち着き帰化し、その子孫が富士山麓に土着し、延暦19年（800）に富士山の大噴火が起こり、大きな被害を受け、やむなく秦野に移住したと伝えられている。

神奈川県徐福伝承は、これら秦氏の流れ、山岳神道や熊野修験道および弘法大師開創の真言宗や臨済宗を中心とした仏教展開の流れにのって、古代から伝わっていたことが考えられる。

九州（串木野、日向、佐賀諸富町）→瀬戸内海（大三島？）→紀伊熊野・新宮→三河湾（熱田、小坂井）→富士山麓（吉田）→相模（秦野、藤野→藤沢、鎌倉）→（八丈島、伊豆諸島）→千葉→秋田→青森小泊、北海道

<発表者プロフィール>

前田 豊（まえだ ゆたか）

1941年兵庫県生まれ。大阪大学工学部修士課程修了。繊維化学会社を経て、前田技術事務所にて情報関連業務に従事。愛知県豊橋市在勤中、古代史に興味をもち、「古代神都東三河」、「倭国の真相」、「消された古代東ヤマト」、「徐福王国相模」を彩流社から出版。この中で徐福の存在が、日本の神話に反映していることを直感し、徐福研究に注力している。

I-2 各地の徐福伝承

「神皇紀」に記されている徐福と「富士古文書」の評価

神奈川徐福研究会
津越由康



1. はじめに

神奈川徐福研究会（田島孝子会長）では前田豊氏を中心に神奈川の徐福に関連する研究を行っています。神奈川県には藤沢の妙善寺に徐福の子孫の福岡家の墓があるほか、秦野、寒川神社、大山など徐福に深い関係があることが分ってきました。

今回、神奈川の徐福研究のきっかけとなった「神皇紀」には徐福がどう記されているかをご紹介します、その元となった「富士古文書」が現在まで引き継がれた経緯と評価についてお話させていただきます。

2. 神皇紀に記されている徐福について

2.1 始皇帝への進言

秦始皇帝3年（BC.219?）春、皇帝が東方を巡回し、朝嶧山から東海を遙かに望んだとき、徐福は「東海の蓬莱・方丈・瀛州の三神山に大元祖々の神仙が住んで居り、不老不死の良薬があります。」と申し述べた。皇帝からその良薬を求めるよういわれた。

徐福は「これを求めるには15年から30年を要します。それ故、相当の旅支度が必要で、金銅鉄砂鉄珠玉及び衣食器具、それに大船85隻が要ります。」と申し上げた。皇帝はその要求通り支度させた。

2.2 徐福渡来

徐福は同年6月、金銀銅鉄、五穀衣服、器具その他諸々の品々、食糧を積んで、童男童女500人とともに大船85隻に分乗して蓬莱山を目指して出発した。しかし海上で蓬莱山を見つけたものの、それを見失い、同年10月に熊野（新宮市）に上陸した。そしてここに留まって不二蓬莱山を探した。3年程かかって東方にそれを見つけ、再び船に乗り、駿河の浮島原（富士市田子の浦）に上陸し、富士山麓の阿祖谷小室家基都（富士吉田市）に到着した。

先ず阿祖山太神宮をはじめ、各七廟に拝礼した。更に、大室の原に止まった後、中室に移った。童男童女五百余人は中室、或いは大室に住居を定めた。

2.3 徐福一行

徐福・妻福正女・長男福永・姫白蓮女・二男福満・三男徐仙・四男福寿・長女天正女・二女寿安女・三女安正女・孫一丸・同次正女・以上12人。

老男35人、老女45人。妻ある男138人、夫ある女145人。青年男子41人、成年女子43人。幼児男子51人、幼児女子48人。以上合計558人であった。

2.4 徐福死去

BC.208年2月8日、徐福は中室において亡くなり、中室麻呂山の峰に葬った。神代からの事跡を世に伝え、文学を教え、機織（はたおり）を人に授けるなどわが国に貢献するところが大きかったので、時の人は神祇のように厚く祀った。中室の麻呂山の徐福神社がこ

れである。

2. 5 徐福出生

徐福は軒轅氏の四男忠顕氏の子孫である。忠顕氏 5 世の子孫の萬正氏は夏禹王に仕え農作事業を受持った。

萬正氏 4 8 世の子孫、正勝は文学を学び地理に詳しく周の武王に仕えた。徐の姓を頂き楚の国の首長に任ぜられた。正勝 2 7 世の子孫の子路は孔子の門に入り、子孫代々儒学で名を成した。子路から 5 世後の范睢は秦王に仕え、斉知の娘実永婦人を妻にして徐福を生んだ。

徐福は名を徐子（又は徐市）といった。徐福はその通称名である。広く儒学を学び後、天竺（インド）に渡り仏教を 7 年に亘り研究、勤勉に励み一切の経の奥義を極めた。後、薬師如来の仏像を携えて帰国した。秦王朝に仕え功労も多かった。官位も次第に昇進、非常に重用されて宮中仕えの女官福寿婦人を頂いた。通称名を福正婦人という。徐永の女である。

2. 6 徐福子孫

長男福永は父の跡を継ぎ、名を福岡と改めた。

二男福萬は名を福島と改め、父の遺言により最初に上陸した紀伊国熊野に一族郎党五十余人を連れて移住し、その地を開墾する事になった。後になってその子孫は社祠を造営して徐福の霊を祀った。熊野山の徐福神社がこれである。

三男徐仙は福山、四男福寿は福田と改めた。

息子達並びに童男童女の子孫は、大いに阿祖谷の内外で増え栄えた。多くは秦を姓とし、又、氏に福の一字を付けた。

2. 7 徐福直系

第四代福仙は阿祖山太神宮の神官に任命され、子孫代々その職を継承した。

延暦 1 9 年（800 年）富士山の大噴火により、元宮七廟総名阿祖山太神宮の大宮司は第三十代福岡徐教と共に、徐福伝・寒川日記・その他の古文書及び宝物を擁護して相模国に避難し、寒川神社に宝蔵を造営して持って来た古文書・宝物を納めた。以後、福岡徐教はその地に居住し同神社の神官になり、宮司と共に代々、古文書を保護した。

以上が神皇紀に記載されている徐福についての概要である。

3. 富士古文書と神皇紀について

3. 1 富士古文書とは

富士古文書とは山梨県富士吉田市の宮下家に保存されていた日本の古代史をはじめ不二阿祖山太神宮に関する約 750 点の古文書群である。徐福が編纂したという伝承により「徐福文献」ともいわれている。

徐福が到来した時、文字をもち歴史を伝える役割をしていた 3 6 神戸（36 家系）が存在していた。彼らがもっていた記録や伝承、口伝などにより、徐福は渡来以前の日本の超古代史を編纂した。徐福の死後もその子孫がその後の歴史の記述を加えていった。

その後、天智天皇 4 年（665 年）中臣藤原物部麿が腐朽しかかっている徐福伝を謄写した。

そして、これらの古文書は阿祖山太神宮の宝物として保存されていたが、800 年に富士

山大噴火があり、宝物を持って相模国に避難、そこに移住し、寒川神社を創建し、伝来の古文書をここに保管した。そのため「寒川文書」とも呼ばれる。

ところが、1282年、相模川の大洪水のため寒川神社は流され、古文書も流失した。

幸いなことに小室浅間神社の49代宮司・宮下源太夫義仁（1192年逝去）が10数年にわたり筆写していた古文書の写しが富士山元宮大神宮に伝えられていた。（複写古文書）

しかし、この複写古文書もその後、足利氏により焼却されるなど幾つかの災難にあったが、焼け残った古文書（写し）を家人が隠し、宮下家の棟梁に密閉し隠蔽された。

（この間、66代宮下宗高（1662年戦死、78才）は腐朽しかかっている複写古文書を新たに複写させた、と記録に残っている。）

さらに1863年、隣家から出火、多くの宝物・古文書は焼失したが、この時、棟梁に結びつけられていた古箱が刀剣等と共に裏の小川に沈められた。古文書の一部は渋紙に包んでいたため難を逃れた。そして1883年（明治16年）開封された。

そして、三輪義熙が30年にわたり、富士古文書を調べたところ、古事記・日本書紀とは異なることが多く記されていることに驚き、これを世に知らせるため「神皇紀」を大正11年（1922年）に出版した。

3. 2 古文書に記されていた驚くべきこと

①日本の神々の先祖について、古事記・日本書紀より古い神々の系図が記録されていた。

開闢元始の神は天之峰火夫神（アマノホ）といい、この神から22代は日本列島の外にいた。

この22代目の神を高皇産霊神（タカミミ）諡天之神農氏神、諱農作比古神という。

高皇産霊神（タカミミ）は2人の子に「日の本にある海原にこの世に二つとない蓬莱山がある。これに天降り蓬莱国を治めよ。」と命じた。

そして国狭槌尊が日本に上陸し、不二蓬莱山に着いた。この山は火が燃え、日に向かっているため、日向高地火の峰と名付け、富士山の麓に止まり、その大原野を高天原と名付けた。

②高天原とは富士高原で、ここの不二阿祖山太神宮で代々の天皇即位式が行われていた。

その後、日子火出見尊（ヒコホ）の時代に西大陸より大軍が攻めて来た。そこで内地を統治しつつ外寇を防ぐために、神都を富士高原から九州に遷都することにした。

③ウカヤフキアエズ尊が一人ではなく、同じ諡名を継承して51代続いていた。

④神皇の名だけでなく、後の名も記録されている。

⑤神話的な記述が無く、史実のように記されており、特に神武東征の場所は詳細である。など

3. 3 神皇紀の現代語訳

「富士古文書」は大正11年の三輪義熙著「神皇紀」の出版によって初めて世に紹介され、この時、国史研究にとっての大発見として大反響となり、これを研究するために内大臣や東大教授を顧問とする財団法人富士文庫が設立されたが、ある学者が偽書であると判定したためこの組織は解散となり、「富士古文書」は再び埋もれてしまった。

神奈川徐福研究会では、富士古文書が徐福が編纂したことを知り、「神皇紀」の現代語訳に取り組んだ。

そして、徐福が遺した貴重な日本の古代の記録を紹介したいとして、現代語訳「神皇紀」を2011年3月に出版した。

4. 富士古文書の評価

富士古文書は、徐福が2200年前に、神々の子孫がもっていた記録や伝承、口伝などにより、日本の超古代史を編纂したものがはじまりである。(古事記、日本書紀は1300年前に編纂されたもの) 徐福の死後もその子孫がその後の記述を加えていったもので、最古の不二阿祖山太神宮の経緯や富士山噴火の記録などもあり、貴重な古文書群といえる。

残念ながら、前にも述べたように、原本は洪水で流失して残っておらず、何度も書き写され、さらに時の権力によって焼かれたり、火事にあたりして現存する古文書はその残りである。

一部に書き写す際に手が加えられたカ所も見受けられるので、「原本を忠実に書き写していないものは偽書である」というアカデニズムの判断からすれば「偽書」と評価されてもやむを得ないと思われる。

しかし、富士古文書は数百の古文書群の総称であり、未だ古文書の全容が判っていないのが実状であり、その全てを「偽書」と断定してしまうのは早計であると思われる。

この古文書は、記紀の神話を、いくらかでも歴史として置き換える可能性を秘めており、この研究は重要であると思われる。

5. おわりに

私たち神奈川徐福研究会では、富士古文書が特に徐福が編纂したといわれていることを信じ、この中に徐福渡来の貴重な情報が埋もれている可能性があるとして、この古文書の研究を継続している。

現在、数百の古文書の中から、徐福が録取したといわれている「徐福十二史談」と、徐福渡来について記されている古文書を探しながら、研究会の10名でその翻訳に取り組んでいる。

<著者プロフィール>

津越由康 (つこし よしやす)

1947年 和歌山県新宮市生まれ 蓬萊小学校時代「徐福の墓」や「阿須賀神社」などで遊ぶ。日本大学理工学部卒、東京急行電鉄・富士高原勤務。

徐福関係の活動: 神奈川徐福研究会会員、2010 徐福フォーラムで発表(連雲港市贛榆県)、2011 神皇紀(徐福文献)現代語訳共同出版、関東新中会(新宮出身者の会)で徐福について講演、その他2012年8月第一回神社検定合格。

I-3 各地の徐福伝承

北海道にもう1つの徐福家系図

徐福研究家、作家
池上正治



1. はじめに

もう十年前になるのだが、2002年11月、徐福のアジア交流は大きく盛り上がっていた。「徐福を語る国際シンポジウム実行委員会」（代表＝山本弘峰）が、中国と韓国から徐福研究家を招き、日本の徐福研究家たちとともに、日本各地を講演旅行した。

それは徐福に関心をもつ者たちの交流を促進すると同時に、日本各地で徐福の知名度を高めるために大きな役割を演じたのだった。

ここでは、北海道であったハプニングと、その続編について報告する。

2. 北海道で

この講演旅行には「徐福ロマンツアー」という名前が付けられていた。和歌山県の新宮からスタートし、京都（伊根）・北海道（富良野）・青森（小泊）・東京（中野）などでの徐福講演と交流が予定されていた。

北海道の富良野といえば、ラベンダーのパッチワークなど大自然を生かした観光地、と理解していた。しかし山本さんに案内されて訪れた小さな村には、これまた小さな静修熊野神社があり、そのご神体は一對の人形であり、村長の説明によれば、それは童男童女であるという。この説明に、約50人の参加者（日本・韓国・中国）は驚喜した。

富良野で行われた講演交流の会場では、さらに大きな興奮が待っていた。日韓中の3国の代表がそれぞれ徐福に関する発言をした後、フロアからの質問やコメントの時間になった。2～3の質疑応答があった後のことだった。

年配の男性が手をあげ、司会者の許可をえて壇上にのぼり、話し始めた（下、右3）。

「旭川からきました秦勤衛（はた・きんや）と申します。わが家の言いつたえでは、祖先は徐福さんであり、それを記録した家系図がこれです」といいながら、巻物を広げた。その幅や約30センチ、長さは約2メートル。秦さんの指は、巻物の上部を指していた。

会場は一瞬、水でも打ったように静まりかえっ



た。やがて騒然となった。秦家は一代前に、秋田県から北海道へ移り住んだという。秦さんによれば、家系図の冒頭は、「家伝曰〇祖秦氏之儀〇〇始皇帝家臣徐福云人流也」（〇は判読不能）とあるという。

3. 秦家表敬

秦勤衛さんは2002年当時、70歳だった。懇親会の席上で名刺交換をし、こちらから「一度、ゆっくり拝見したいものです、家系図を」とお願いすると、秦さんは「いつでもどうぞ、いらっしゃい、旭川へ」と快諾してくれた。

北海道の旭川は、遺憾なことに、東京からすこし遠く、なかなか約束が果たせないでいた。思いきって、秦勤衛さんの名刺にある自宅電話を鳴らしたのは、2010年5月のことだった。電話にでたのは中年とおぼしき女性で、こちらの用件にたいし、

「あの、父とのことのようにですが、3年前に亡くなりまして・・・」と。娘さんだった。「父がお約束した家系図は、もちろん保存してありますので、ご覧ください」とも。



秦家の床の間に飾られた「家系図」と、秦さんの遺影

その数日後、羽田から旭川に向かう飛行機に乗りこんだ。旭川の空港から秦家まではタクシーで。その秦家では、故・勤衛さんの娘さん、その連れ合いなどが集まっていた。

「お爺ちゃんがよく話していた家系図を、わざわざ東京から見にくる人がいるという、いったいぜんたい、どんな人？」

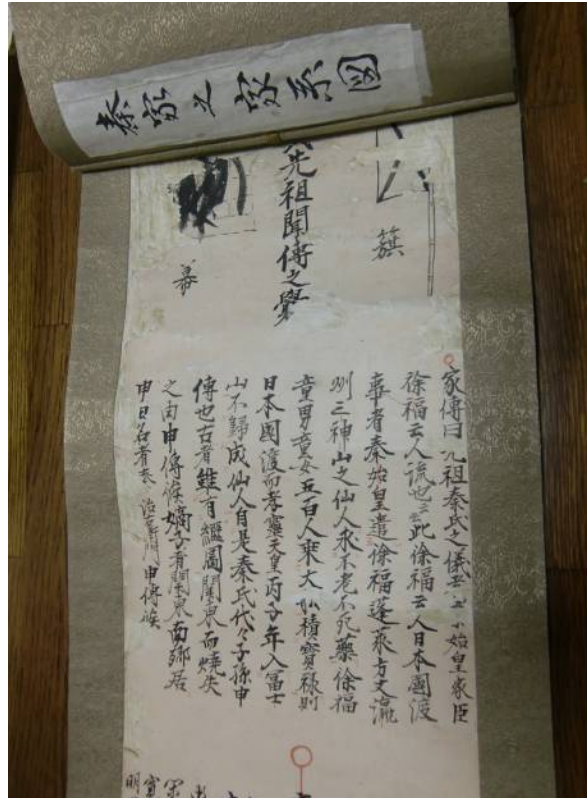
そんな好奇心のほかに、彼らにはもう1つ意図があったようだ。

それは家系図の解説をして欲しい、というものだった。先代が大切にし、ときに口にしていた家系図のことは、子供たちはさほど関心をもっていなかったという。勤衛さん亡き後、どうしたものか？ 漢字だらけで読むこともできない・・・という状態だった。そんな折

り、旭川まで、徐福のことを研究しているという東京の人がくるという、まさに渡りに舟とばかりで、親戚の者たちが集まった、そんな状況だった。

4. 冒頭部分

秦家の家系図は、よく表装され、ていねいに保管されていた。家族らの立ち会いのもと、それをテーブルのうえに広げていく。冒頭に「覚」(おぼえ)があり、その下には累代の系図がある。最も肝要な部分で、われらが関心をもつ「覚」は、以下のようなものである。



㊦ ㊦ 先祖聞伝之覚

家伝曰(先)祖秦氏之儀(者)(秦)始皇家臣

徐福云人流也 云云 此徐福云人日本国渡
事者秦始皇遣徐福蓬莱方丈瀛
州三神山之仙人求不老不死薬徐福

童男童女五百人乗大(船)積宝祿則

日本国渡而孝霊天皇丙子年入富士
山不帰成仙人自是秦氏代々子孫申
伝也古者雖有繼図関東而消失
之由申伝候嫡子者関東南郷居
申 ? 名者秦治右衛門申伝候

○の内は剥落しており判読不能だったが、池上が補った。最後の行の2字目は、不明。

最初の行で、秦氏の出自が、秦の始皇帝に仕えた徐福であることを明記している。それが日本に渡ったのは、命により、童男童女を率いて、三神山に不老の霊薬を求めたからだ、と。そして孝霊天皇（日本神話で第7代天皇、BC3世紀）の御代に、富士山で帰らぬ人となり、その末裔が関東の南部に居住し、その氏名を秦治右衛門という・・・と。



秦家の皆さんと、筆者（左1）

5. おわりに

この「秦家之家系図」の「覚」の前半の部分は、日本各地の徐福伝承とほぼ同じ内容である。最後の3行が、この家系図の所有者の所在を明らかにしている。

年号が2番目に出てくるのは、「覚」のすぐあとの部分で、寛永三年とある。これは江戸のごく初期、1626年のこと。関ヶ原の戦（1600年）は、日本の社会と統治を大きく変えたが、この秦一族は思うに、その変動のなかで有利に身を処したのだろう。

とまれ、日本の最北の地・北海道にも、徐福を遠い祖先と明記する家系図があったことに驚喜するのは、私ひとりではないだろう。

<著者プロフィール>

池上 正治（いけがみ しょうじ）

1946年生まれ。東京外語大学中国科卒業。作家・翻訳家。 s_ikgmi@ybb.ne.jp
中国に関する著述・翻訳・講演のかたわら、東アジアの交流（文化・医薬）にも努めている。
著書に、『徐福』、『気』の3部作、『龍と人の文化史百科』、『世界の花蓮図鑑』（共著）など。
訳書に、『徐福と始皇帝』『徐福 霧のかなたへ』『中国慈城の餅文化』など。 総計60余冊。

I-4 各地の徐福伝承

青森県小泊の徐福伝説

～最近の調査で判ったこと～

小泊の歴史を語る会会長

柳澤 良知



1. はじめに

小泊村は2005年（平成17年）3月、中泊町と合併して「中泊町」となり、徐福漂着地は青森県北津軽郡^{なかどまり}中泊町^{こどもり}大字^{したまき}小泊字下前地区となります。

筆者が初めて徐福伝説を知ったのは、中学校の頃、学校の教師であり、郷土史家（寺の住職）である西山豊先生。その後、相内村の学校の教師であり、郷土史家である豊島勝蔵先生が徐福像を知らないかと訪ねて来ました。この頃から徐福に興味を持つ。その後、尾崎神社の親戚の尾崎貞雄氏（宮司ではない）が、徐福ではないかという写真を見せてくれたときから、調べてみようと言う気持ちになりました。

1977年（昭和52年）に横浜市の徐福研究者山本紀綱先生が徐福調査のため来村時、案内しました。その時、徐福伝説の地元に住む筆者が、徐福の研究者達が訪ねて来ても《知りません、存じません》では大変失礼だと痛感。それから西山豊先生（故人）の長男徹先生（中学校の教師・寺の住職）と調査に掛かりました。調査をしている内に、徐福伝説の大事さ、面白さを知り、徐福の魅力に引き込まれて行きました。

きっかけは、先ず、地元の人達が郷土の歴史を学ばねば駄目だということからです。

我が郷土にはロマンと夢いっぱいの徐福伝説があることを誇りに思い、後世に伝えて行くことが筆者の責務だと思っています。

そこで最近調査で判ったことなど紹介したいと思います。また、小泊の徐福伝説についても一寸と述べたいと思います。

2 小泊の立地と漂着海岸

小泊地区の位置：青森県の北部、津軽半島の北西部で北端に位置します。北は津軽海峡を隔てて北海道松前半島に対峙、西は日本海、東は竜飛崎、南は五所川原市相内です。

漂着経路：コースは北航路で対馬海流に乗り日本海を北上し、津軽半島の小泊崎に漂着。地元では「小泊崎」を「権現崎」と呼ぶのが一般的です。

漂着海岸：小泊地区から4km離れた下前地区の「小浜海岸」一帯の「千艘の間」（地元では「ガゴ」）だと言われています。江戸時代北前船が停泊に利用した自然港です。

「権現崎」は遠い昔から航海の目印として、また、神々が宿る岬として信仰されています。229mの断崖絶壁の頂上には、徐福を祀る尾崎神社が鎮座。岩頭からは海上に浮ぶ岩木山、北海道、龍飛崎などの山々が一望出来る景勝地です。津軽国定公園に指定され九州長崎半島の野母崎のと共に我が国の二大名崎（めいき）と言われています。



写真1 権現崎

3 最近の調査で判ったこと

徐福が権現崎の山（尾崎山という）で求めたと言われている薬草は、「権現弟切草」・「行者ニンニク」（別名アイヌネギ・アイヌ語でキトピロともいう）・トチバ人参（竹節人参）で、いずれも滋養強壮剤です。その中で「ゴンゲンオトギリソウ」は、権現崎でなければ生息しない大変貴重な薬草であることがわかりました。

① ゴンゲンオトギリソウ（権現弟切草）

植物研究家長尾キヨ著 花づくりを楽しむ雑誌「ガーデンライフ・津軽の植物」（1983年1月号誠文堂社発行）によると（抜粋）、植物学者である京都帝大教授、小泉源一博士が、外遊の途中、パリ（フランス）の植物館で薬草の標本を発見した。それには「大日本青森県北郡小泊山から採取」とあった。

このオトギリソウの標本は、当時、日本植物採集第一人者であったカトリック教宣教師フォーリー氏が最初に権現崎から採集したオトギリソウの一種だったのである。

関東、関西で発見されない貴重な薬草である。我が国では小泊村のみにある薬草というので植物学上よい研究資料となっている。



写真2 ゴンゲンオトギリソウ

そこで、昭和13年7月27日、小泉博士はパリ植物館所蔵、フォーリー氏が採集したオトギリソウの一種を研究するため、遠路の京都から津軽半島北端の小泊村まで足を運んだ。翌日、相内営林署小泊事務所の村上さんに案内されて権現崎へ登る途中休憩した際、村上さんが、傍の草を引き抜いて「こんな草ですか」と差し出した。小泉博士は「これだっ」と驚嘆した。周囲には沢山生えていた。博士は必要な株数を野冊に収めて、あとは大事にしておこうと残した。

このオトギリソウは、小泉源一博士によって権現崎に生えているということから「ゴンゲンオトギリソウ（権現弟切草）」と命名された。それから後年になって木村陽二郎氏により日本産オトギリソウ科植物の総点検がなされ、エゾオトギリの一型であろうということになり現在に至っている。よってゴンゲンオトギリソウは、現在はエゾオトギリソウという名前である。

尚、昭和13年はシナ事変勃発の翌年だったので、権現崎は国防上の要塞地帯に指定され電波探知所があって、一般の人は通行禁止だった。博士はスパイにまちがわれ逮捕され、鉄格子に入れられた。警察官に新聞紙にはさんだゴンゲンオトギリソウを見せて説明しても許してくれなかった。

その内、京都の警察署、京都帝大から電報が届き、偉い植物学者であると身分が判明し、釈放されたと言うエピソードが残されている。ゴンゲンオトギリソウは普通のオトギリソウとはちがい、花は大きく径約3センチ位で6～7月に開花する山吹色（黄色・黄金色）の美しい花である。と教えてくれました。

尚、「権現弟切草」命名由来：昔、仲のよい兄弟がいた。兄は、弟に大事な薬草だから誰にも教えてはならぬ、と言ったのに弟が友達に教えたので、弟を切り殺したと言われていた。止血にも効くという。

② トリカブトの群生

2012年4月下旬、青森市森林博物館主催で「徐福伝説と権現崎の植物観察ツアー」を実施したところ、青森市から90名の参加者が来ました。権現崎頂上付近の山一面がトリカブトで覆われていました。津軽植物会の木村啓会長の話によると、“このようなトリカブトの群生は見たことがない、おそらく日本でも権現崎以外はないだろう”とのことに、筆者（柳澤）も驚いてしまいました。

トリカブトは猛毒で地元ではブシ（附子）と呼んでいます。秋には青紫色で独特の形をした花をつけます。縄文や弥生時代に、毒を矢に塗って動物の狩りをして生活を営んでいたロマンを思う時、徐福のことも浮んで来ます。

③ 海岸線のブナの巨木

権現崎頂上近くにはブナ林があります。海岸線でしかも、このような高い山に幹周り3m以上のブナがあることは大変貴重だとのこと。全く無学の筆者は、山だから木やトリカブトが生えているのは当然かと思っていました。ところが、権現崎は植物学的にも大変大事な山だとのこと。以上のように徐福上陸の岬はロマンでいっぱいです。

4. 徐福は「航海の神」として祀られています

70歳で他界した徐福は、「航海の神」「海の神」の守護神として尾崎神社に脇侍として祀られています。徐福像は6.5cmの一木造りの立像です。漁師は、初漁や沖出しの時は、権現崎の下で御神酒を海に注ぎ船を旋回させながら、大漁と海上安全を祈願する習慣があります。徐福の教えが現在でも生活の中に生かされているのです。



写真3 徐福石像

5 徐福の顕彰

- ・1995年（平成7年）7月、権現崎駐車場に「徐福上陸の岬」の標柱建立。
- ・1998年（平成10年）小泊村議会 中国「徐福」研修。その後、徐福像建立議決。
- ・2002年（平成14年）11月、権現崎駐車場に徐福石像建立。

除幕式には「秦の始皇帝と徐福を語る会」会長山本弘峰氏、「中国徐福会」会長李連慶氏、日本の三善喜一郎、笹山直衛、田島孝子、前田豊、遠志保、石川幸子、鳥居貞義の各諸氏ほか国内外の徐福研究家達30数名が列席。

祝詞の最中に摩訶不思議なことが起きる・・・

徐福像は、津軽に上陸し左手をかざし、故郷を遠望。右手には中国皇帝のシンボルである龍を携え、これから不老不死の仙薬を探そうと固い決意の勇壮な姿です。この龍は

権現崎にとどまり、飛龍として地域の守護神となりました。3.4mの白御影石の立像、台座には薬草のレリーフを設置するなど小泊ならではの独自の徐福像誕生。

原画：青森のねぶた師竹浪比呂央、彫刻：中国の朱炳聰、解説文：柳澤良知。

翌日、「日中韓徐福を語る国際シンポジウム」が盛大に行われました。

- ・2003年（平成15年）、ライオン海道遊歩道に徐福像のレリーフ8枚設置。
- ・2004年（平成16年）地滑りのため徐福像下前地区の「徐福の里公園」へ移設。
- ・2008年（平成20年）「徐福の里公園」内に「徐福の里物産品直売所」開店。

徐福まんじゅう・徐福三升漬・ドリンク権現パワーはじめ新鮮な魚海藻を激安販売。

徐福、「なかどまり祭り」に出陣、徐福音頭（唄：鳥羽一郎）の流し踊りで祭りを盛り上げるなど町おこしに大貢献し、ビッグパワーを与えています。

津軽権現崎から友好の輪が広がるよう今後も努めてまいります。

<著者プロフィール>

柳澤 良知 （やなぎさわ よしとも）

1939年、青森県小泊村に生まれ。五所川原高校卒業。病院の臨床検査技師、教育次長、企画課長、小泊村史編纂室長及び作家太宰治の小説「津軽」の像記念館初代館長など歴任。現、小泊の歴史を語る会会長、中泊町文化財審議委員会委員長、吉田松陰・宮部鼎蔵に学ぶ会会長。著書「小泊のあゆみ」「小泊村史下巻・徐福伝説」「吉田松陰・宮部鼎蔵津軽の旅」「青森県軟式野球65年のあゆみ」ほか。

I-5 各地の徐福伝承

秋田県男鹿半島の徐福伝承 ～観光資源として徐福の取り組み～

秋田県男鹿温泉 元湯雄山閣会長
山本次夫



1. はじめに

不老不死の薬を探し求め、東方に向かった秦の始皇帝の使臣「徐福」が、男鹿半島に上陸したという約2200年前の伝説を基に、地元有志らが「徐福塚」を復元した。伝説を後世に伝え、観光資源としても生かそうと、江戸時代の紀行家が残した記録を手がかりに作った。有志らは「伝説の多い男鹿で、新たな魅力をPRしたい」と意気込んでいる。

(注) 本論文は、読売新聞 平成17年8月16日 秋田版2「徐福塚」地元有志が復元(男鹿 2200年前の上陸伝説基に)のほか、男鹿半島の徐福伝承資料をとりまとめ、再編集したものである。

2. 男鹿の徐福伝承

中国の歴史書である司馬遷「史記」によると、徐福は秦の始皇帝の命を受け、童男童女数千人を乗せた船で海を渡り、不老不死の薬を探しに東方に旅立ったとされている。

来訪伝説は、青森から鹿児島まで20か所以上に残り、青森県小泊村には高さ約3mの徐福像が建てられ、和歌山県新宮市の徐福公園にも徐福と七人の重臣の墓が建立されているほか、佐賀市には、健康と長寿をテーマにした薬用植物園に「徐福長寿館」が建設されるなど、いずれも観光名所となっている。

男鹿の徐福伝説を裏付けるのは、江戸時代後期に各地を旅した紀行家・菅江真澄の「男鹿の嶋風」である。

現在の男鹿市・門前地区の鳥観図とともに、「古、渤海及び鉄利の人一千百余人が吾国を慕い来て、出羽国に置き、衣食を給して還した、と続日本紀にある。…この徐福の塚など、その当時祭ったのかもしれぬ」との記述がある。県内の郷土史研究者らで組織する「菅江真澄研究会」(亀井宥三会長)によると、1810年(文化7年)ごろに男鹿半島を訪れた際の日記だという。



▶菅江真澄が描いた門前。中央に徐福塚が描かれている。(白い円内)

男鹿の徐福伝説の実情

徐福は、薬（薬草）を求めて様々な土地を旅したためか、日本各地に徐福が訪れた、上陸したという伝説が残っている。そのうちの 하나가、秋田県の男鹿である。

江戸時代の紀行家・菅江真澄は「男鹿の嶋風」の中で、図絵と文章により「徐福塚」と呼ばれる石を記録している。その場所は門前の五社堂下である。

しかし、その塚（石）はどこへ？

「徐福塚」については「かつてそう呼ばれた石があった」と話す古人もいるが、五社堂の境内は大きく様変わりし、あるいは道路建設などの工事で失われてしまったのか、今では探しようもない。



写真1 徐福渡来の地門前で記念写真を撮る人々

3. 男鹿の「徐福塚」復元

男鹿市菅江真澄研究会副会長で、旅館経営の山本次夫（筆者）らが呼びかけ人となり、徐福塚建立実行委員会（菅原孝志委員長）が発足したのは2005年春。工事などで塚が撤去された可能性が高く、復元することを決めた。

塚には「男鹿の嶋風」の図をもとに、大きさや形の似た地元の岩を選んだ。大きさは幅1m、奥行き50センチ、高さ1.25m。本来あったとみられる場所から10数m離れた、赤神社五社堂駐車場脇の市有地に設置。約40万円の費用は、有志らの募金などで賄った。

男鹿には、中国の漢の武帝をまつたとされる廟（びょう）もあり、海外と結びついた伝説や言い伝えが多い。「伝説を持つ各地の人たちと交流も深め、徐福サミットを開きたい」と山本さんは話している。

そもそも、今から2,200年前（紀元前219年）、秦の始皇帝の命により不老不死の薬を求めた徐福が上陸した地の一か所が、秋田県男鹿半島門前地区だと言われている。

江戸時代の紀行家菅江真澄は、著書の「男鹿の嶋風」の中で図絵と文章により、この山（赤神山）に「徐福塚」と呼ばれる石を記録している。

自分の故郷を大切にすることを続け、地域の文化歴史に根差した宿づくりを经营理念と位置づけ、埋もれていた男鹿の観光資源を発掘し続けて25年。徐福塚を復元したのもその一つである。

徐福塚を建立し、徐福の由来や菅江真澄の文献記録及び徐福漂着地として、国指定文化財の五社堂とともに、往時をしのび故郷の歴史を紐解き、男鹿が誇れる貴重な文化遺産として広く紹介を助長していく。このことに男鹿観光の一層の進行と併せて、日中友好など国際交流の推進にも資するものとする。

復元するには、県と男鹿市の許可申請が必要であった。又、真澄が描き残した塚はどこ

にあるのか。当時と地形が変わってしまい、探すのに大変な苦勞をした。結局それらしい石は見つからず、真澄が描いているのと一番よく似た門前の石を使って、建立することになった。

平成17年8月7日。男鹿徐福塚復元完成式が関係者各位のご協力を頂き、下記復元実行委員会メンバーとともに建立にこぎつけた。



写真2 復元された徐福塚



写真3 徐福塚建立記念式典の状況

徐福塚建立記念式典

徐福塚建立実行委員会 事務局／雄山閣 男鹿市北浦湯本字草木原52-1

とき：平成17年8月7日（日）午前10時30分～

ところ：赤神神社五社堂駐車場脇

参加者

- ・男鹿市観光協会長
- ・男鹿市観光協会門前支部長
- ・男鹿市門前町内会長、役員
- ・男鹿市市議会議員
- ・赤神神社宮司
- ・男鹿市費江真澄研究会会長、副会長
- ・秋田中国学会会員
- ・男鹿市教育委員会
- ・費江真澄の宿館主 など。

4. 「徐福塚」復元五周年記念公演会

平成22年8月1日には、徐福塚復元五周年記念として、記念公演会を開催した。

講師に徐福研究の国内第一人者であり作家でもある池上正治先生を招き、男鹿徐福フォーラムを男鹿市長、男鹿市議会議長、男鹿市教育長らにご出席賜り、大盛況に終えることが出来た。

また、この徐福フォーラムを開催したことで、一気に徐福像の認識が広がり、男鹿の観光スポットとして一躍脚光を浴びるようになった。当然ながら徐福塚案内の機会も一段と増えた。

私は会場で、ご参加の皆様の前で、男鹿徐福塚復元10周年記念は、男鹿半島で、中国、韓国、日本の徐福ゆかりの地と「世界徐福サミット男鹿大会」をと声を大にして叫んだ。

日本の他の徐福伝説伝承地区から、漏れて後れを取っていたが、皆様からのご教示を仰ぎ、徐福のロマンを追い求めて男鹿の観光振興の為努力する所存である。

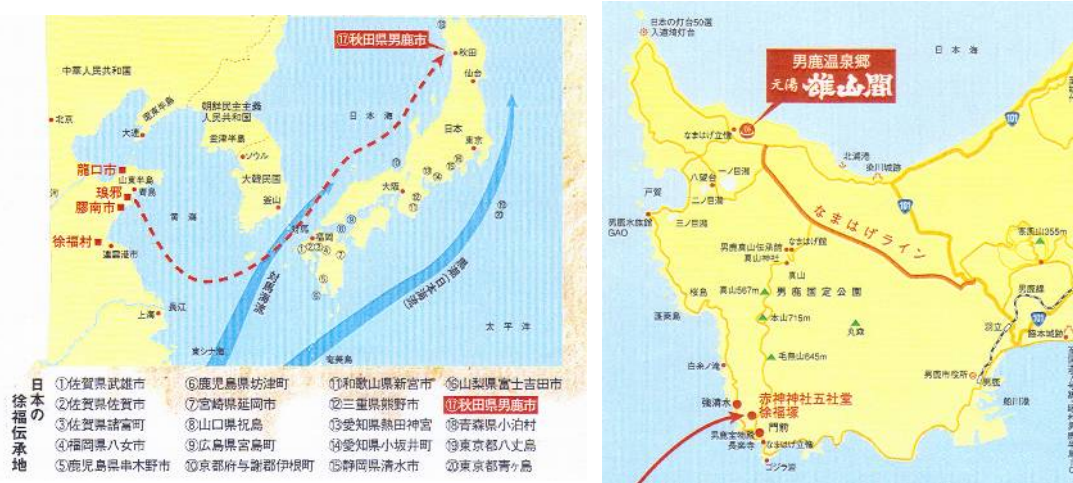
秋田県男鹿半島は、漢の武帝、蘇武の墓、徐福、蓬莱島などがあり、中国とは実に深い関わりがある。

参考資料

報道・秋田さきがけ（秋田読売）、元湯雄山閣のチラシ、池上先生の講演会写真、山本の式典挨拶、フォーラムのお礼のことば、神事、観光客案内、徐福渡来地の標柱

5. 徐福渡来の証（男鹿門前～不老不死薬を求めて～）

『徐福』は不老不死の薬を求め、様々な場所を旅した為か、日本各地に徐福伝説が残されている。現在判明している箇所だけで20箇所以上にも及び、そのうちのひとつがここ男鹿なのである。



男鹿市門前町には『徐福』渡来伝説が残されおり、それを示す遺物を記録した人物が菅江真澄である。

江戸時代の紀行家「菅江真澄」が編纂した「男鹿五風（金風（秋風）／春風／鈴風／嶋風／寒風）」という五冊の紀行文の嶋風の中に、図絵と文章により『徐福塚』と呼ばれる石塚の所在を記録していた。

記録の調査によると『徐福塚』は、男鹿市門前町にある赤神神社五社堂下方付近にあったようである。

平成17年8月に、この地に伝わる『徐福伝説』を後世に伝えるべく「菅江真澄」が残した記録を参考に地産の門前石で『徐福塚』を復元建立した。

男鹿と不老不死薬

何故男鹿に来たのか？ 今から2200年前には本当に不老不死の薬が男鹿にあったのか？

そもそも太古の人々は不老不死を信じていたのかどうか？ それらの疑問に対しては、未だに明らかになっていない。

「不老不死」＝「不老長寿」＝「延命長寿」だとすれば、菅江真澄編纂の紀行文、男鹿の春風に解決に結びつくヒントとして「薬草」について記されている箇所がある。

菅江真澄は男鹿の代表的な薬草として、オウレン・ナツトウダイ・ウスパサイシンの三草を男鹿の春風に記している。

6. 歴史浪漫・郷里の男鹿の魅力

男鹿を語る上で「なまはげ伝説」は欠かせない、それだけでは歴史浪漫の郷里たる男鹿の魅力は伝えきれない。紹介した徐福伝説のほかに、太古の日本の心象風景を思い起こさせる数々め化石類の発見や、縄文・弥生時代の人々の生活を伺わせる遺跡遺物の発見など、男鹿の地は日本書紀にも記されているように、歴史浪漫に溢れている。

また、江戸時代の希代の紀行家・菅江真澄も大いに、男鹿の魅力とその足跡と紀行文で後世に残している。

古代から現代に至る咄で歴史と浪漫に溢れた男鹿の地で、いにしえを偲ぶ見聞旅人になってみてはいかががでしょうか。

<著者プロフィール>

山本次夫（やまもと つぎお） 秋田県男鹿温泉 元湯雄山閣会長

男鹿の観光振興にあらゆる分野にて指導的な立場で活躍中。特に、菅江真澄（江戸時代後期の紀行家）の足跡を活かした観光振興に力を注いでいる。

なまはげの湯 露天岩風呂の宿 男鹿の食文化の宿 秋田県男鹿温泉郷元湯 雄山閣
〒010-0687 秋田県男鹿市北浦湯本字草木塵 52 TEL(0185)33-3121 FAX(0185)33-3122

URL <http://www.namahage.ne.jp/yuuzan> E-mail yuuzan@namahage.ne.jp

徐福渡来の地・門前への徐福塚建立記念として、「徐福タンポ」を創作。



富士山と徐福 ―その諸相―

富士山徐福学会創立者
元帝京学園短期大学教授
土橋 寿



1. 徐福と日本

日本には、北海道から鹿児島まで、21都道府県46市町村（平成の合併前）に徐福の故事が伝承されている。

具体的には、農業・養蚕・機織・漁法・造船・公開・製陶・医術など、生活技術の全般に及び、各地で鎮守神・殖産神として祀られて、崇められている。

また、そればかりではなく、文学・絵画・芸能など、広いジャンルにモチーフを提供して日本の文化に影響を及ぼしてきた。

本論は、それらの中から、富士山徐福にスポットをあてて整理を試みたい。

2. 富士山と蓬莱山

富士山には、ざっと100ほどの異称がある。「蓬莱山」もその一つである。

「蓬莱」は、周知のように、「海中に、蓬莱・方丈・瀛州の三神山があり・・・」。『史記』一「始皇帝本紀第六」。齊人・徐芾の上書のように、中国の神仙思想から始まる。

一方、「富士山」は、古くは「福慈」（常陸風土記）、「布士・不尽」（万葉集）、「富岷」（日本霊異記）などと表記されてきたが、都良香『富士山記』以降、一般的に通ずる文字として踏襲されてきた。

その富士山に蓬莱山が参与したのは、周知の「有山名富士亦名蓬莱」の『義楚六帖』である。これによって、徐福の目指した「蓬莱」は富士山であることがほぼ固定化したといってもよいだろう。

そこで、以下、蓬莱山即富士山の観点から稿を進めたい。

3. 中国と日本の文献

中国最古の文献は、殷代の「卜辞」であると承知している。その後、中国では四書五経など古典が目白押しに続出する。いずれも紀元前の著作である。

これらが、日本の文献にどのような影響をもたらしているのか。浅学非才の知恵から推して「和を以って貴しと為す」（『論語』）。「悪を懲らし善を勧む」（『春秋左氏伝』）。つまり聖徳太子の「17条の憲法」（604）であろう。

徐福の情報はどうか。

こちらは、日本最古の文献たる『古事記』（712）、『日本書紀』（720）への登場は見られず、その後の『続日本紀』・『日本後記』・『続日本後記』・『文徳実録』・『三代実録』など、いわゆる六国史にも影が見えず。

徐福は、富士山を舞台に初出する。

4. 王朝文学の徐福

徐福が日本の文献にまみえるのは、ようやくにして10世紀の文学となる。

①源順『宇津保物語』（980ごろ）

物語は、天武天皇の苗裔清原俊陰が遣唐使として赴く途次、難破して波斯国（ペルシャ）を漂流すること23年。琴の秘伝を得て帰国し、娘とその子の仲忠に琴を伝授する。

プロットは琴と孝道（孝子の道）を結ぶ父と娘と孫の三代の琴を主題とした音楽器・求婚譚である。

徐福は、この「初秋」編に登場する。帝と仲忠の戯れのシーンである。

帝 「琴の調子を、前回とまったく同じように弾きなさい。」

仲忠 「蓬莱山や悪魔の国へ行けと仰せられるならば・・・」

帝 「二無き勅使かな。さりとも、今蓬莱の山へ不死薬を採りに渡らんとは、童男艸女だに、その使いに立ちて、船の中にて老い、島の浮かべども蓬莱を見ずとこそなげきためれ・・・」

これは白居易の「海漫漫」からの引用だろうが、徐福の故事が、日本の貴族社会によく認知されたことを物語っている。

②紫式部『源氏物語』（1004成る）

『宇津保物語』は、創作当時は盛名を博したが、人気は短命だったようだ。研究者によると、読者層の殿上の女房たちが、事件や人物にばかり目をむけて、物語が主題とする琴の音楽性を理解できなかったからだと言う。その中に琴の芸術性と美から深い感銘を受けて情熱を燃やした女性がいて、ほどなく作品を世に送った。

紫式部と『源氏物語』である。徐福は、この「胡蝶」の巻に登場する。源氏が釣殿に若い女房たちを集めて舟遊びをするシーンである。式部は、女房の一人に徐福を唄わせている。

亀の上の山もたづねず、船のうちに老いせぬ名をばここに残さんー（亀の上に載る蓬莱山まで、わざわざ訪ねて行くことはないでしょう。この舟の中で、長生きをしても不老の名を後世に残しましょう。）

「亀の上の山」は、『列子』を出典とする「蓬莱山」。「船のうちに老いせぬ」は、これも「海漫漫」だ。

5. 古典芸能の徐福

富士山を舞台にした謡曲は数多いが、直接に富士山を題材にしたものは「富士山」のみである。しかも、ここには徐福が色濃く登場する。

謡曲はご存知のように、「能」の詞章である。

能は室町時代、観阿弥と世阿弥の観世親子によって確立され、現存するシテ方に（主役に）金春・宝生・金剛・喜多・観世の五流がある。

「富士山」は金剛・金春のみの十八番で、作者は世阿弥（1363－1443）とも、観世小次郎信光だとも言われている。

筋立ては、「唐土の昭明王の臣下が日本へやって来て、昔方士が不死薬を求めたことを思い出して富士山へ至る。すると海女が現れて、そなたにも与えようと言って雲の中に消える。しばらくすると富士山が晴れて金色の光が天地に満ち、富士山御神火の御子と浅間大菩薩かぐや姫が現れて、不死薬を与え、舞楽を奏する」のである。

詞章をはしょろう。

ワキ・ツレ「大和唐土吹く風の、大和唐土吹く風の、音や雲路を通うらん」

ワキ「これは唐土昭明王に仕える紹敬と申す士卒たり。我日本に渡り（中略）、昔唐土の方士といふし者、駿河国富士山に至り（後略）

主題は、富士山は唐土からも不死薬を求めてやって来る神仙の霊地であるとの主張だろう。作者の、国土に寄せる自負心が窺われる。

6. 語り物の徐福

ここでは、謡い物（平曲・謡曲・幸若・琴曲）、語り物（浄瑠璃・小唄・常磐津・清元・長唄・小唄・端歌・半太夫節）のあらんかぎりの資料を駆使したところ、半太夫節の「清見八景」に徐福登場の記事を発見したが、考証には至らなかった。しかし、貴重な情報である。

7. 詩歌の徐福

富士山に関する文学的作品は、「万葉集」以降枚挙にいとまがない。しかし、徐福をかためた作品は」、短歌・俳句では皆無だった。

そこで、筆者の駄句を添えてマスを埋めよう。

①俳句

・ 霾（つちふる）や徐福もみしか富士煙る（富士寿）

（霾は、砂ぼこり。黄砂のこと。富士山は、毎年、春になると、中国から飛来する黄砂で霞む。）

②川柳

川柳は、兄貴分の俳諧が季語と文語調のスーツ、ネクタイスタイルなのに対して、自由詠・口語調のいわばTシャツスタイルの17文字である。

その最大の特色は、なんといっても人情の機微をうがっていることである。「時事川柳」の成句のように、時事に敏感なことと諧謔性だ。

以下は、「柳多留拾遺」、「川傍柳」、「柳笛」、「藐姑柳」、「柳籠裏」などから拾った江戸時代の江戸っ子の気風である。

- ・ 日本へふじな使いを始皇立て
- ・ 他国から富士へ代参一度立ち
- ・ 天人も唐人も来た富士の山
- ・ 薬取り始皇帝でも待ちぼうけ
- ・ 薬取り始皇待てども暮らせども
- ・ 時知らぬ山を尋ねて徐福来る
- ・ から鉄砲で乗り出してきた徐福
- ・ 大層な薬取りだす始皇帝
- ・ さて蜜柑多い所と徐福言い

末句は、紀州である。

③漢詩

日本の漢詩は、平安時代に隆盛したが、遣唐使の廃止で下降し、鎌倉時代の禅僧渡来で

ふたたび勃興し、江戸時代に結実する。

しかし、漢詩が詠めるインテリは京都に在って、地方へ旅することが少なかったので、富士山を詠じた作品は江戸時代に集中する。したがって、徐福を詠んだ作品は乏しいが、それでも目につくものがある。

以下、上掲の3編は抄録して紹介しよう。

- ・徐福求仙泛弱流。 人言唯向土峰留。・・・
鎌倉時代 月舟寿桂
- ・徐福秦臣有仙骨。 楼船駕空帆海風。・・・
江戸時代 祇園南海
- ・豈有秦時徐福識。 不令漢代少君伝。・・・
江戸時代 服部南郭
- ・徐福求仙去不還。 江湖放映彩雲間。 蓬瀛気色如何処。 雪満東方第一山。
8代将軍吉宗の侍講 室 鳩巢
- ・秦皇採薬竟難逢。 東海仙山是比峯。
萬古天風吹不折。 青空一朵玉芙蓉。
江戸時代の漢学者 安積良斉

8. 散文の徐福

富士山を描いた散文は、なんと言っても都良香の『富士山記』を第一とする。しかし、本書は、平安時代における富士山にかかわる伝説を取り上げているが、残念ながら徐福は不登場だ。

本書は、奈良興福寺の留学僧弘順大師の証言による『義楚六帖』より遡ること80年ほどの時代であるから、富士山麓にはまだ徐福来麓情報の乏しかったことがうかがわれる。

富士山を取り上げた散文は、その後も『東関紀行』（河内守親行）、『海道記』（源光行）、『富士歴覧記』（飛鳥井雅康）、『東国紀行』（宗牧）などの紀行文が続出する。

しかし、いずれも徐福には無関心だった。徐福の文学をようやく目にするのは江戸時代である。

抜文

- ① 『丙辰紀行』（林羅山）
・徐福薬を尋ねてこの山にとどまり、是を蓬莱山と名づくる事は、義楚が帖にあらわし・・・。
- ② 『富士賦』（松倉嵐籟・芭蕉の門弟）
・不二は日本の蓬莱山なり。徐福も此山に登りて仙薬を求め、かぐや姫も神と化してここに霊をとどむ・・・。
- ③ 『東海道名所記』（浅井了意）
・これは、東海道の名所案内記である。富士山が主対象ではないが、徐福も紹介している。

明治期における富士山文学の筆頭は、北村透谷の『富嶽の精神を思う』である。しかし、これも不登場だ。

9. 浮世絵の徐福

菱川師宣が開拓した版本挿画は、江戸時代に入ると浮世絵となって確立し、鈴木春信・

東州齊楽・喜多川歌麿・歌川広重などを生む。その一人に葛飾北斎がいる。

その北斎に、徐福を描いた三幅がある。

埼玉県重要文化財として県立美術館が所蔵する「徐福富嶽を仰ぐ」と「秦人富士祈祷」。長野県小布施の北斎館が所蔵する「富嶽と徐福」である。「徐福」と銘を冠した二幅は、北斎最盛期の「夜鷹図」と構図がそっくり。「夜鷹図」の遊女がしなやかにからだを反らす後ろ姿に似て、「これが富士山か」、「ついに来たか」と、驚きと喜びを全身に預けて、からだを反らしている徐福が印象に深い。

10. 歌劇の徐福

東京オペラ協会を主宰する石多エドワードに、日中国交正常化10周年を記念して製作した歌劇がある。「蓬莱の国・徐福伝」だ。

舞台は2部に分かれる。第1幕は「始皇帝と徐福」、第2幕は「蓬莱の国」だ。

ストーリーは、第1幕は徐福求仙の船出と大時化に悩まされる海路で、徐福の妻が海に身を投げると蓬莱の国が見えてくる。

第2幕は、たどり着いた富士山麓は縄文時代の末期。徐福はここで、森の精のキリモと結ばれる。石多が問いかける主題は「人間と自然」の共生に尽きる。

11. 考察

富士山徐福にかかわる文学と、その周辺の文化を概観してきた。所感を整理すれば、世間の冷静さを強くおぼえる。結論として、徐福思想の啓蒙を図りたい。あわせて、冷え込んだ日・中・韓の友好を取り戻したい一念にかられた。

久しぶりに塩山県の朋友・張吉忠さんの顔が臉に浮んだ。かれの著作『大河文明的延伸』を開いて、彼から贈られた詩を詠みながら健康を祈った。

君駕軽車挙蓬山、古樟翠柏半山間

冲破重重杯雲霧、喜見峰頂一雪天

—張吉忠—

参考文献

1. 「富士の研究」シリーズ：浅間神社・昭和48
2. 「富士山をめぐる川柳散歩」：清博美・静岡郷土出版社・1988

<著者プロフィール>

土橋 寿（どばし ひさし）

1932年生まれ。日本自分史学会長、日本自分史大賞委員長、日本自分史文学館主宰（自分史研究の第一人者）、富士吉田市に富士山徐福館を開設、富士山徐福学会創立者、元帝京学園短期大学教授、著書・論文「岳麓文学散歩」「徐福伝説を追う」など。

連絡先 富士吉田市下吉田 1-14-29

Tel・Fax 0555-24-2000

徐福伝説に思いを馳せて

富士山徐福学会会員
伊藤 進



1. はじめに

私は、富士山の北側、富士五湖の中東部に位置する富士吉田市で生まれ育った。徐福の名を初めて耳にしたのは、中学生のころの夏休みの課題で徐福伝説に関するレポートの提出があったことだと記憶している。しかし、それ以後は、徐福に関することには気にも留めずに過ごしてきたが、地元の広報誌や神社・仏閣などで徐福に関する記事を多く取り上げていることを知り、徐福の終焉の地とされる富士吉田に住むものとして、この地に残される徐福伝説を学び知り、次代へ繋げることの大切さを自分なりに感じている。

郷土の伝説を学ぶことの意義は、おそらく二つあると思う。ひとつは、自分のルーツを認識するということであり、今一つは、自分に誇りを持ち他者に伝えることであると思う。この二つの意義は、相互に関連があって、最終的には、アイデンティティーの確立に繋がると思う。自分は何をしたらいいのかわからない、何がしたいのかもわからないといった現代の社会に生きるものに多々見られる傾向を少しでも解消するために、ぜひ郷土の伝説に目を向け、学んでほしい。きっと自分の歩むべき道が見つかることと確信している。このことを踏まえ拙い文章ではあるが、表題について意見を述べたいと思う。

2. 徐福村の発見

紀元前219年、秦の始皇帝の時代に童男童女500人、他様々な技術者を含め総勢3000人の集団を引き連れ、不老不死の仙薬を求めて中国大陸から東方の桃源郷へと旅立った一団がいた。それを先導したのが秦の始皇帝からその命を受けた徐福である。徐福の名は、作家司馬遼太郎氏が、彼にあこがれてペンネームにしたという、中国の修史官、司馬遷が著した中国で最も古い歴史書である「史記」に登場する。「史記」は中国最初の正史であり、中国の歴史書の典型をなす紀伝体の史書である。この「史記」の「秦始皇本紀」及び「淮南衡山列伝」に登場するのである。

しかしこのような中国最初の正史に記述されながらも2000年の間「伝説」の領域から出なかった徐福が、1982年、中国における徐福研究の第一人者、徐州師範学院教授、羅其湘氏が中華人民共和国政府による地名辞典編纂事業の最中、江蘇省贛榆県金山郷の徐阜村が徐福の出身地とされ、世紀の大発見となり、徐福の存在が事実となった瞬間でもあった。徐阜村には徐姓の家はなかったが、それというのも徐福の出帆後、始皇帝がその追跡のために危害を加えかねないと思った一族が別の姓に改めてしまったからだという。

徐阜村の近く、山東半島から東の海に臨む連雲港市には、かつてその港から徐福が東海に旅だったという伝説が残っている。また徐阜村を遠く離れた江西省臨川で「草坪徐氏宗譜」という家系書が発見され、徐福の子孫が現在も残っていることが判明したのである。その後、徐福の一族の子孫とその家系書は、旧満州や台湾を含む中国全土56か所から発

見され、彼らは秦の始皇帝の弾圧を逃れるため、大陸全土に散らばったのだと推測される。現在、徐阜村には伝説に基づいて、徐福村と改称している。

このような事実があるにもかかわらず、この発見は、日本人観光客向けのパフォーマンスだとする声も聞く。北京の歴史研究部の学者で、わが国でも著名な汪向荣氏は次のように述べている。「もしわれわれが真剣に中日関係交流史を、特に日本の古代における発展過程を縄文時代から弥生時代まで辿り、慎重な観察と検討を加えようとするならば、この徐福伝説を軽率に否定することはできない。徐福が東渡して日本にとどまり、再び帰ってこなかったという史記の記述についても、そこには深い原因と理由が存在したのではなかろうか。現在の徐福村の人々が悠久の歴史の流れと人の世の激しい変動の中で、二千有余年にわたって消すことなく絶やすことなくその地名を残し、徐福という人物についての伝承を今日までに伝えているという事実は生易しいものではなく、単なる偶然としてかたづけられるものではない」とした。

3. 宮下文書の中での徐福

私の住む富士吉田市には、徐福がこの地に到着し、子孫と共に定住したとする「宮下文書」という古文書がある。これは吾郷清彦氏が著書「古事記以前の書」（大陸書房、1972年）で最初に提唱した古史古伝といわれるもので、この段階では「古典四書」「古伝三書」「古史三書」とされていたが、著書「日本古代秘史資料」（新人物往来社、1976年）では「古典四書」「古伝四書」「古史四書」「異録四書」に発展した。

初期のころの吾郷清彦氏は「超古代文書」という言い方を好み、「古史古伝」とは言わなかった。あくまで分類上の用語として「古伝四書」とか「古史四書」と言っていたに過ぎない。1980年代以降、佐治芳彦氏がこれを混同して「古史古伝」としたのが始まりである。宮下文書は、このうちの「古史四書」（神代文字を伝えてはいるものの、漢字のみまたは漢字かな混じりで書かれたもの）とされている。

宮下文書の中の徐福は「徐福十二史談」の中に記されている。

簡単に内容を記すと、徐は姓、名は除子、字は徐福。（先祖の）子路は孔子の門人に入りしより、これまで7代。諸文学に苦心勉強いたし、本朝の国学を広く学び中天竺に渡り、釈迦如来の一切経の仏学を7年間、苦心勉強して学び、薬師如来之像を求めた。本国に帰り秦国王始皇帝に従う。

舟に乗りて大海に遊び、東海に不二山を見つけ大いに祝い、3年いたところを紀居国（紀伊）と申して、3年止まり居たる山を東海に掛る雲無く晴れ、不二山が明らかに現われ給うによって、この山を久磨野山（熊野山）と申すなり。それより八十五船の大舟に、もろもろの品を積み、五百余人うち乗り不二山を目印に住留家濱（駿河浜）に着き給う。

このところを宇記島原、またの名、吉原と申すなり、松岡驛より水久保驛を越え山村にいで、割石峠を越し不二山の中央高高原に入る。川口驛より阿祖谷、三室の一つ小室家基都（富士吉田市）に止りたもうなり。秦国出立の時は、すなわち秦国三年六月二十日、日本国の考霊天皇七十二年なり。日本国の久磨野山（熊野山）裏に着きたるは、同年十月二十五日なり。また同天皇七十四年九月十三日、久磨野山を出立致し、不二山高高原、家基都驛（富士吉田市）に着き給う日は、則ち十月五日也。

考霊七十六年十月十日、後の世のために秦国人除の徐福、謹んで記し置くなり。

安元二(1176年)丙申年八月中に寒川神社の寶物の内の宝蔵から借り受け寫しおく書なり、とある。

宮下文書の虚実については様々な意見のあるところではあるが、私見では寒川神社との関係に疑わしいところを感じる。寒川神社は神亀四年(727年)に社殿建立と伝える記録がある(続日本後記)が、宮下文書では延暦十九年(800年)の富士山大爆発で、山の七十二か所から一斉に火を噴き、流出した溶岩により、天都高天原、阿祖山大神宮など炎上して姿を消し、たまたま伊勢や京都を旅行していた阿祖山大神宮の宮司や関係者は、相模国(神奈川県)に移住し、相模川の河口に近い高座郡に寒川神社を創建して伝来の文書を保管したといわれる。このことから宮下文書を寒川文書と呼ぶ人もいるという。「歴史は自由な、囚われのない目で眺めよ」ということもいわれるが、寒川神社創建の年代の違いや事実関係は、今後の研究の対象としたい。

4. 徐福研究今後の課題 ——まとめにかえて——

「徐福十二史談」は徐福の旅の記録といえる。宮下文書は「古代富士高天原王朝の興亡」を祖皇大神宮の宮司職の宮下家から聞いた古伝承を筆録したものであろう。年代で見ても古事記(712年)が書かれた、およそ920年前(紀元210年)に書かれたという。古事記の中にはあきらかに宮下文書をヒントに書かれた部分もあるという。このことも研究を進めていきたい。

さて徐福が「平原広沢を得て、王として止り、来たらず」(史記)とあることは、古代富士高天原王朝の王となったとも考えられる。中国では「神武天皇＝徐福」(衛挺生)とする説もある。古来より宮廷祭祀における祭具の製造・神殿宮殿造営に関わった忌部(いみべ)氏がいる。「汚れを忌む」からきているという。その子孫は後に「斎部(いみべ)」を名乗ったという。徐福は斎の国の人。何か深いものを感じる。

また私の住む富士吉田には、古屋敷遺跡と呼ばれる遺跡がある。徐福伝説のある大明見地区にある。この遺跡の発掘調査も働きかけていきたいと考えている。今後も徐福研究を進めながら2000年前に来日し、農業を始め多くの分野に功績を遺したと伝えられる徐福を大切に、この伝説を地元の人のもとより、多くの人たちに知っていただき、日中交流の架け橋にしたいと考えている。(了)

参考文献

1. 徐福伝説を探る 梅原猛 他著 小学館 1990年
2. 日本古代文書の謎 鈴木貞一 大陸書房 1971年
3. 徐福伝説の謎 三谷茉沙夫 三一書房 1992年
4. 真説「徐福伝説」 羽田武栄・広岡純 三五館 2000年
5. 神武天皇＝徐福伝説の謎 衛挺生 新人物往来社 1977年
6. 徐福ロマン 羽田武栄 亜紀書房 1993年
7. その他 徐福に関する HP

<著者プロフィール>

伊藤進（いとうすすむ）

1960年山梨県富士吉田市生まれ

地域の伝統文化を、音楽を通して次代に伝えていくイベントを企画・開催している。

2013年2月に「富士の国やまなし国民文化祭」提案事業として、徐福の命日にちなんで第1回富士山徐福祭りを開催する。

富士山徐福学会会員、富士五湖アコースティックギタークラブ会長　フォーク酒場ジュゲム経営。

I-8 各地の徐福伝承

徐福集団最初の渡来地考察

奈良徐福研究会会長
益田宗児



1. はじめに

徐福集団は、秦の始皇帝に命じられ、東方蓬莱の島に「不老長寿の仙薬」を探しに送り出されています。

中国を平定して始皇帝が最後に望んだのは「不老長寿」であった。

中国の「方士」たちの多くが、始皇帝の恩賞を獲るために仙薬を求めて海に出ますが、殆ど失敗をしています。失敗した方士達は始皇帝の逆鱗に触れて殺される者もあった。

徐福もその一人であった。一度は失敗しています。徐福さんの偉いところは、死をも覚悟して始皇帝に再び東渡を申し入れます。そして巨万の資金をせしめて、準備を整え、東渡に成功しています。役者が始皇帝よりも上であったわけです。

2. 徐福集団東渡の意図

仙薬探訪だけならば2～3隻の船で事足りた筈である。50隻、一説には80隻の古代大型構造船を建造したとあります。1隻に100人乗れたとしたら5000人～8000人の大集団です。童男童女3000人を引き連れてとあります。始皇帝は恐らく仙薬探訪だけでなく蓬莱の長寿の島の征服を徐福に託していたと考える事ができます。所が、徐福はその後中国へは帰らず蓬莱に留まり王となります。

徐福が命がけで始皇帝に提案したと考えられるのは、

- 1、季節風や嵐に耐えられる大型構造船が必要である。
- 2、船大工をはじめ技術者や鯨を射殺する兵士を同行させること。
- 3、当面の食料の他、5穀の種を持って行くこと。
- 4、童男童女3000人を貰い受けたいこと。
- 5、蓬莱の島の航海術に長けた水先案内人を伴うこと。

少なくとも以上のような陳情をして始皇帝の承諾を得たものだと思います。当初から中国脱出の願望があったようです。

3. 東方蓬莱島の情報はどのように得たか

さて、始皇帝や徐福さんは東方蓬莱長寿の島の情報を誰からどうして、何処で知り得ていたのでしょうか。これこそは謎を解く鍵であります。4～5千年も前から中国と交易をしていた「寶貝」商人に登場して貰いましょう。

貨幣の出来る前は中国の通貨は「寶貝」であった。装飾品も南西諸島の諸々の貝であった。中でも「寶貝」は通貨として貴重であった、漢字の財を表す文字には全て貝偏が付いています。南西諸島の海洋民族は小船に「寶貝」を積んで遥々中国と交易をしています。

彼らが中国でお国自慢をします。島では100歳を越えた人が大勢居て長寿の島である

こと。年中青野菜を食し、裸足で暮らしている。この情報が始皇帝や徐福さんの耳に入っていたに違いありません。

彼らは仲間と集まって「ワ・ワ・・・」と自分の事を喋ります。現在でも南西諸島・沖縄・台湾でも、自分、俺、我等のことを「ワ」と言います。中国の人は、彼らが「ワ・ワ・・・」と騒ぐので、「わ人＝倭人」倭国と見做したのではと思えてなりません。

徐福さんは航海術に優れた南西諸島の海人を、航海の水先案内にした事は明白です。

徐福さんが東渡に成功出来たのは、「海人」の貢献が大きいと考えられます。

彼らは航海の水先案内だけでなく、辿り着いた蓬莱の人々との通訳の役目も果たします。先住民とトラブルを起こしたり、警戒されたりすることは皆無であったでしょう。

4. 徐福東渡時の状況

いよいよ東渡です。記録によれば「瑯耶台」で始皇帝に見送られて出航したとあります。

船団は一路南の「寧波」まで南下しています。徐福さんはこの港町「寧波」で馬を積み込んだようです。

蓬莱の島を探索するには馬が必要です。最近に判明したのですが〔寧波〕に「徐福牧場」が現存していると言います。徐福さんが持ち込んだ馬は種子島で大いに繁殖しています。種子島の内陸部には現在も牧場の神、「牧の神神社」が40社もあるのです。

徐福集団は水先案内に導かれて「寧波」から、太陽を目指して真東に舳先を向けます。海洋民族「海人」の定番のコースです。その先にあるのは「徳之島」です。

5. 徐福船団の最初の上陸地

徐福船団の日本最初の上陸地点、即ち「弥生の始発駅」は徳之島であると言えます。

それでは徳之島に証拠となる裏づけがあるのかと疑問に思われる御仁も居られる事でしょう。そこで次に画像を添付してご披露いたします。

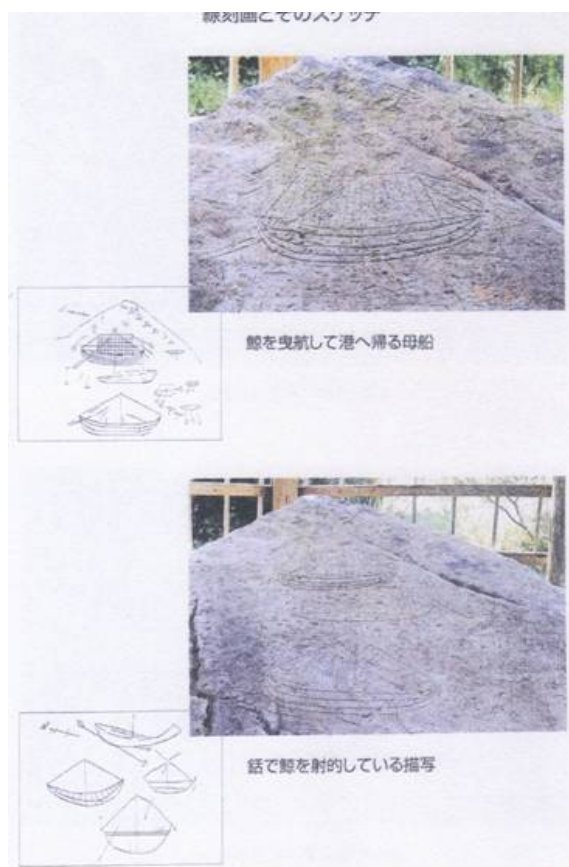
線刻両の説明を致します。

徳之島天城町の秋利神川（穂禮川とも言う）の南岸の森の中に徐福集団の石工でないと描く事叶わぬ線刻画があります。中国瑯耶台にある線刻と類似した絵柄です。

上の画像は鯨を曳航して港に向うものです。下の画像は鯨を射的している模様に見えます。

中国の古代の弓「連弩」らしき絵柄も見られます。彼らは鯨を射的して穂禮湾に曳航して村人に振る舞い親交深めた記念に巨石に線刻したのであろう。

次に、徐福集団の影響に違いがないと思える風習についてです。



徳之島天城町秋利上川の線刻画

徳之島には、昔から「祝い田」、「賜田」「神田」と称する田圃があった。現在は水田が農地整理、改善事業で殆ど畑に変わり、サトウキビ畑になりました。水田は全てと言って良いほど、無くなってしまいました。

水田稲作の島がサトウキビの島に変貌しています。水田稲作にちなんで「稲穂岳」と称する山があるくらいです。

さて、「祝い田」ですが、古代から田植えをするに当たり、お祓いをしてから始めます。田圃の畦で太鼓をたたいて田植えを進めます。集落では「田植え祭り」と呼びます。

田植え祭りの由来を古老に聞いたりして、調べてみました。昔々中国から来た偉い人が水田の作り方、稲の植え方から収穫まで教えて下さった。漁労民族の生活が、稲作生活へと改善されて、人口も増えて平和になった。祝い田はその偉い人が模範田を作って、邑人達に教えた田圃である。模範田の祝い田の田植えが終わってから、邑の田植えが始まるものであった。と伝わっています。

名前は違いますが「賜田」「神田」も同じ性格のもので、徳之島の一部に「神田姓」の旧家がありますが、一説ではご先祖が「神田」の管理者であったとされています。

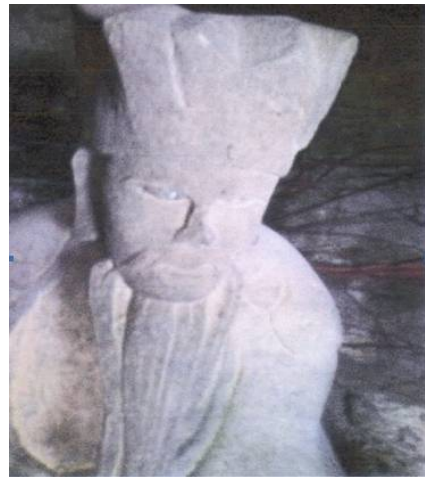
6. 徐福石造が発見された

中国から来て水田稲作を教えてくれた人こそは、「徐福さん」です。

4～5年前ですが徳之島伊仙町のガジュマルの森の中に1体の石像が発見されました。紛れもなくそれは「徐福石像」だと分かりました。



ガジュマルの木陰の祠に徐福石像は安置されています



徐福石像

この村落は世界一長寿者泉重千代翁や本郷かまご両人の出生の地です。周辺の山には粘土に恵まれた「カムイ焼き」の廬跡が数百箇所もあり発掘調査が何年も掛かると言われている。「カムイ焼き」も徐福集団によって伝えられたものに相違ない。

先に徐福さんは寧波の港で「馬」を積み込んで来たと言いました。稲に因んで「稲穂岳」かおりますが、「馬」に因んで「馬鞍岳」が島の北寄りにあります。徐福さんが馬に鞍を置いて島を往来していたに違いありません。

和歌山県新宮市の熊野速玉神社に平安時代に復元された「徐福さんの鞍」が展示されて

います。徐福さんは徳之島に辿り着いて以来、黒潮に乗って北上し熊野に至る間、愛馬に乗って陸路を進んだに相違ありません。

7. 巳葬の風習から邪馬台国へ

次に「巳葬」の風習です。魏志倭人伝に邪馬台国の卑弥呼は「巳葬」されたと有ります。

徳之島には「巳葬」の風習があります。死者を午前〇時5分前に寝かせて埋葬します。

この世とあの世の境目が5分前です。筆者の故郷は徳之島天城町ですが港公園の洞窟にご先祖のお墓が5基建っています。5基とも巳葬されています。又、隣町伊仙町の資料館に弥生時代の貴婦人のミイラが陳列されています。この貴婦人も「巳葬」されていたと言います。筆者は独断と偏見でこの貴婦人こそは「卑弥呼」に違いないと考えています。



弥生時代の貴婦人の遺骨

徐福さんが徳之島へ最初に渡来したのであれば、限りなく邪馬台国は徳之島であったに違いないと思います。魏志倭人伝の述べる方位位置は韓国ソールから東南の山多き島、1200キロの大海の中、だと明記しています。毒ハブがいて刺青した裸足で暮らす民族とあります。それは紛れもなく徳之島です。徐福渡来があつて邪馬台国も存立出来たと思えてなりません。

<著者プロフィール>

益田 宗児 (ますだ そうじ)

1932年、鹿児島・徳之島生まれ。大阪経済大学卒業。ネジ製造会社勤務、工場長で退任。一独立。益田捻子(株)〔ねじ製造〕15年。徳之島興産(株)〔うこん製造・販売〕:現在に至る。近畿鹿児島県人会相談役、三郷町身体障害者福祉協会会長、奈良徐福研究会会長、NPO法人 龍田・三室山桜の会会長。著書:「ご先祖様は王子様」、徳之島昔話「神里姫」など3話、「邪馬台国は徳之島」、「種子島は古代神々の故郷」、「徐福物語」(弥生の使者徐福は皇祖神かも)、「弥生の使者徐福さん」(徐福初渡来地は徳之島である)など多数。

I-9 各地の徐福伝承

村人に守り継がれる丹後の徐福

大阪・徐福友好塾会員
石川 幸子



1. はじめに

私が、京都・丹後徐福会（当時）会長の石倉昭重ご夫妻に初めてお会いしたのは、1994年秋、中国北京で開催された徐福国際フォーラムだったと記憶している。徐福を先祖にもつという韓国の徐明鎮女史のお伴で、私もそのフォーラムに出席した。その後も、各地で開催された徐福関連行事でお目にかかり、いつしかご自宅まで訪問し、偶然にも自分の母と同じ年齢の石倉ご夫妻を「お父さん、お母さん」と呼ぶようになり、今日までお付き合いさせていただいている。



発表中の石倉昭重氏（北京、1994）



石倉ご夫妻、羽田計樹（左）氏と

2. 石倉氏と徐福

1926年生まれの石倉氏は、伊根町に生まれ育ち、地元のためにご尽力をつくしてこられた。

平成4年、地域の観光ボランティアをしていたことをきっかけにして、本格的に徐福研究を始め、平成5年（1993）には丹後徐福会を立ち上げた。

ご存知のとおり、伊根の新井崎神社（創建998年）のご祭神は徐福、ご神体は、童男女一対の木像であるといわれている。ご神徳は、海上安全・漁場満足・避邪避病とあり、漁業をなりわいとする伊根にとっても、村人たちのよりしろとして生活の中心にあった。



新井崎神社



丹後徐福会「徐福さん」

3. 日中交流のかけはし

丹後徐福会は、設立以来毎年「徐福さん」を発行、それは 20 号にも及んだ。徐福を顕彰すると共に地域の歴史民俗を学ぶ場ともなった。長年、村人たちを見守り続けてきた神社の鳥居も朽ちてきたので、1997 年 11 月には、新しく建立された。その除幕式には、私も参加させていただいた。同時に、標柱の揮毫を、中国徐福会李連慶会長（当時）に依頼し、日中交流の架け橋として立派に蘇った。



新築なった鳥居と標柱（右、1997）



信子節（1997）中国・河北・滄州

4. 後世のために

江戸の末期、安政 6 年（1859）、この年は、全国的にコレラが大流行した。この村でも 46 名の死者が出たという。この難儀に村人たちはひたすら神社に祈った。時の住職は、その思いに応じて「大明神口碑記」を著し、この国難を乗り切るよう強く祈念した。

丹後の徐福文献として、唯一残るこの口伝を後世に残そうと、村人は 2007 年 3 月、舟形をした石碑に刻み、境内に建立した。除幕式の当日は、国内の徐福伝承地からの代表はもちろんのこと、研究者も参列、中国・韓国・台湾などの国外からも数多くの祝電が届き、盛大に執り行われた。



石碑「新大明神口碑記」の報告をする石倉氏
（中央、2007）

5. たましいの道しるべ

ご存知のとおり、中国にも数多くの徐福伝承地がある。その一つ中国の河北省滄州市には、徐福と共に船出した童男女の話が残る。親元を離れ、はるか遠く日本にやってきた。その滄州市には、その子供たちの無事を祈り、帰りを待ちわびる祭り「信子節」がある。漢代より、60年に一度今も行われているそうだ。その子供たちは、この日本、伊根の新井崎神社で村人たちによって祀られ、今日も村と共にある。2011年3月、その道しるべの想いもこめて、新たに「方士・徐福上陸之地」「東渡の地」の石柱が建てられた。



「方士・徐福上陸之地」



「東渡の地」 2011年建立

6. おわりに

2011年12月、2年ぶりに伊根を訪れた。石倉氏の案内で新しく建てられた石柱を拝見、あらためて丹後徐福会設立以来の足跡をともに振り返った。「今に思えば、生後50日目のお宮参りで、徐福と縁（えにし）を結んだのかものしれない」と石倉氏は語る。数えきれないほどの風雪に耐え、この村を見守ってきた新井の産土神。2200年という時空を経て、徐福たちのたましいは、これからもこの丹後の地で、村人と共にありつづけ、守り継がれていくにちがいない。

<著者プロフィール>

石川 幸子（いしかわ さちこ）

1958年生まれ。大阪大谷大学文学部国文学科卒。個人の立場から徐福に関心をもつ。著書『古代日本と神仙思想』（共著。五月書房。論考「徐福の“影”をアジアに探す」所収）のほか、論文「韓国における徐福伝説」「世界平和の礎」「世界遺産－熊野古道の徐福を歩く－」などがある。

I-10 各地の徐福伝承

土井ヶ浜遺跡と徐福伝説

徐福友好塾主宰

鳥居貞義



1. はじめに

私はこれまで徐福伝説をより科学的に証明するために「伝説から歴史へ」をテーマに物的証拠の追及を提案してきました。そして半両銭と連弩及び竹簡を物的証拠の代表として考えて来ました。その結果、私の提案が中国を代表する著名な日本語雑誌《人民中国》の2011年版12月号に掲載され、多くの徐福研究仲間は勿論、徐福に関心を持たなかった人たち例えば医者や学生が注目してくれるようになりました。

2. 土井ヶ浜遺跡に注目する

日本の徐福伝説伝承地として、北は青森県小泊、東は八丈島、南は鹿児島まで全国に20余箇所あるとして例証されますが、その中に西に位置する「土井ヶ浜遺跡」(土井が浜遺跡とも記載される場合がある)が入れられることはありませんでした。

しかし、土井ヶ浜遺跡の考古学的価値は非常に高く、学術的にも吉野ヶ里遺跡と並んで所謂学者の研究対象となってきました。



土井ヶ浜遺跡では約300体の人骨がほぼ完全な形で発掘されました。それらの人骨が全て頭を北東に足を北西方向に並べられ頭部は足元が見える方向に少し上がっています。

その様子は丁度中国の出身地の方向を見ているような形で並べられています。土井が浜遺跡の所在地は対馬海流の通り道に当たる山口県の響灘に面した海岸にあります。

人骨の頭蓋骨、特に顔の骨格から復元された顔面は、従来から日本に住んでいた縄文人とは異なり、弥生人に近いものとされています。平均身長も縄文人より高かったと推定されています。

だからこれらの集団は渡来人と考えられ、しかも縄文時代から弥生時代に移行する時期で、徐福が東渡した時期と符合します。

以上の情報を総合しますと土井ヶ浜遺跡の人骨を、徐福集団と推定することは決して不自然ではありません。

では何故そのような人骨が甕棺に入れられることもなく、2000年の長期に亘って風化することもなく、ほぼ完全な形で保存されていたかという疑問が残りますが、人骨が埋められていた環境(砂に多量に含まれる貝殻粉)から、科学的裏付けが成なされています。

では徐福と結びつく物的な証拠はあるのでしょうか？　これが本論の主テーマです。

3. 土井ヶ浜遺跡の埋蔵人骨は徐福集團のものか

私は昨年、2011年10月、大阪府弥生博物館の学芸員をコーディネーターとする土井ヶ浜遺跡見学ツアーに参加しました。一行は考古学に興味を持つ歴史愛好家がほとんどで、徐福伝説に興味を持っているのは私だけでした。

土井ヶ浜遺跡は埋蔵人骨だけでなく、近くに古代貨幣の鑄造地があることでも有名です。地方都市には珍しく貨幣博物館もあります。古代貨銭の鑄造方法展示と共に古代から現在に至る貨銭が展示されている中に1枚の「半両銭」を見つけました。

以前から半両銭に興味を持っていた私は、直ぐに博物館の担当者に入手先を尋ねたところ、最近入手したものと判明しました。これで諦める訳にはゆきません。

大阪府弥生博物館の館長は金関恕さんですが、父親の金関丈夫博士は医学博士であると同時に、著名な考古学者で土井ヶ浜遺跡の最初の発掘者でもあります。

大阪府弥生博物館は昨年創設20周年記念に土井ヶ浜遺跡の特別展を実施しました。その資料の中に以下のような記述があるのを見つけました。



中国の古代貨銭「半両銭」が入っていた壺とそれを入れた箱

「大量の中国銭 沖ノ山古銭出土地

江戸は元文5（1740）年正月、暑狭郡あき小串村、入江に伸びる砂嘴、沖ノ山のことである。その松浜から島村の百姓市左衛門が、大量の古銭が詰められた壺を掘り出した。すぐさま庄屋を通して福原家のお殿様に献上、家宝として大切に保管され現代まで伝えられる。

このときのいきさつを記した記録によると（130）、出土した古銭はなんと中国秦の半両銭と前漢の五銖銭ごしゅせんで、その当時でも1800年以上前のものであるとされた。

その後の調査で、中国銭は合わせて百枚以上あり、壺は朝鮮系無文土器であることが明

らかにされた。壺の中には銅銭のあとがシミとして残っているため、バラバラの状態に入れられていたのだろう。

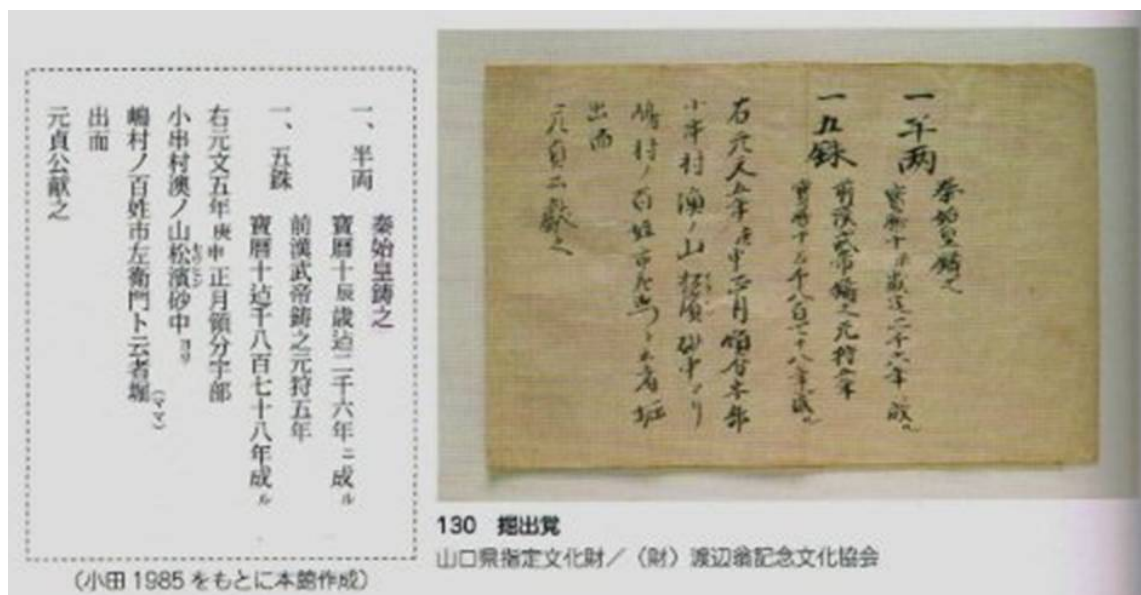
半両銭は 20 枚あり、前漢の文帝 5（紀元前 175）年から鑄造がはじまった四銖半両銭（126）、五銖銭は 96 枚あり、前漢武帝の元狩五（紀元前 118）年から鑄造が始まったものである。入れられていた土器は朝鮮系無文で口縁が三角形となりその後半のものである。その特徴から日本で作られたものだと考えられるが、この古銭に渡来人がかかわっていたことを示す。

一ヶ所でこれだけ大量の中国銭が出土した弥生遺跡はほかに例がなく、その意味が注目される。

この時期、日本や朝鮮半島の海上交易の盛んな海村では中国銭が多く出土することから、鉄などを購入する貨幣として流通していたという考えがある。

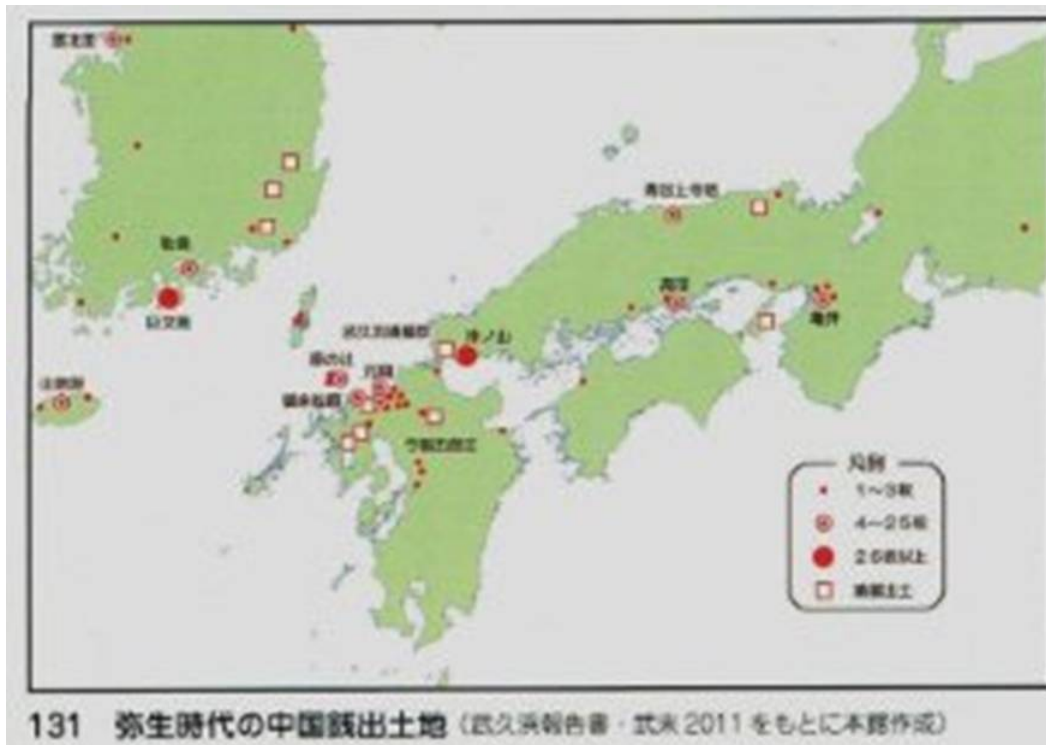
一方、日本では貨幣は流通しておらず、日本独自の武器形青銅器・銅鐸の原材料としてもたらされたという意見がある。不用となった青銅製品をインゴットとして溶かしていたのであろう。

出土地は現在の宇部新川駅付近、市街地となり、当時をしのぶよすがはない。」



↑「半両銭」は、秦始皇帝の時代に鑄造された古銭との紹介文





↑ 弥生時代の中国銭の出土地

『弥生文化のはじまりー土井が浜遺跡と響灘周辺ー』大阪府立弥生文化博物館発行より

4. 大阪府弥生博物館を訪問した経緯。

私の友人で書道家・清水真弓女史が大阪府弥生博物館のロビーで、東日本大震災支援のための書道展を開催し、私も招待を受けましたので久しぶりに、大阪府弥生博物館を訪問しました。

いつもは特別展示場を見るだけで常設展示場は既に見慣れていることもあって、あまり見ないのですが、幸い時間が十分ありましたので、常設展示場の展示だけでなく個別のビデオも見ました。

展示コーナーの終わりでビデオを見ていると「中国 仙人のふるさとー山東省文物展」という画面が現れて徐福さんについての解説があり、最終コマに協力山口県埋蔵センターの文字がありました。



↑ 大阪府弥生博物館のビデオから

5. 徐福伝説を歴史的事実として認定しよう

私は予てより徐福伝説を歴史的事実として、教科書に掲載することを提唱していますが、残念ながら未だ実現していません。即ち日本では残念ながら公的には認知されていないのです。学会でも徐福伝説について公式に論じられることはありません。しかし大学教授などの学者の中にも所謂隠れ学者（趣味として研究している人）は大勢います。大阪府立弥生博物館は公的機関です。ここで取り上げられたことは大変有意義なことです。

今後日中韓の博物館が提携して学術研究だけでなく、観光資源としても活用する意義は大きいと思います。

日本は公共の予算が緊縮状態にあり、大阪府も大幅な緊縮予算となり特に文化予算は厳しい状態にあります。大阪府立弥生博物館も継続的存在が危ぶまれています。

文化を守り繁栄させるためには更なる交流が望まれます。その第一歩として本日も出席の皆さんが、土井が浜遺跡と大阪府立弥生博物館を訪問されることをお勧めします。

参考文献 《弥生文化のはじまりー土井が浜遺跡と響灘周辺》大阪府立弥生博物館 2011

※清水真弓（号；千真）：大阪府弥生博物館のロビーで東日本大震災支援のための書道展を実施。彼女は李連慶会長が団長で来日され、私が主宰する大阪・徐福友好塾で歓迎会を開催した時に李連慶会長と共に「徐福東渡」の揮毫をしました。その時の映像を彼女のHPで見ることが出来ます。

<http://shodosenshin.web.fc2.com/j-HP/kokusai/kokusai-chaina.htm>



←徐福日中交流会にて 清水真弓（千真）
李連慶氏は元インド大使、中国外交部の長老、
そして中国徐福会の会長です。揮毫を清水
がサポートさせて頂きました。李連慶氏は「徐
福東渡」と揮毫されました。2005/2/10uproad

私はこの小論を故李連慶元中国徐福会会長の
霊前に捧げるべくより研鑽します。鳥居貞義

※この小論は今年9月中国で開催される予定であった「中国徐福文化象山国際大会 2012」でも発表する予定であったが、昨今の日中関係に鑑み同大会は無期延期となった。

<著者プロフィール>

鳥居 貞義（とりい さだよし）

1936年生まれ、大阪市立大学商学部卒。徐福友好塾主宰。

著書：『カルチャーショックを乗り越えて』『指学問』『松下電工卒業論文』、

編著：『交野が原と七夕伝説』『徐福さん』



徐福が最後の出発地とされる浙江省寧波市慈渡の遠蓬山。羽田孜元首相が揮毫した「秦渡庵」の記念碑と筆者（写真は本人提供）

徐福に魅せられて

徐福友好代表 鳥居貞義＝文

徐福口を科学
師 鳥居貞義



徐福について講演する筆者（写真は本人提供）

「徐福伝説」と「七夕伝説」の研究を通じて中国との文化交流に努めている私は、常々、科学的に物証を求め、「伝説から歴史へ」と質を高めることが肝要と考えています。日本では徐福も七夕も「伝説」の範疇ですが、七夕が神話故事として生成の時代背景と伝播を研究対象にしているのに対し、徐福は中国の正史「史記」に記録され、史跡も伝承されているからです。

出発地、到着地で議論

方士徐福の東渡は、「史記」などの記録によると、紀元前二一九年に秦の始皇帝の命により、五艘を積み、百工（技術者集団）と二千人の童男童女を伴って、不老長寿の仙薬を求めたと記されています。一九八二年に徐州師範学院教授、羅其淵氏によって生誕地が解明されたこ

とで徐福の実在は確認されましたが、徐福が中国のどこから出発し、日本のどこに着いたかで議論されています。

日本には青森県小泊を北限に、東は八丈島、西は九州など二十余カ所に徐福伝説が伝承されていますが、科学的根拠は未だ示されていません。このことが多くの徐福研究者を引き付け、研究仲間は商船大学名誉教授はじめ郷土史家、学芸員、技術者等々多士済々、正に総合科学によって解き明かされようとしています。私が提唱しているテーマは、秦代発行の「半兩錢」徐福が始皇帝に上申した「竹筒」、徐福が持ち込んだ「進野」などの物証の発見です。

武器や貨幣を持ち込む

「史記」には、徐福が「度目の出発時に海中の怪物（サメ？ クジラ？）を避けるために始皇帝に要望して連弩（連発武器）を積み込んだと記されています。「進野」とはどのようなものだったのでしょうか。始皇帝を警護する兵馬俑の中に徐福一行が積み込んだものと同じと類推できる連弩はないのでしょうか？

「海中の怪物と闘う」とは徐福の作り話とも考えられますが、始皇帝自身が沿海で試射した記録もあり、ウェブ検索では「始皇帝陵の兵馬俑坑からは保存状態の良い「弩」がいくつも出土したという記録はあるが」とありましたが、兵

馬橋資料館で見つけたのは土の中に半ば埋まる「写」の写真一枚だけでした。日本では泰代発行人の「半両銭」が百枚発見されていますが、徐福上陸地として徐福墓(伝)と祠がある場所(三重県波田須)での発見は誠に意義深いことです。中国には鋤型を含めて上海博物館に実物が多数展示されています。日中共同研究への着手が強く望まれます。

泰代の記録が竹簡に書かれたように、徐福が始皇帝に奏上した上申書も竹簡に書かれたと考えられています。始皇帝の焚書で多くの記録が焼失しましたが、徐福一行が焼失前の竹簡を多量に持ち運んだはずで、中国には無い貴重資料が日本にあるはずだ」と発見を期待する人がいます。解決には日中双方で竹簡及び墨の素材を分析し比較研究する必要があります。これも国際協力が欠かせません。

ネットワークで共同研究

淡志保博士(愛知県立大学)の尽力でウェブ上に「徐福伝説BBS」掲示板」が日中韓三方国語で掲示されています。利用者は未だ特定の人に限られているようですが、より広く活用されれば徐福研究は一段と前進するものと期待しています。

私は二〇〇五年に多くの徐福研究者の協力を得て、日本・中国・韓国に現存



徐福(右側)が始皇帝に奏上している光景を再現した群像(写真・王衆一)

する徐福伝承地の記録及び徐福研究者の特別寄稿を収録し、「徐福さん」という本を編集発行しました(HYPERLINK <http://www.1com.jp/~nestbook/> 参照)。

多くの謎からテーマを選び謎解きに挑戦しましょう。最後に強調したいことは、これらの課題解決には中国・日本・韓国の更なる国際協力が必要だということです。日中韓の民間人による徐福研究フォーラムは既に定着しています。「国際会議から共同研究へ」、それが次なるテーマになることを期待しています。

次世代に引き継ぎたい

二〇一〇年に開催された「第八回徐福文化国際検討会(中国江蘇省連雲港市贛榆県)」に出席したのが縁で寄稿する機会を得たことは私にとって大変名譽なことでした。この記事により学者諸兄はもちろん、総合科学の対象に相応しいより多くの老若男女、特に徐福と同行した童男童女と同年代の人たちが徐福研究にそして国際会議に参加し、世代を超えて徐福研究が引き継がれることを切念しています。この記事を日本の徐福研究先駆者であり、徐福研究普及に生涯尽力され、われわれを導き続け、二〇一一年五月十二日百歳で天寿を全うされた奥野利雄先生に捧げます。

古代における有明海沿岸地域と

中国・江南地方の交流について

佐賀県徐福会
大串達郎



1. 徐福上陸地「佐賀市諸富町浮盃」の地理的位置

徐福船団の上陸地として知られている佐賀市諸富町は、有明海に注ぐ筑後川の河口に位置している。川の右岸を佐賀平野、左岸を筑後平野といい、筑紫平野という日本でも有数の平野を形成している。司馬遷の「史記」にいう平原広沢にふさわしい土地といえる。筑後川の中、下流域は古代から中世を通じて歴史の大きな舞台であったが、諸富町は、河口の港として重要な位置にあった。

2. 弥生の大遺跡「吉野ヶ里」の意義

吉野ヶ里遺跡は、諸富町から約10キロメートルの上流に位置している。

今から23年前（1989年）、その存在が大きくクローズアップされた。

「魏志倭人伝」に記された2～3世紀の状況を遺跡の上で初めて具体的な形で示してくれた。具体的には、大規模な環濠集落、巨大な墳丘墓、物見やぐら、城柵や高床倉庫群など「倭人伝」に記す倭人の世界を、当時の「クニ」の中心的集落のようすを私たちに示してくれている。また、吉野ヶ里遺跡の存在は、古代史にとどまらない日本史全体のとらえ方にまで影響する大きな問題を投げかけたといわれている。それは、大陸との交渉の窓口として玄界灘沿岸を重視してきた従来の研究姿勢が、他の地域の役割を忘れて、否定したりしてしまうことになりがちだったことに対して、有明海の重要性を浮かび上がらせたことである。

3. 歴史書に現れた有明海を通じた交流¹⁻³⁾

① 日本書紀 雄略天皇10年の記事

雄略天皇を含むと考えられている、いわゆる「倭の五王」は、たびたび江南にある南朝に遣使しているが、雄略天皇10年に呉へ派遣された身狭村主青が、珍しい土産として鷺鳥を2羽をもって筑紫へ帰ってきた。ところがこの鷺鳥は水間君（水沼君）の犬に食われて死んだという。水間君は筑後川河口左岸の港を支配した大豪族であった。また日本書紀の別本では鷺鳥を食い殺したのは、嶺県主泥麻呂の犬だと伝えている。水間にせよ嶺にせよいずれにしても雄略天皇のとき南朝から帰ってきた船は、諸富町からすぐ上流にある地に帰ってきている。さらに、日本の使者の身狭村主青という人は、何度か中国に派遣されているが、平安時代に書かれた「新撰姓氏録」にはその先祖は呉の孫権だと書かれている。

② 日本書紀 神代卷 海の北の道

日本書紀に出てくる「海の北の道」が、有明海ルートという見解を示したのは、故 門

脇禎二氏（日本古代史）である。同氏は、玄界灘の小島、沖ノ島にある宗像神社・沖津宮の祭祀に注目した。日本書紀の神代卷六段の一書に「市杵島姫命、田心姫命、端津姫命の三柱の女神が宇佐嶋（沖ノ島）に鎮座している。名付けて道主貫という。これは筑紫の水沼君らが祭る神である」という記述がある。ここに出てくる水沼君（水間君）は、前項の君と同一人物で玄界灘の宗像の豪族らと一緒に沖ノ島の祭祀に関係していることから、門脇氏は、「吉野ヶ里遺跡は、内陸部の環濠集落であるが、筑後川下流域にあり、有明海まで数キロと至近距離にある。海路で大陸と交易したことは十分考えられる。海の北の道がいわゆる有明海ルートに当たる可能性が高い」と見られている。

4 黒曜石交易

吉野ヶ里遺跡に行くと、丘陵上に点々と黒曜石の鏃をつくった薄片が落ちているのが見られた。その黒曜石の大部分が伊万里湾の腰岳から産出するものである。腰岳は、古代には船で入れる入り江がすぐ横にあった。伊万里は、江戸時代に佐賀県有田の焼き物の積み出し港として「伊万里焼」の名がついたほどの港だが、腰岳の黒曜石は、遠くは韓国釜山市の東三洞遺跡、南は沖縄本島、東は兵庫県まで運ばれている。腰岳の黒曜石は、旧石器時代から縄文、弥生まで約1万年を通じて、船で運べる範囲に広がっている¹⁾。

鏃などの石器というと簡単に考えがちだが、集落の近くの材料で適当につくったのではなくて、産地と消費地との間に供給のルートができていたのである。

森浩一同志社大学名誉教授は、腰岳黒曜石の広範囲への搬出が、西日本、とくに東シナ海東部での長い間の海上交易の目に見えない基礎になっていると考えられている²⁾。

江南との交易の問題など考える場合、いちばんの発端には旧石器・縄文・弥生の各時代を通じて腰岳黒曜石にみられる広範な海上交通の動きがあり、これが後に江南まで倭人がひんぱんに行く先駆的な経験や技術になっていると考えられている。これらのことから私の推測であるが、江南の古代遺跡に黒曜石がみられたら腰岳産の可能性が高いと思われる。

5 再び古代の諸富町を考える。

徐福船団が有明海に入り浮盃に上陸したのは偶然ではなく、航路が開かれていたと想像される。世界最大ともいわれる有明海の干満の差（6メートル）に伴う、潮流の早さも航海を大いに助けたものと考えられる。江南との交流では、よく遣唐使船が寧波（ニンポウ）の地に渡ったのが有名であるが、今回記述したとおりに古くから有明海を通じて、江南との交流があったことがわかる。徐福の上陸地といわれる諸富町の果たす役割は大きかったと考えられる。

引用参考文献

1. 高島忠平・森浩一監修『吉野ヶ里、邪馬台国が見えてきた』
2. 森浩一、アサヒグラフ編（1989年）「吉野ヶ里遺跡が語りかけるもの」
3. 佐賀新聞社刊（1989年）、「弥生の光芒 検証・吉野ヶ里遺跡」－大陸との交流、海の北の道－

<著者プロフィール>

大串達郎（おおぐし たつお）

1948年生まれ。

佐賀県諸富町役場企画課長 佐賀県徐福会事務局次長

Ⅱ．徐福に関連した技術・歴史・文化・交流

徐福の伝えた技術

童男山・犬尾城址保存会相談役
赤崎敏男



1. はじめに

中国における徐福の東渡、経由した韓国、そして、日本では徐福上陸伝承地や徐福に関連して中・韓・日の研究者が様々な分野から、多くの研究論文が発表されている。しかし、論文の中には考古学からのアプローチが少なく、徐福関連の地域や中国・韓国・日本の細かな遺跡や遺物の比較研究が十分とは言えない。徐福東渡を史実として立証するためには今後の徐福研究に於いて考古学上の研究が不可欠と思われる。

日本における徐福上陸などの伝承地は九州南部の鹿児島県から青森県まで、二十数か所存在しているが、これまで、伝承地域を考古学面からアプローチした研究は非常に少ない。2003年には韓国西帰浦市での徐福東渡国際シンポジウムで、七田忠昭氏が初めて徐福上陸伝承地の佐賀平野を考古学的視点から発表されている。また、大阪徐福友好塾の鳥居貞義氏は度量衡、五穀、弩弓、銅銭などの考古遺物研究の必要性を説かれている。

2009年には金慶柱氏が「徐福東渡時期の済州島社会」と題し済州島での考古学成果からアプローチされている。同年の中国慈溪徐福文化国際論壇で、赤崎は「徐福と五穀」と題して発表し『史記』に記された五穀を考古学の成果を基に推定している。

中国でも近年、秦皇島市や瑯琊台から漢代をはじめ、秦時代の始皇帝巡行関連と考えられる遺構や遺物が多数発見されており、今後の考古学の成果が期待される。

2. 『史記』の百工を考える

『史記』には 卷百十八 淮南衡山列傳 第五十八に「海神曰 以令名男子若振女與百工之事 即得之矣 秦皇帝大説 遣振男女三千人 資之五穀種種百工而行 徐福得平原廣澤 止王不來」とあり、男女三千人と五穀の種、百工を遣わすと記述されている。百工についてはこれまで具体的な研究は少なく、百工の意味として、

「さまざまの工人、また、さまざま」広辞苑第六版 岩波書店 2008,1,11

「もろもろの工人、各種職人」大辞泉 小学館 1995,12,1

「もろもろの工人、各種の工人」日本国語大辞典第二版第十一卷小学館 2001,11,20

と日本の百科事典では各種の職人、工人として捉えている。

中国で最も古い手工業の技術文献とされている『考工記』は中国の春秋戦国時代の官営手工業のそれぞれの職種の工業技術を記述した文献とされ、中には秦時代の大量手工業技術もあり、一連の生産管理と造営制度を反映しており中国科技史、工芸美術史などの文化史上最も重要なものである。『考工記』の作者は不詳で西漢時代に制作され、一部は欠くが全文7000字余りの記述がある。

その内容として木工、金工、皮革工、染色工、玉工、陶工の六種類三十個の職種があるがそのうちの六種はすでに伝わってはず、後で追加された一種類を加え二十五種類が記述

されている。書中では別に車輿、宮室、兵器、礼楽器等の製作工芸と試験方法があり、数学、力学、音響学、冶金学、建築学等に及んでいる。

『考工記』の作者と年代に関して研究者の中には、斉国の官書（斉国が制定する指導、監督官庁手工業、職人労働制度の書）で、作者は斉の稷下学宮という学者でその編集はすでに春秋から戦国初期に及び一部の内容は戦國中晩期のものも含まれる。

その内容として木工七種、金工六種、皮革工五種、染色工五種、玉工五種、陶工二種の三十個の職種がある。

木工（車輪・輿・弓・草庵・匠・車・梓）

金工（筑・冶・段・桃等）

皮革工（函・鮑・鞞・布・裘）

染色工（画・績・鍾・筐等）

玉工（玉・彫・矢・磬等）

陶工（陶・瓦）

これらが細かく細分化され、100の仕事が官庁手工業に属することが説明されている。

3. 日本における大陸系文物の受容

『史記』には始皇帝本紀 28 年(BC219)、25 年(BC212)、37 年(BC210)の三ヶ所に徐福の東渡に関する記事がある。徐福の東渡の時期は、日本では紀元前 4 世紀に始まったとされる、弥生時代の初期(弥生時代早期)にあたり、朝鮮半島から大陸系磨製石器と伴に稲作文化が北部九州の玄界灘沿岸地域に伝えられ、その後、九州から日本各地へ水稻稲作が普及する時期にあたる。

大陸に最も近い九州北部地方は、いち早く大陸の新しい文化の流入の窓口となり、大陸系の文物の流入が多く見られる地方である。その中心は朝鮮半島の製品が中心となるが、BC108 年前漢によって楽浪郡ほか三郡を朝鮮半島に設置された以降は、中国系文物の出土が比重を増してくる。大陸系文物の多くは鉄器と青銅器で、鉄器として武器や農耕具、青銅器では武器、祭器、銅鏡・銅銭・このほか、金印や璧などがある。また、遺物として残りにくい木製品、漆製品、繊維製品などの中にも縄文時代からの系譜を持たない新しい技術を用いた製品が数多く見られるようになる。

遺跡としては環濠が弥生時代になって初めて出現し、環濠や城柵によって囲まれた城郭の建築技術、木材加工技術。墓制として支石墓、甕棺墓、墳丘墓などさまざまな文化が日本に流入して来ている。

その多くは中国で最も古い手工業の技術文献とされる『考工記』に記述されている技術であり、朝鮮半島を経由又は直接伝播した技術がすでに中国では百工として認識されていた技術ではないだろうか。

(1) 青銅器

日本における、青銅器文化は弥生時代前期末に始まり後期に及んでおり、特に墳墓に多く埋葬されている。

第 I 期 弥生時代前期末—中期前半（BC 2 世紀—BC 1 世紀）

北部九州に初めて青銅器が導入される時期で、実用的な細形銅剣・矛・戈等の武器、多紐細文鏡など朝鮮製青銅器で、北部九州玄界灘沿岸の福岡平野や唐津平野から出土してお

り、秦の滅亡後 BC202 年に中国を統一した前漢によって追われた、燕や齊の亡命者が多数朝鮮に流入し、BC190年に燕人衛満が、衛氏朝鮮を建国した時期でもあり、遼寧式銅剣から朝鮮式銅剣に変化しており、戦国文化の導入が見られる。

第Ⅱ期 弥生時代 中期中頃から後半（BC1世紀後半—AD1世紀前半）

前漢鏡や朝鮮製武器など中国・朝鮮系の文物が北部九州沿岸部や内陸部でも発見され、鉄製武器も出土する。前漢は BC108 年に衛氏朝鮮を滅ぼし楽浪郡以下四郡を朝鮮半島に設置したことによって、楽浪郡を通じて多くの漢文化が伝わり、朝鮮半島南部や、北部九州に浸透していった時期にあたる。それと共に、BC118 年に鑄造された五銖銭や半両銭などの前漢銅貨が多く出土している。

（2）銅 銭

齊国では刀銭がつくられ流通していたが、戦国末期には各地で布銭や刀銭が多量に発行されていた。秦始皇帝は各地でばらばらであった貨幣制度を、円形方孔の半両銭に統一したが、辺境では引き続いて戦国期の貨幣が使用されている。前漢の武帝は五銖銭を発行させ、前漢時代に220億枚も発行している。前漢に代わった王莽は20数種類の貨幣を発行し、王莽「新」時代紀元14年に鑄造された貨幣は、日本の弥生時代後期を決定する材料となっている。

『史記』東夷伝第三十に「天下叛秦、燕、齊、趙民避地朝鮮数万口。」とあり、秦によって滅亡させられた国々から大量の避難民が朝鮮半島に到来している。このためか、朝鮮半島北部では大量の銅銭が発見されている。

弥生時代から古墳時代にかけて日本で出土した中国の貨幣は貨泉、貨布、五銖銭があり、王莽「新」代に鑄造された貨泉が16枚、貨布2枚、推定五銖銭が1枚と貨泉が圧倒的に多い。また、沖縄では二ヶ所から明刀銭が出土している。

朝鮮半島北部では大量に出土しているが、半島南部の出土地を上げてみると次の通りである。

济州島济州市健入里 （鏡2、五銖銭4、貨泉11、貨布1、大泉五十2）王莽「新」時代の貨幣が中心。

昌原郡熊東面外洞里 （五銖銭）

金海市金海貝塚 （貨泉1）

（3）連 弩

『史記』秦始皇帝本記 25 年には「蓬萊藥可得 然常為大鯨魚所苦 故不得至 願請善射與俱 見則以連弩射之」と連弩の記事がある。

弩は戦国時代後半から使用され、『考工記』には角、筋など六材を使用したとあり、湖南省長沙などで実物が出土している。秦始皇帝兵馬俑中にも歩兵の主力となる弩弓隊があり、立射、跪射等の三段構えで編成されている。

連弩は一度に複数の矢を放つ大仕掛けの弩とされていたが、最近、楚の下級貴族の墓から18本の矢を装填でき、一度に2本ずつ飛ばすことができる戦国期の連発式弩が出土しており、一度に複数の矢を飛ばせる連発式の大型弩であった可能性もでてくる。

弩の国外持ち出しは堅く禁じられていたが、朝鮮半島北部では多く発見されており、日本でもわずかではあるが、島根県出雲市姫原西遺跡で、弥生時代終末期（AD3世紀頃）の木製弩の一部と青銅製鏃を模した木製鏃が、福岡県安徳台遺跡から弩弓矢に使用された

銅鏃が出土している。

4. 五穀

『史記』卷百十八 淮南山列伝に「秦皇帝大説 遣振男女三千人 資之五穀種種百工而行」に五穀の記事があり、一般的には米、麦、粟、豆、黍と言われているが、『史記』卷30 東夷伝 弁辰に「土地肥美、宜種五穀及稻、曉蠶桑、作縑布、乘駕牛馬。」とあり、五穀に稲は含まれていないなど、五穀の種類は時代や地方によって異なっている。

中国、朝鮮半島、ロシア沿海州での先史時代（初期農耕文化期）の出土穀物には稲、粟、麦、黍、蜀黍（高粱）、大豆、小豆の各種がある。発見された穀物で稲が最も多く、粟がこれに次いでいる。稲は東アジア穀物出土遺跡の7割近くに達している。出土穀物の分布では、粟をはじめとする畑作物は淮河以北に分布域があり、その北限は北緯45度とされている。一方南側では淮河が中国において、稲作と粟、麦作の境界にあたっている。

黄河流域ではBP8000年以降は粟が多く作られこの地域の基本的な栽培穀物であったことが知られ、一部には黍が見られるが量的に多くはない。仰韶文化期の後半期になると稲の栽培が始まり、粟、黍、稲が主要な作物となっている。

東北地方では、粟は黍、蜀黍（高粱）、豆などと共判するが豆類の出土が多くなり、遼東半島、朝鮮半島では新石器時代に栽培されていた畑作物に稲が加わっている。

稲については、BP4000年頃には遼東半島に到達しており、これら以北には稲の出土は未発見で、東アジアでは先史時代稲作の境界は北緯40度が北限と見られている。

華南地方では、インディカ、ジャポニカ種の稲が栽培されているが、朝鮮半島、日本に伝わった稲の多くはジャポニカ種の稲である。粟は華南地方には少なく、華中、華北、東北部、朝鮮半島に多く栽培されている。また、黍、モロコシ、マメは華北から東北部、朝鮮半島にかけて多く出土している。

秦とほぼ同じ時代の穀物栽培については、洛陽市漢河南県城墓から出土した穀物名を書いた灰陶があり、これによると稲、黍、粟、麦、の四つの穀物があるが、『史記』に記載された五穀については、徐福の出身地域から集められた可能性が強いため、この地方で栽培されていた、稲、黍、粟、麦のほか、蜀黍か豆が考えられるが、齊地域からの穀物とすると、豆の可能性が強い。

徐福が渡来したとされる、日本の縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて、各地の遺跡から見つかった植物遺体・プラントオパール・靱痕土器などから、栽培されていた植物が判明しているが、コメ、アワ、アズキ、オオムギ、ソバ、ヒエ、リョクトウ、コムギ、モロコシ・エゴマ・ダイズ・ゴマが確認されている。

5. おわりに

今回は『史記』の徐福関係の記事中から、考古学的に捉えることができると思われる「百工」と「五穀」について考えてみた。百工は『考工記』に記述されている技術の一部である青銅器、銅銭、連弩を取り上げたが、『考工記』の分析が十分でなく、今回、日本に流入してきた弥生時代遺物との比較検討がわずかししか出来なかった。今後は『考工記』を解析しながら徐福東渡時期に大陸から日本に伝わった多くの遺跡や遺物の比較研究を進めることにより、『史記』に記述されている百工を解明する事が出来ると信じている。それとともに

に、日本・中国・韓国各地に残る徐福伝承地域の考古学的な調査を三国連携して進める必要性を感じると共に、今後は、多くの考古学者の参加を求めて徐福伝承を歴史的な事実として確立する事が重要である。

参考文献

1. 高倉洋彰「弥生時代における漢代文物の受容」『漢委奴國王』金印展図録 1984
2. 小田富士雄「末盧国」歴史と旅第16巻第11号 1988
3. 岡崎 敬「日本及び韓国における貨泉・貨布及び五銖銭について」森貞次郎博士古希記念論集1982
4. 當眞嗣一「具志頭城北東崖下洞窟内で発見された明刀銭について」 沖縄県立博物館紀要23号 1997
5. 「よみがえる漢王朝—2000年の時をこえて— 1999
6. 甲元眞之編「環東中国海沿岸地域の先史文化」第2編（東アジア先史時代穀物出土遺跡地名表）熊本大学考古学業書7 1999
7. 藤尾慎一郎「日本の穀物栽培・農耕の開始と農耕社会の成立（さかのぼる穀物栽培と生産経済への転換）」国立歴史民俗博物館研究報告 第119集 2003
8. 聞人軍 訳注『考古記 訳注』 上海古籍出版社 2008
9. 金慶柱「徐福東渡時期の済州社会—遺跡と遺物を中心として—」瀛洲徐福文化第8号 2009

（本文は韓国済州島で開催された2010年第9回徐福文化国際学術大会で発表した原稿に、一部加筆訂正をしたものである。）

<著者プロフィール>

赤崎敏男（あかさき としお）

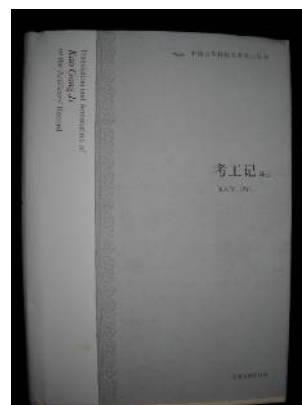
1950年4月30日 福岡県生れ。國學院大學史学科卒業、九州大学埋蔵文化財調査室、八女市教育委員会・岩戸山歴史資料館館長、2010.3 退職

日本考古学協会会員、やめ郷土史学校事務局、童男山・犬尾城址保存会相談役、韓国・巨済島徐市留宿地研究会顧問、中国・連雲港市徐福研究所研究員

著書・論文：『竹並遺跡』東出版寧楽社、『横穴墓』、『土製模造品』、『石人・石馬』雄山閣、『岩戸山古墳』考古学ハンドブック 新書館、「童男山古墳と徐福伝説」中外徐福研究、

中国科学技術大学出版社、「童男山古墳と徐福伝説」西日本文化No.421 西日本文化協会、「八女の徐福伝説」アジア遊学52 勉成出版 外多数

住所 福岡県筑紫野市二日市南1-7-14



『考古記 訳注』上海古籍出版社

II-2 徐福関連の文化遺産

非物質文化遺産と徐福伝説

- 伝説を取り巻く多様・多重な伝承主体 -

達 志保



2011年11月26日、杭州において中国浙江省文化芸術研究院・浙江大学人類学研究所共催による当代非物質文化遺産保護的行動研究:政策,実践和理論反思研討会が行われ、研究発表を行った。本稿は、その内容を中国語で論文発表(『文化遺産』2012年第2期、ISSN 1674-0890、2012年4月、中国・中山大学 30-34頁)したもの日本語の元原稿である。

要旨

伝説はいつの時代も年月とともに変容し、いまなお変わり続けている。それは変えていこうとする人がそこに存在するからである。ここで取り上げる徐福伝説は、様々な地域で、その地域に関わる人びとなど、多様・多重な伝承主体によって書き継がれ、語り継がれ、現在もそれぞれの場で生かされている。徐福伝説という中日韓に広がる伝説をみていくと、非物質文化遺産として保護されていく際の伝説の多様・多重な伝承主体が見えてくる。彼らの動向こそ、まさに伝説が作られていく過程であり、それが中国国内だけでなく、日本と韓国とを巻き込んでいくこと、そしてその逆もあるという点は、徐福伝説の特徴であろう。

筆者は非物質文化遺産という称号を得たことで動き出す伝説を研究することこそが必要なのではないかと考える。伝説研究は遺産の考古学的研究、古代史的研究としてだけではなく、いまそこに伝説とともに暮らしている人びとの社会的なコンテクストのなかで捉える考現学的研究をも必要としているのである。

キーワード：非物質文化遺産 徐福伝説 多様な伝承主体

1. はじめに

本稿の目的は、現在中国で繰り広げられている非物質文化遺産保護活動が、どのように東アジア諸地域の伝説に影響を与えて展開しているかを、伝説を取り巻く多様・多重な伝承主体〔注1〕に注目して、検討することにある。

ここで取り上げるのは徐福伝説である。この伝説は徐福が不死薬を求めて東海に船出していくことから、その伝説を受容した日本と韓国でも、徐福の後日談を加えてそれぞれの地域の伝説として展開している。そのため、冒頭に記した「地域の伝説」の地域は中国国内に限定することができず、徐福伝説はすでに中日韓を中心とした東アジアをめぐる伝説としてとらえざるを得ない。

筆者はこれまで日本における徐福伝説を中心に、調査研究を重ねてきた。中国・韓国については伝承地を訪ねてはいるが、まだ本格的な調査を行うことのできる準備が整っていない。しかし日本各地の伝承事例においても、徐福伝説は日本国内だけで完結することのできない、地域外を巻き込んだグローバルな伝説となっている。これまでの日本における

徐福研究とそこから見えてきた徐福伝説の現在から、中国における非物質文化遺産保護活動について考えてみたい。

2. 徐福伝説の現在

(1) 徐福伝説とその変容

先に徐福伝説の概要を記す。徐福伝説の記録は司馬遷の『史記』に遡る。その発端は始皇帝本紀 28 年、紀元前 219 年、秦始皇帝の最後の願いである不死を叶えようと、方士徐福が登場し、童男女数千人や先進の技術者とともに、五穀の種を携えて東海に船出することを進言し、実現したことにあるとされる〔注 2〕。

この後、徐福は、不死薬はみつかったが鯨が邪魔をすると報告し、新たに連弩を用意させた。始皇帝 37 年、紀元前 210 年に徐福一行は改めて船出する。この結末は始皇帝本紀中ではなく、淮南衡山列伝第 58 の伍被の供述書の中に記された〔注 3〕。徐福は平原広沢を得て、王として帰らなかったというのである。その具体的な地名は記されなかった。

徐福はいったいどこにたどり着いたのだろうか。『史記』を受けて、中国の歴史書が徐福を書き継いでいく一方、徐福の船出については盛唐の時代に李白が「古風五九首（其三）」で詠み〔注 4〕、白楽天も「新樂府五十首（其四） 海漫漫 戒求仙也」で、徐福が連れた童男童女たちが行き着くところなく、船の中で老いてしまうという結末を作り出した〔注 5〕。日本の貴族社会は中国の文学を教養として積極的に学び、自身の作品の中にも登場させていくことになる。『源氏物語』〔注 6〕や『平家物語』〔注 7〕といった日本の代表的な古典作品の中にも徐福は顔を覗かせている。

その後、徐福の結末は時代とともに、次第に中日韓で具体的な地名があがりはじめ、さまざまな形で伝承されることになる〔注 8〕。徐福の日本渡来については、958 年、釈義楚『義楚六帖』巻 21、国城州市部第 43、国、日本国の中で、日本僧の瑜伽大教弘順大師賜紫寛輔からの聞き取りという形で伝えられるのが初めとされているが〔注 9〕、既に 805 年には、遣唐使として渡った空海がいよいよ日本へ帰国するという送別の宴で、中国の鴻漸が「奉送日本国使空海上人橘秀才朝献後却還」という詩を贈ったと伝えられている〔注 10〕。鴻漸は徐福を引き合いに出し、空海が日本に帰ったら音信が途絶えてしまうだろうと帰国を惜しんだのである。この頃から、日本は徐福の渡来先としてとりあげられるようになる。

徐福の船出と渡来先としての日本の登場は、単なる想像なのか、何らかの根拠があったのか、その実際は不明だが、ただ私的な場面つぶやいているのではなく、徐福と組み合わせて日本を登場させていることには、なんらかの意図があるように思われる。

それが明白となったのは、1376 年の出来事である。この年、日本の留学僧、絶海中津は明に渡り、英武楼にて明太祖に謁見の機会を得る。謁見の際、熊野の徐福祠の話になり、絶海と太祖は詩の応酬をする。すでにこの時代、熊野の徐福祠は中日の共通認識となっていたようである。それにしてもなぜ留学僧にすぎない絶海が太祖から謁見を許されたのか。蔭木英雄氏によれば、憶測だとしながら、太祖は当時、倭寇に苦しめられ、外交問題に行き詰まりを感じており、その打開策として、室町政権に発言力のある嵯峨派につながりを求めたのではないかと指摘している〔注 11〕

こうして徐福は数百年も前から、政治的な場面に登場することとなった。それは決して過去の話ではない。中日国交正常化以後、中日の外交交流の中で、徐福が探した不死薬か

と伝わる天台烏薬が中国の首脳への土産にされる〔注 12〕など、徐福は時代を超えて外交の場に登場し、今も折に触れて使われているのである。

徐福伝説は次々と日本や韓国の具体的な地名を獲得していった。徐福は各地でその土地特有のストーリーをもちながら、先進の技術を運んだ渡来人として、あるいは神として祀られてきた。例えば、三重県熊野市波田須で伝承される徐福伝説は、徐福神社とともにあったが、1907年、三重県から祭神徐福の名を奪われ、不詳一座として波田須神社に合祀された。それは中国人を祀ることが許されなかったからだと言われていた。ところが当時の資料をつぶさに調べていくと、地域の人々はなんとかして徐福神社を自分たちの土地に留めておきたいと、様々な画策を行っていた。しかしそれが果たせず徐福神社が合祀されてしまったため、青年団が神社跡地に徐福の墓を力づくで建てたのである。遠く海を渡ってきた渡来人の徐福を、地域の内なる者として祀りつづけてきた人々の思いはいったいどのようなものであったろうか。自分たちの土地に徐福は変わらずいて、自分たちを見守っているのだという信念が、彼らに墓を造らせたのであろう。外交の舞台とは全く別の伝承主体が徐福をとり囲んでいる。

徐福伝説は実に多くの文字資料に書き継がれてきた。徐福にまつわる記録は600点を超え、現在も増え続けている〔注 13〕。しかし徐福伝説は文字資料の中でのみ伝えられているのではない。徐福はさまざまな地域で、そしてその地域に関わる人びとなど、多様・多重な伝承主体によって書き継がれ、語り継がれ、現在も生かされているのである。

（2）中日韓における徐福伝説の現在

長い間、徐福伝説は学問的にとりあげられることはなかった。2007年7月、筆者は北京師範大学民俗典籍文字研究中心・文学院民俗学与社会発展研究所にて、「全球化与無形文化遺産 - 徐福伝説的東亜網路」と題して報告の機会を得た。そのとき筆者は、当研究所長より、前研究所長であった鐘敬文氏が存命の時には、徐福伝説で報告を行いたいという人があったが、徐福伝説は学問ではないと断られたけれど、時代が変わり、徐福伝説は研究になりますねといわれた。こうした反応は実は日本でも同様である。煩わしい徐福伝説によく付き合いますねとこれまで何度も言われてきた。

徐福伝説の煩わしさ、それは伝説をとりまく多様・多重な伝承主体を指していると思われる〔注 14〕。現在、徐福にまつわる伝承地は中国で10数ヶ所、日本で20数ヶ所、韓国でも数ヶ所を数える。では中日韓における徐福にまつわる組織がどのくらいあるのかを数えてみると、活動休止状態や既に解散しているものもあるが、中国22、日本22、韓国5の約50の組織名があがってきた。この数は伝承地の数よりも多い。

徐福にまつわる組織について簡単にまとめておこう。中国では中国全体の徐福にまつわる組織をまとめる会として中国徐福会がある〔注 15〕。中国徐福会は、公式には1993年に結成されているが、結成以前の1991年秋に、設立準備委員会を北京の人民大会堂で開催している。この準備委員会開催のきっかけは、1991年春に日本で文化人たちによる日本徐福会が結成され、それに影響を受けたからだと聞く。現在中国徐福会会長で元國務院研究センター長の張雲方氏によれば、当時、自身も中国徐福会への加入を熱心に勧められたという。勧めた人物は当時中日友好協会副会長であり、日中国交正常化の際に大きな役割を果たした肖向前氏であった。中国徐福会は初代会長に元インド大使の李連慶氏を迎え、2代

目には元大阪総領事の劉智剛氏というように、国レベルの外交の専門家を配置した。2010年末、中国徐福会は大きな人事の改選をおこなったが、その傾向は現在も変わらない。現在、中国徐福会は中国各地に14の分会をもち、会員数は約10万人という全国的な組織になっているのである。

韓国についてはどうだろう。韓国では専ら済州島が徐福伝説の伝承地として名乗りを上げ、長く研究会などを行ってきた。しかしここ数年、慶尚南道が徐福伝説を新たな観光資源として注目し始め、2010年には韓国徐福中央会という韓国全体の徐福の組織が誕生した。会長には韓中親善協会会長で元ソウル市長・元国会議員の李世基氏が就任した。また、慶尚南道発展研究院において、2011年9月30日に観光をテーマにして、徐福に関する国際会議が開催された。徐福伝説が慶尚南道の観光資源となるか否かの決め手は、慶尚南道にのみ閉じられた徐福ではなく、中日韓を往来することによって商品価値をもつという観点から徐福が検討されたのである。

日本でも現在、こうした海を渡る徐福という視点からの企画が検討されている。中日韓の連続ドラマ化もその1つである。中日韓で組んでなにか1つの仕事ができないかというときに、歴史ロマンあふれる徐福伝説は格好の素材なのだという。しかし日本では徐福にまつわる組織を1つにまとめる組織がない。実はこれまでに幾度か日本全体を取りまとめようとする会が作られようとしてきた。しかしどれも結成まで至らなかった。日本にはなぜそうした組織が生まれえないのか。

それは各伝承地がそれぞれに地域の中で運営しており、あるいは古代史ファンがグループを作っており、それらの活動に上部組織を設ける必要を感じないからだと思われる。ところがこうした傾向も少しずつ崩れてきている。各伝承地が地域の中でのみ活動していれば問題は無いのだが、現在、中日韓では国際会議の名の下に、年数回はどこかで徐福に関するイベントが行われる。自分たちも参加した方が良いだろうか、あるいは自分たちが企画したら、みんなは来てくれるだろうか。そんな時、別の研究会はどのように対応しているだろうかと他の組織の動向が気になり出したのである。ところがそれに答える組織は今のところない。そのため、筆者がそのほぼ全ての相談を受けているのが現状である。

特に2011年の本年は9月に中国徐福会が訪日団を結成して来日、東京、横浜、富士吉田、熊野、新宮、佐賀、八女など、半月をかけて徐福にまつわる地域をまわった。筆者は日本をほぼ縦断するその旅程を組む手伝いをしたが、各伝承地や組織の対応のしかたを通して、それぞれの地域の伝承の現在を知ることにもなった。

地域の伝承主体ということで、ここにもう1つ記しておきたいことがある。日本だけでなく中国・韓国でも長く大きな存在であった日本の徐福研究家であるとともに郷土史家である2人が、2011年に相次いで亡くなられた。筆者が訃報を受けた後、中日韓の各地にそれを知らせると、間もなく弔電が届き、葬儀場を華やかに彩った。これは個人的なことのようにだが、中日韓において、徐福伝説を取り囲む伝承主体が、深い関係を作ってきたからに他ならない。確かに情報ツールは時とともに大きく変わった。しかしそれだけではないだろう。各地の徐福伝説を盛り上げたいという思いをもった多様な伝承主体が長い付き合いを経て、訃報に即座に対応するほどの関係へと育ち、ネットワークを作り、それがようやく熟してきたのである。これが現在の徐福伝説を取り巻く組織やネットワークの現状である。

3. 非物質文化遺産と徐福伝説

中国徐福会会長の張雲方氏によれば、徐福伝説は 2008 年に浙江省の慈溪と象山が連名で中国の非物質文化遺産登録を申請し認可を受けたのをはじめ、最近も江蘇省の連雲港が申請し、認可を受けたという。慈溪と象山については確認することができなかったが、連雲港については「徐福東渡伝説」として国家級非物質文化遺産登録に入っていることを確認することができた。

張雲方氏は 2010 年と 2011 年の中国徐福会会長拡大会議において、今後は中日韓 3ヶ国が連名で世界の非物質文化遺産の申請をすることを提案しようと言ったという。中国国内だけではない、前述の中国徐福会の訪日団も、折に触れてこの提案を披露した。

非物質文化遺産を巡るこうした中国の志向は、まさに現在の徐福伝説を取り囲む状況を示していると思われる。各地がそれぞれに現在の関係性の中で動き、それを統括しようという動きもおきている。報告者は約 25 年にわたってこの徐福伝説を取り巻く環境の中に身を置いてきた。この視点から見ると、「中日韓 3ヶ国が連名で世界の文化遺産に」という発想は、伝説を取り囲む日中韓の各地の関係がここまで熟してきたからこそこの発言であることが理解できる。伝説を取り囲む多様・多重の伝承主体こそが、徐福伝説と伝承の歴史そのものを作り出してきた、というのが徐福をめぐる動きを 25 年間みていた筆者の感想である。

少なくとも数年前までは「中日韓で」という発想はなかったであろうとおもわれる。今後どのような手続きをとろうとしているのか具体的な動きはまだ不明であるが、2012 年は徐福東渡 2222 年記念の年ということで、中国・象山での「徐福」国際会議開催も決定している。その際には開会式を地元の祭りの日に合わせて、祭りの見学も入れる予定だという。

4. まとめ

徐福を取り囲む環境は多様・多重な伝承主体に支えられて現在に至ることを見てきた。徐福伝説は、現在でこそ盛んに展開しているように見えるが、実は現在だけでなく、これまでもずっと伝説は常にその時代や地域の要請を受けて、地域の人びとの誇りをつくりと共、政治的にも利用され、振る舞ってきたのではなかったろうか。

これは徐福伝説だけの問題ではないだろう。伝説の特性を自覚的にとらえてみると、伝説を伝承する役割を担っているとされる「伝説の管理者」だけではなく、郷土史家や学校教育者、自治体職員、中国では外交部の人々といった実に多様で多重な伝承主体の関わりが見えてくるのである。もちろん筆者もまた、そうした場にかかわる一人である。

施愛東氏はいま中国で国家的な関与によって取り上げられる非物質文化遺産に対して、「地方政府にとって『国家級』という文化の看板を獲得することは、単なる行政上の功績にとどまらない。それは観光開発につながり、地方経済の活性化を促すことにもなる〔注 16〕」が、他方で非物質文化遺産は「見せかけの文化的栄冠に過ぎない (20 頁)」という。そして、「研究者は民衆社会と距離をおき、傍観者の立場に立ってこそはじめて、感情移入せず、当事者として迷い込んでしまう危険性を避け、さらには伝統文化が民間でどのように解釈され、利用され、創造され、伝承されるかを真に認識することができる (22 頁)」、そうでないと研究者は「特殊な当事者」になってしまうというのである。

その背景にあるのは、中国国内における現在の非物質文化遺産保護運動において民俗学

者が求められている役割、および伝説を「遺産」として現地の文脈から切り離して研究する方法にあると思われる。施氏が批判的に述べているように、「実際にフィールドへ赴き確かな学術研究を展開するわけではない」（23 頁）という研究方法そのものが問題なのではないだろうか。筆者は非物質文化遺産という称号がたとえ「見せかけ」だと言われようと、そのこと自体が非物質文化遺産としての伝説のおかれている環境であり、さきにも述べたように、これまでもそのようにして伝説は伝承されてきたのだとすれば、その称号を得たことで動き出す伝説を研究することこそが必要なのではないかと考えている。伝説研究は遺産の考古学的研究、古代史的としてだけではなく、いまそこに伝説とともに暮らしている人びとの社会的なコンテクストのなかで捉える考現学的研究（民俗学、人類学、社会学など）をも必要としているのである。

筆者自身、まもなく 25 年になる徐福研究のなかで、伝承の 1 つ 1 つが徐福研究を取り囲む地域の歴史そのものであり、当然、もう傍観者にはなれないことを自覚している。先の言葉を借りれば「特殊な当事者」である。しかし、伝説を「遺産」として取り上げフィールドから切り離して研究する考古学的民俗学はともかくとして、伝説が伝承される現場のコンテクストを捉えようとする研究方法をとる場合、我々ははたして傍観者になれるものだろうか。筆者はもちろん悩んだ末ではあるが、傍観者であることよりも、当事者たちに成果をフィードバックすることを選んできた。それは、すでに私たちは伝説が伝承される現場のコンテクストの一部でしかあり得ないという認識に基づいている。

伝説は現在、細々と伝承を続けてきた「伝説の管理者」の中だけにあることは明白である。地元の郷土史家が熱心に取り組み、それを学校の中で取り入れ、様々な形の伝承が行われてきたし、これからもおこなわれていくだろう。地方自治体の取り組みも大きな影響を与えるし、それが国であればなおさらである。こうした多様で多重な伝承主体が伝説の現在を作っているのである。

これから取り組まなくてはならない問題は、そこに非物質文化遺産という「称号」が入り込んだとき、自分たちはいま見えている伝説のいったい何を知っているのかと問い、その伝承の創造と変容をいまできる限りの努力で集めていくことにあるのではないだろうか。その点で、非物質文化遺産保護活動は、その作業に力を貸さないのだろうか。

伝説はいつの時代も年月とともに変容し、いまなお変わり続けている。それは変えていこうとする人がそこに存在するからである。徐福伝説という中日韓にまたがる伝説を事例としてみていくと、非物質文化遺産として保護されていく際の伝説の多様・多重な伝承主体が見えてくる。彼らの動向こそ、まさに伝説が作られていく過程であり、それが中国国内だけでなく、日本と韓国とを巻き込んでいく、そしてその逆もあるという点は、特筆すべきこの伝説の特徴なのではないかと思われる。

例を挙げれば河北省塩山県では中日戦争の中で、徐福にまつわる寺跡の碑が日本軍によって赤い布に包まれて持ち出されてしまったという話がある。江蘇省連雲港市の徐福廟は日本軍によって壊されたと言われる。これらの出来事はどれも検証されることなくそれ自身が伝説の一部として今日まで伝承されて来た。こうした 1 つ 1 つの伝説を取り囲む事象を早急に調査研究していくこと、そのための非物質文化遺産保護活動であれば、筆者は積極的に取り組みたいと思うのである。

〔注 1〕 伝承主体を多重と表現するのは、地域に暮らしながら学校教育の中で実践しているなど、要素を多重にもつ存在があるからである。

〔注 2〕 吉田賢抗『史記』1 (『新釈漢文体系』38、1973、明治書院、336・355・361-363頁)

〔注 3〕 国民文庫刊行会『史記列伝』下 (『国訳漢文大成』16、1922、国民文庫刊行会、106-107・326-327頁)

〔注 4〕 『李白全詩集』上 (『続国訳漢文大成』、1978、日本図書センター、38-41頁)

〔注 5〕 『白楽天全詩集』1 (『続国訳漢文大成』、1978、日本図書センター、245-247頁)

〔注 6〕 『源氏物語』3 (『日本古典文学全集』14、1972、小学館、159頁)

〔注 7〕 富倉徳次郎『平家物語全注釈』中 (1967、角川書店、292-294頁)

〔注 8〕 具体的な地名として、韓国の新羅、日本の紀伊州・富士・熊野・熱田などがあがる。

〔注 9〕 『義楚六帖』(1990、朋友書店、459頁)

〔注 10〕 高橋良行「唐詩における徐福」上 (『学術研究-外国語・外国文学編-』43、1994、早稲田大学教育学部、10-11頁)

〔注 11〕 蔭木英雄『焦堅藁全注』(1998、清文堂出版、142-143頁)

〔注 12〕 国務院発展研究センターの張雲方氏の聞き取りによる。彼は実際に日本に天台烏菓を運んだ。

〔注 13〕 達志保『徐福論-いまを生きる伝説-』(2004、新典社、全272頁)。本書には徐福文献一覧があり、520の文献をあげている。出版後も継続して徐福文献を調査しており、現在の文献数は600を超えている。

〔注 14〕 ここでいう伝承主体は徐福伝説に関する組織を指している。このような組織は伝承主体には含まれないと考えられてきたが、伝説を伝える人という広い意味で伝承主体をとらえている。

〔注 15〕 中国徐福会の他に中国国際徐福文化交流協会という組織もあるが、現状からいえば、山東省龍口市の徐福研究会の上部組織といった意味合いで存在しており、地域間を繋ぐ役目を果たしているわけではない。

〔注 16〕 施愛東「中国における非物質文化遺産保護運動の民俗学への負の影響」(『現代民俗学研究』第3号、2011年5月、現代民俗学会、19-27頁)

<著者プロフィール>

達 志保 (つじ しほ)

1967年東京生まれ、愛知県在住。愛知県立大学大学院国際文化研究科博士課程修了。博士(国際文化)。著書に『徐福伝説考』(1991年、一季出版)、『徐福論-いまを生きる伝説-』(2004年、新典社)他。現在、愛知県立大学・中京大学非常勤講師、豊田市矢作川研究所研究員、上海海事大学海洋文化研究所徐福研究室設立準備中(研究室主任就任予定)。蘇州市徐福研究会顧問、巨済島徐福研究会研究顧問、連雲港市徐福研究所特約研究員、日本口承文芸学会運営理事、日本民俗学会会員、日中関係学会会員

II-3 徐福関連の文献・歴史

富士古文書の一考察

神奈川徐福研究会理事・映画「徐福さん」監督
岡本明久



1. 神皇の時代に暦の制度が定められた

日本書紀によれば、日本最古の暦は元嘉暦と記されている。宋の元嘉20年(443)に何承天のつくった暦で、干支による紀年法。第29代欽明天皇(539~571)の時代、554年に百濟から暦博士により日本に伝えられ、第33代推古天皇の12年(604)から聖徳太子によって正式に使用され始めた。第41代持統天皇時代、697年には儀鳳暦がこれに代わった。

その後、日本の暦(陰暦)は、中国の暦(「唐書」記載の暦法)を踏襲した。月の満ち欠けの周期で日を数え、太陽年の365日に比べ11日少ない。そのため、2、3年に一度、閏月を入れ13ヶ月とした。5月の次は閏5月といった。大の月(30日)と小の月(29日)は毎年変わった。暦は毎年、陰陽寮(おんようりょう)で造暦された。

五行十干と十二支を組み合わせたものが干支であり、60年で還暦する。(別表参照)。世界共通の今日の太陽暦(365日)は、日本では明治6年1月1日から採用された。

富士古文書・神皇紀によれば、神皇第1代・鵜茅葺不合尊(紀元前2934年)が国法を定め、300日をもって1根としたとある。さらに第33代の田仲雄男王尊が、今より3266年以前に中国の殷国の暦の書によって、甲乙丙丁戊己庚辛壬癸の十干、子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥の十二支、並びに、木火土金水の五行を採用し、これを日に配して巡行することを定めた。また日夜を十二時間に分けて、子を夜中とし、丑寅卯辰巳を経て午を日中とし、未申酉戌亥の十二時と定めた。即位36根216日の時、月を目当てに暦の月を定めた。月の照り初めより月の照り終わりまでを1月と定め、月にも十干・十二支・五行を配し、十月を1根と改め、さらに1根を1年と改めた、と書かれている。

ちなみに、神皇は51柱、在位2258根(1856年)。神后摂政27柱、509根(418年)。故に、宇家潤不二須世は全てで、2767根(2274年)となる。

その後、人皇の神武天皇(BC660)から125代今上天皇まで、現在に至っている。

神皇の寿齢は400歳以上が1柱、300歳以上は2柱、200歳以上は8柱、100歳以上は38柱を数える、100歳未満は2柱のみ。

人皇の最高齢は第12代景行天皇と第16代仁徳天皇の143歳である。神武天皇は127歳、100歳以上は12柱、17代以降は全て100歳未満である。50歳未満が53柱を数える。生年不祥4柱。

神皇の世には、神皇が薨去された後、神后がご存命ならば、その在世中、神后が摂政となり天下を治めた。神皇第1代のもとで、神后摂政が定められた。皇太子は神後の薨去後でなければ、ご世継ぎの大御位に即位出来なかった。

※神武天皇以後の歴代天皇のもとでは、摂政は天皇に代わって政務を行う役職で、推古

天皇の摂政となった聖徳太子に始まる。9世紀から江戸末期までは藤原氏が独占した。

閑白もほぼ同様の意味をもつ役職だが、原義は「政治について意見を奏上すること」で、天皇を補佐するという意味がある。

暦の歴史は日本と中国が共有する文化の歴史を物語っている。

水	金	土	火	木	五行十干							
弟(癸)	兄(壬)	弟(辛)	兄(庚)	弟(己)	兄(戊)	弟(丁)	兄(丙)	弟(乙)	兄(甲)			
亥	戌	酉	申	未	午	巳	辰	卯	寅	丑	子	十二支
猪	犬	鶏	猿	羊	馬	蛇	龍	兎	虎	牛	鼠	
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	干支		
癸酉	壬申	辛未	庚午	己巳	戊辰	丁卯	丙寅	乙丑	甲子			
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11			
癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子	乙亥	甲戌			
30	29	28	27	26	25	24	23	22	21			
癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子	丁亥	丙戌	乙酉	甲申			
40	39	38	37	36	35	34	33	32	31			
癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲午			
50	49	48	47	46	45	44	43	42	41			
癸丑	壬子	辛亥	庚戌	己酉	戊申	丁未	丙午	乙巳	甲辰			
60	59	58	57	56	55	54	53	52	51			
癸亥	壬戌	辛酉	庚申	己未	戊午	丁巳	丙辰	乙卯	甲寅			

夕刊 読売新聞 2011年7月2日(水)

福岡市西区の元岡古墳群の古墳から、「庚寅」(西暦570年)の紀年銘と日付の入った鉄製の大刀が出土した。同市教委が21日発表した。わが国での歴使用を示す最古の文字資料だとしている。紀年銘入りの古墳時代の刀剣としても例目。

大刀は長さ75センチ、G6号墳を占められた直徑約18センチの石室から、水島町やガブスの千類(金器製の耳環など)も発見された。又、藤原朝の刀の青の部分に漢字9文字が彫刻されているのが確認され、干支による紀年法(元暦)で「庚寅年(正月六日庚寅)の日」に刀を作ったと記されている。

暦 最古の使用例か

福岡・元岡古墳群 庚寅 銘入り大刀出土

60年に一度巡ってくる庚寅年のつらら、古墳時代で570年が使われた日本のは、70年のおびこの古墳は副葬された土器の年代から7世紀中ごろの築造とみられ、刀は作られて数世代後に副葬されたことになると。元岡古墳群ではヤマト政権とのつながりを示す武器や器具も出土しており、市教委は「ヤマト政権のもとで九州統治や朝鮮半島出兵を担った有力豪族の墳墓とみている」。

高伝来から10年余り

坂上康俊・九州大教授(日本古代史)の話「暦は中国で作られた元暦を使用している。『日本書紀』に554年、百濟から暦博士が渡来したという記事がある。この大刀には紀年と日付が刻まれており、わが国における最初の暦使用の実例だ。高伝来から10年余りで、日本列島内で暦を使いこなしていたことがうかがえる」。

元岡古墳群から出土した紀年銘入り鉄製大刀の銘文部分(藤原朝の刀の青の部分)に漢字9文字が彫刻されているのが確認され、干支による紀年法(元暦)で「庚寅年(正月六日庚寅)の日」に刀を作ったと記されている。

2. 現存文書の文体は日本語化した漢文

富士古文書の原文は、古事記と同様に和歌の「非略体歌」の表記によく似た文体である。

古事記が編纂された1300年以前の文章表現の中心だった中国語には、助詞の「てにおは」がない。例えば「私は歌を歌う」は「我唱歌」と書く。我が主語、唱が動詞で、歌が目的語、目的語が動詞の後に来る。これを「略体歌」と言う。

しかし、これでは日本人の感情が表現しにくいと思い、八世紀の初め、柿本人麻呂は「てにおは」を使った「非略体歌」をつくった。まだ平仮名、片仮名が生まれていないので、「てにおは」には「而爾乎者」の字を充てたのである。

富士古文書の文体は、この「非略体歌」の表記に類似している日本語化した漢文である。平安時代以来実用的な文章に用いられ、用字、語順など純粋な漢文と違ったところが多く、仮名交じりもある漢字の音と訓を混えた文体である。

漢字、漢籍は5世紀頃に伝来した。しかし、これらは発音も文法も日本語と全く異なっていた外国語であった。そこで漢字の音(字音)に、その意味にあたる日本語を当てはめた「訓」

を工夫し、さらに漢字の音から「万葉仮名」が発明された。「万葉仮名」は国語の音を表すのに漢字の音を用いる他、訓も利用した複雑巧妙な表記である。(別紙「万葉仮名一覧」参照)

例えば、「音による表記」は、阿米=天、久年=国、許己呂=心、奈津可之=懐かし。

「義訓」は、寒(冬)、暖(春)、丸雪(あられ)、「訓」は意味による表記。

(正訓)は、天(あめ)、情(こころ)、(借訓)は、為酢末=薄、八間跡=大和、(戯訓)は、神楽声=笹、一六(しし)、八十一(くく)などである。

九世紀末、遣唐使が廃止されると、唐風文化に代わって国風文化が開花した。なかでも万葉仮名をもととして、その草体を極度に簡略化した「ひらがな」が発明された。

ひらがなの普及は国語の表記の可能性を広げ、文学は大きく発展した。特に女性の間で発達したところから「女手」とも呼ばれたが、平安時代の中頃からは男性も私的な書き物に使うようになった。ひらがなの普及により、和歌が盛んになり、十世紀初頭に「古今和歌集」が勅選された。

平安時代も末期近くになると、漢字にカタカナを交えた文体で、「今昔物語集」などの説話文学が盛んに編集された。富士古文書の一部にはカタカナも用いられている。カタカナは、「阿=ア、伊=イ、宇=ウ、江=エ、於=オ、久=ク、己=コ」のように漢字を省画し、その偏、旁(つくり)、冠、脚を取って作ったものである。現存する最古の用例は富士古文書以外では、平安時代の初期のものである。かなかな、やまとがな、ごじゅうおながな、とも言われる。

ちなみに、「柿本朝臣人麻呂歌集」は701年(文武天皇の大宝元年)、「古事記」は712年(元明天皇の和銅5年)、「日本書紀」は720年(元正天皇の養老4年)、「万葉集」は759年(淳仁天皇の天平宝字3年)に編纂された。

現存する富士古文書は文体から見ると平安時代以後に書かれたものである。だからと言って消失した原書もそうだとは言えない。時代を経て何度も書き写され、時代の文体を反映したとも言えるからである。様々な角度からの検証が待たれる。

〈富士古文書の仮名使用例〉

あ	い	う	え	お	は	ひ	ふ	へ	ほ
阿	居、伊	宇	復	尾	者	非	不		保(ぼ)
	意	ウ	絵		ハ	火	武(ぶ)		
か	き	く	け	こ	ま	み	む	め	も
加	岐、鬼	久	消	古	麻	見、美	無	目	茂
加(が)	記、気		ケ	コ	間	ミ	ム		
さ	し	す	せ	そ	や	い	ゆ	え	よ
佐	志	須			弥				依、余
	シ		セ						ヨ、与
た	ち	つ	て	と	ら	り	る	れ	ろ
太	知	津	而	登、等	羅	里、利	留	礼	
		ツ		ト都		リ	ル	レ	
な	に	ぬ	ね	の	わ	を	ん		
成、奈	仁			之、野	和				
	ニ			ノ					

音節	推古期	古事記・万葉集	日本書紀	音節	推古期	古事記・万葉集	日本書紀
あ a	阿	阿安・足	阿綱	ぐ gu	丘・來	炬裏慶	炬裏慶
い i	伊	伊夷以異已移・射	伊以異怡	け ke (甲)	具遇隅求	具遇愚	具遇愚
う u	汗	汗字有鳥羽雲・	于汗字紆羽高	け ke (甲)	家計糴雞雞價部	家計糴雞雞價部	家計糴雞雞價部
え e	衣	衣依愛・覆	愛衣埃	け ke (甲)	下牙雅夏	氣既・毛消銅(介)	氣居戒開階世凱既
お o	意	意憶於應	意憶於淤厭乙	げ ge (乙)	氣既・毛消銅(介)	氣居戒開階世凱既	氣居戒開階世凱既
か ka	加	加架迦賀蓋可哥珂	加伽迦賀可河柯歌	け ke (乙)	氣居	氣居戒開階世凱既	氣居戒開階世凱既
が ga	奇	奇宜	我俄峨	け ke (乙)	氣居	氣居戒開階世凱既	氣居戒開階世凱既
き ki (甲)	支	支岐吉	岐吉積葉企香祇那	け ke (乙)	氣居	氣居戒開階世凱既	氣居戒開階世凱既
ぎ gi (甲)	伎	伎岐藝	伎俄峨	け ke (乙)	氣居	氣居戒開階世凱既	氣居戒開階世凱既
き ki (乙)	奇	奇寄綺忌紀貴畿・	奇已紀氣幾機基規	け ke (乙)	氣居	氣居戒開階世凱既	氣居戒開階世凱既
ぐ gi (乙)	久	久玖九鳩君群口古	久玖區古句勾均俱	け ke (乙)	氣居	氣居戒開階世凱既	氣居戒開階世凱既
し si	斯	之之子次志思德寺	之之子實志思時詩	け ke (乙)	氣居	氣居戒開階世凱既	氣居戒開階世凱既
じ ji	自	自土任司時盡細慈	自土耳耳耳餅兒貳	け ke (乙)	氣居	氣居戒開階世凱既	氣居戒開階世凱既
ず dzu	受	受授殊聚・寶	受儒摺	け ke (乙)	氣居	氣居戒開階世凱既	氣居戒開階世凱既
せ se	世	世西勢齊・背脊	世西齊齊則細是制	け ke (乙)	氣居	氣居戒開階世凱既	氣居戒開階世凱既
ぞ dzo (乙)	楚	楚嗽	楚嗽	け ke (乙)	氣居	氣居戒開階世凱既	氣居戒開階世凱既
そ sso (甲)	蘇	蘇葉宗祖・十	蘇葉沂	け ke (乙)	氣居	氣居戒開階世凱既	氣居戒開階世凱既
そ dzo (乙)	會	會僧增則所・衣	會僧增則所則請賦	け ke (乙)	氣居	氣居戒開階世凱既	氣居戒開階世凱既
た ta	陀	陀	陀	け ke (乙)	氣居	氣居戒開階世凱既	氣居戒開階世凱既
だ da	知	知智至	知智至	け ke (乙)	氣居	氣居戒開階世凱既	氣居戒開階世凱既
ち ti	茅	茅乳	茅乳	け ke (乙)	氣居	氣居戒開階世凱既	氣居戒開階世凱既

音節	推古期	古事記・万葉集	日本書紀
あ a	阿	阿安・足	阿綱
い i	伊	伊夷以異已移・射	伊以異怡
う u	汗	汗字有鳥羽雲・	于汗字紆羽高
え e	衣	衣依愛・覆	愛衣埃
お o	意	意憶於應	意憶於淤厭乙
か ka	加	加架迦賀蓋可哥珂	加伽迦賀可河柯歌
が ga	奇	奇宜	我俄峨
き ki (甲)	支	支岐吉	岐吉積葉企香祇那
ぎ gi (甲)	伎	伎岐藝	伎俄峨
き ki (乙)	奇	奇寄綺忌紀貴畿・	奇已紀氣幾機基規
ぐ gi (乙)	久	久玖九鳩君群口古	久玖區古句勾均俱
し si	斯	之之子次志思德寺	之之子實志思時詩
じ ji	自	自土任司時盡細慈	自土耳耳耳餅兒貳
ず dzu	受	受授殊聚・寶	受儒摺
せ se	世	世西勢齊・背脊	世西齊齊則細是制
ぞ dzo (乙)	楚	楚嗽	楚嗽
そ sso (甲)	蘇	蘇葉宗祖・十	蘇葉沂
そ dzo (乙)	會	會僧增則所・衣	會僧增則所則請賦
た ta	陀	陀	陀
だ da	知	知智至	知智至
ち ti	茅	茅乳	茅乳

岩波書店・日本古典文学大系「万葉集」より

神皇治世・寿齡、神后摂政・寿齡 根（年）表
 （富士古文書神皇紀より）作：岡本 明久

神皇	治世（根・年）	寿齡（根・年）	神后摂政（根・年）	神后寿齡（根・年）
第1代	277・228	450・370	20・16	471・387
第2代	131・108	371・305		350・288
第3代	145・119	305・251		296・243
第4代	50・41	140・115	30・25	170・140
第5代	55・45	203・167		188・155
第6代	40・33	251・206	22・18	273・224
第7代	58・48	198・163		186・153
第8代	42・35	143・118		114・94
第9代	63・52	218・179		199・164
第10代	47・39	163・134	23・19	188・155
第11代	25・21	89・73	20・16	117・96
第12代	43・35	259・213		249・205
第13代	25・21	128・105	25・21	156・128
第14代	36・30	193・159	15・12	217・178
第15代	30・25	176・145	40・33	248・204
第16代	41・34	228・187	22・18	239・196
第17代	36・30	137・113	22・18	151・124
第18代	27・22	137・113	20・16	152・125
第19代	20・16	108・89	20・16	132・108
第20代	20・16	243・200	13・11	262・215
第21代	35・29	108・89	13・11	117・96
第22代	40・33	260・214	30・25	217・178
第23代	17・14	143・118		110・90
第24代	23・19	128・105		83・68
第25代	10・8	93・76	30・25	130・107
第26代	20・16	114・94	20・16	110・90
第27代	20・16	110・90	31・25	130・107
第28代	35・29	121・99	22・18	134・110
第29代	40・33	117・96	20・16	140・115
第30代	42・35	132・108		117・96
第31代	50・41	173・142		145・119
第32代	43・35	240・197		158・130
第33代	43・35	138・113		129・106
第34代	45・37	138・113		127・104
第35代	30・25	137・113	7・6	131・108
第36代	25・21	146・120	3・2	148・122
第37代	25・21	117・96	4・3	120・99
第38代	8・7	147・121		143・118
第39代	20・16	120・99	11・9	128・105
第40代	33・27	147・121		143・118
第41代	35・29	139・114		113・93
第42代	45・37	140・115		134・110
第43代	18・15	138・113		131・108
第44代	45・37	138・113	5・4	141・116
第45代	40・33	116・95		110・90
第46代	40・33	118・97	7・6	125・103
第47代	47・39	131・108		126・104
第48代	45・37	158・130		146・120
第49代	33・27	131・108		122・100
第50代	50・41	142・117		88・72
第51代	45・37	140・115	14・12	133・109
平均	44・36	166・136	19・16	164・135

天皇年譜

2011年9月21日 作：岡本明久

天皇	年齢	治世	治績	天皇	年齢	治世	治績	
1代神武	127	76	東征伝説	39	弘文	25	8ヶ月	壬申の乱
2代敏達	84	33		40	天武	56	14	律令国家を整備
3代天智	67	39		41	持統	58	8	女帝律令国家完成
4代天武	77	34		42	文武	25	11	大嘗会制定
5代孝昭	114	83		43	元明	61	9	女帝平城京遷都
6代孝安	137	102		44	元正	69	10	女帝
7代孝靈	128	76		45	聖武	56	26	東大寺大仏造立
8代孝元	116	57		46	孝謙	53	10	女帝
9代開化	111	61	以上次史8代	47	淳仁	33	7	女帝孝謙帝の重祚
10崇徳	119	68	大和王朝始まる	48	純徳	53	7	
11垂仁	139	99		49	光仁	73	12	
12景行	143	60	日本武尊の父	50	桓武	70	26	平安京遷都
13成務	107	60		51	平城	51	4	
14仲哀	?	9		52	嵯峨	57	15	三筆空海と交流
15応神	111	41	渡米人多数農耕進出	53	淳和	55	11	
16仁徳	143	87		54	醍醐	41	18	
17履中	?	6	物部、蘇我を登用	55	文徳	32	9	原原良房を摂政
18反正	?	6		56	清和	31	18	
19允恭	?	42		57	嵯峨	82	9	
20安徳	56	4		58	光孝	58	4	
21嵯峨	62	24	母朝王権を確立	59	宇多	65	11	初の法皇
22清和	41	5		60	醍醐	46	34	古今和歌集を勅選
23弘治	38	3		61	朱雀	30	17	
24仁賢	50	11		62	村上	42	22	
25武烈	18	9		63	治承	62	3	
26建礼	82	25		64	門祿	38	16	藤原家実権
27安閑	70	5		65	花山	41	3	
28宣化	73	5		66	一条	32	26	源氏物語枕草子
29欽明	68	33	明推古崇峻の父	67	三条	42	6	藤原氏長考綱
30敏達	48	14	物部重用、仏教禁止	68	後一条	29	21	
31用明	48	8	聖徳太子の父	69	後朱雀	37	10	
32崇峻	?	6		70	後冷泉	44	24	
33推古	75	37	日本初の女帝	71	後三条	40	5	花園院令
34舒明	49	13	天智、天武の父	72	白河	77	15	三代の上皇
35皇極	68	4	女帝	73	堀河	29	22	
36孝徳	59	10	文化の革新を運んだ	74	鳥羽	54	17	院政を継承
37斉明	68	7	女帝	75	崇徳	46	19	
38天智	40	4	天皇崇峻化を推進	76	近衛	17	15	

天皇	年齢	治世	治績	天皇	年齢	治世	治績
77後白河	66	45	代の院政	111	後西	49	10
78二条	23	8	平清盛の協力	112	靈元	79	25
79六条	13	4	慶安少皇位	113	東山	35	23
80高倉	21	13		114	中御門	37	27
81安徳	8	6	平家滅亡	115	長祿	31	13
82後鳥羽	60	16	承久の乱敗北	116	建長	22	16
83上御門	37	13		117	後醍醐	74	9
84順徳	46	12	八雲御抄禁裏抄	118	後村	22	10
85仲恭	17	4		119	光格	70	39
86後深河	23	12		120	仁孝	47	30
87四條	12	11		121	孝明	36	21
88後嵯峨	53	5		122	明治	61	46
89後深草	62	14	北朝の祖	123	大正	48	15
90龜山	57	16	南朝の祖	124	昭和	87	64
91後宇多	58	14		125	今日		
92伏見	53	12		平均	54	21	
93後伏見	49	4		合計	703	33	27
94後二条	24	8		平均	54	21	
95花園	52	11					
96後醍醐	52	22	南正統建武の新敗				
97後村上	41	30	長慶龜山帝の父				
98長慶	52	16					
99後龜山	38	10					
後光厳	52	3	北朝第1代				
後鳥羽	36	12	北朝第2代				
100後小炊	57	31	北朝第3代				
101後光	28	17					
102後花園	52	37					
103後土御門	59	37	心仁の乱戦国時代				
104後柏原	68	27					
105後奈良	62	32					
106正親町	77	30	信長上洛				
107後徳成	47	26	秀吉から家康へ				
108後水尾	85	19	江戸幕府と対立				
109明正	74	15	859年ぶり女帝				
110後光明	22	12	崇子子孫に傾倒				

<著者プロフィール>

岡本明久 (おかもと あきひさ)

1937年 山口県周防大島に生まれる

1961年 中央大学法学部法律学科卒業 同年、東映株式会社に入社

1976年 劇映画「横浜暗黒街・マシガン」(菅原文太、三益愛子主演)で監

督デビュー、以後、劇映画「暴力教室」(松田優作、館ひろし主演)の脚本・監督、TVドラマ「特命刑事」「宇宙刑事・ジバン」「世界忍者戦・ジライヤ」「ロボット8ちゃん」「明日を抱きしめて(社会保険庁)」、TVドキュメンタリー・ドラマ「松本清張事件にせまる・野望の設計図」、教育映画「子供の人権を考える・飛べない翼」「室町時代の社会と文化」、中央大学創立100周年記念記録映画「母校よ永遠なれ・中央大学百年の歴史」などの作品を手掛ける。

1995年 劇映画「人間の翼・最後のキャッチボール」(東根作寿英、山口真有美、佐藤允、馬淵晴子主演、文部省選定作品、日本PTA全国協議会推薦、日本ユネスコ協会推薦、日本プロ野球OBクラブ推薦、日本青年会議所推薦、優秀映画鑑賞会推薦、日本映画復興会議奨励賞受賞)の企画・脚本・監督

2002年 日中国交正常化30周年記念記録映画「徐福さん」(文部科学省選定作品、日本PTA全国協議会推薦、中国大使館推薦、優秀映画鑑賞会推薦、東京都推奨、日本全国徐福会推薦)の製作・脚本・監督、著作に「読む映画・聖徳太子」

現在、日本映画監督協会会員、シネマ・クラフト21代表、神奈川徐福研究会理事。

II-4 徐福関連の歴史

徐福と大和王権との関わり

神奈川徐福研究会
前田 豊



1. はじめに

日本の古代を記述する史書は、西暦8世紀の初期に作られた「古事記と日本書紀」（記紀）が最初だといわれている。しかし、両書は、時の天皇家の史書であり、勝者の作成した書物であるため、史実は政権にとって都合のよいように変更されて、必ずしも真の日本史実を記録しているわけではない。

一方、最近の徐福研究の進展によって、日本の古代豪族「物部氏」が徐福集団から発生したとの説が有力になってきている。また、徐福のことが記載された日本の古伝「富士古文書」が、「記紀」の原本であったとの情報もある。

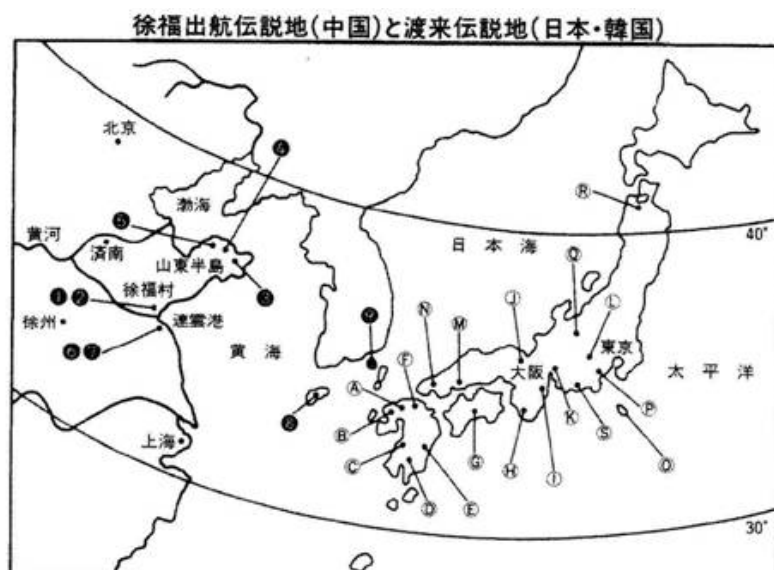
本報告では、日本の古伝で語られる徐福と物部氏の関係に着目し、徐福集団と大和王権の関係について考察してみる。

2. 徐福伝説とは

本年（2012年）を遡ること2222年前、秦始皇帝の命を受けて、「徐福」は中国大陸の東岸から、不老長生の霊薬を求め東海の3神山に向けて船出した。これが方士徐福を長とする百工、童男童女を含む3000人を乗せた85隻の大船団であり、弥生時代の日本を目指していた。



図1 中国岱山の徐福像



飯野孝著『弥生の日輪』(新人物往來社)より引用

徐福集団が目指したところは、蓬萊、方丈、瀛（えい）州と呼ばれる蓬萊の国、3神山の地であった。その蓬萊の地は、台湾、韓国、日本、はたまたアメリカ大陸ともいわれる。しかし、中国、韓国、日本に徐福伝説をもつ地が多数存在しており、徐福の歴史的事実性は疑えない。日本にも20か所以上の徐福上陸地や伝説が存在する。例えば、佐賀県、紀伊熊野、東三河、富士山北麓吉田などである。

3. 徐福集団の日本列島での広がり

徐福集団は、分裂しながらも日本列島各地に到着したと思われる。徐福一行は九州に上陸し、佐賀に第一の拠点を築いたあと、本体は人数を絞りながら、瀬戸内海を渡り、太平洋側にて、紀伊熊野に上陸した。紀伊半島は、徐福集団の第二の拠点であろう。彼らは紀伊熊野を拠点に探索を進めたのち、三河湾に入り、東三河に第三の拠点を築くと共に、遠州から駿河を経て、蓬萊山と呼ばれた富士山麓に到着した。そして南麓を経て、縄文時代から拓かれていた北東の山麓(現在の富士吉田)に、最終拠点を築いたと考えられる。彼らの中には、伊豆半島や三浦半島に上陸したり、八丈島に流され、拠点を築いた小グループもいたであろう。

九州からの列島各地への発進に際して、日本海側に進行したグループもある。彼らは、出雲や丹後半島から上陸し拠点作りを行ったほか、秋田男鹿半島や青森の小泊に定着して、その地で徐福伝承を残している。更に、一部は北海道小樽フゴッペ遺跡などにも足跡を残したと思われる。

徐福集団の主流は、富士南西麓に到着後、当時の日本の古代王朝が存在した北麓に移動したと思われる。ここで、日本の高天原の世を築くが、その子孫は富士山麓での、しばしば噴火する環境を嫌って、西の三河や東の相模に移動した可能性も高い。そして関東から、東北地方にも広がって行ったことが考えられる。

神奈川県丹沢山系や秦野に、徐福一行が霊薬を求めて来訪し、定着帰化したという伝承があり、藤沢市には、徐福の子孫・秦氏が福岡氏を名乗って住んでいたと彫られた墓碑が存在する。

4. 古史古伝と徐福

日本の古代文献の中には、「古事記」以前の書と呼ばれて、内容に古代日本の伝承が含まれている文書があると考えられる。古史古伝としては、「竹内文書」、「富士古文献（宮下文書）」、「九鬼文書」、「物部文書」、「秀真伝」、「三笠紀」、「先代旧事本紀」、「上記（うえつふみ）」、「先代旧事本紀大成経」などがある。

一方、著名作家・飛鳥昭雄氏らが、賀茂氏出身のヤタガラスの長老からの情報を得て、「物部氏は徐福とともに来た」という、驚愕の事実を公開している（月刊ムー2009年7月号p22-57など）。賀茂氏は秦氏の分族であり、彼らは、古代イスラエルの一神教信仰をもつ人々であったようである。筆者の調査によれば、古史古伝の編者には、どうも物部氏や秦氏が関与してくるようである。

4.1, 「物部文書」（秋田物部文書）

本文書によれば、ニギハヤヒ命が東北日本海沿岸の「鳥海山」に降臨したことになって

いる。これには三河の物部氏が関与している。「物部文書」が注目されるのは、物部氏が蘇我氏との戦いで敗れ、「神代の万国史」の写しである「物部文書」をもって、東北地方に逃れたと「九鬼文書」に記されていたからである。このとき諏訪に逃れた中臣氏一族が持参した写しの一部が「九鬼文書」で、更に前代の武烈天皇の時代に失脚させられた竹内一族（平群真鳥の子孫）が秘匿していた「神代の万国史」の一部が「竹内文書」である。

「物部文書」が公開されたのは昭和59年であり、天地創成、物部氏の祖ニギハヤヒ命の降臨神話、東国の国譲り、神武東征、蘇我氏との抗争、物部氏の秋田亡命などが記載されている。「先代旧事本紀大成経」は「物部文書」の一つである。

物部氏が、徐福一行の子孫であることが事実であれば、「物部文書」には当然、徐福一行およびその子孫の伝承が記されているものといえる。

4.2. 「富士古文献」（宮下文書）

本文献には、徐福が書き写したことが記載された文献が存在している。すなわち、神皇第7代孝霊天皇の世73年（BC213）、秦の方士徐福率いる85隻の大船団が、紀伊熊野に到着し、天皇が派遣した竹内宿禰を案内者として、富士山麓に落ち着いたという。徐福は、富士の阿祖山太神宮の神官から、神代文字で記された古代記録を見せられ、その内容を漢文で書き写したことから「徐福文献」という名が生じた。三輪義熙は、大正10年に富士古文献を整理集成して、「神皇紀」という書名で、内容を紹介した。これを三輪本と呼ぶ場合がある。

本書は、日本民族の原郷を古代ユーラシア大陸の中央に置き、その原日本人が日本列島に移動定着してきたこと、王朝交替、異国の侵略、大異変を克服して、神武王朝を成立させるまでの民族古代史を語っている。ウガヤフキアエズ朝は51代続いたことになっている。

つまり「富士古文献」の初期編纂は、徐福一行によるものであり、秦氏、物部氏＝徐福一行が関与していることがわかる。

5. 富士古文献（宮下文書）の改定から古事記・日本書紀へ

秦の方士徐福が富士の阿祖山大神宮の神官が語った古代史を聴き、その深さに感嘆するとともに、その貴重な記録の散逸するのをおそれ、改めて漢字で筆録したものが「富士古文献」とされている。

徐福筆録説とは別に、この文書の少なくとも「開闢神代暦代記」と「蘇我氏、栄日子氏、武部氏三家世代記」は、第八代孝元天皇がみずから撰録し、徐福はその勅命で筆録したものであるという説もある。すなわち岩間本（古代豪族三浦氏の家伝書＝富士古文献を集成した古代日本史本）によれば、収録されている「暦代記」他数篇は、孝元天皇がみずから編集した古代実録であり、それを「書き作り記し置」いたのが徐福である旨を、宮下源太夫義仁によって「謹書」されている。

ところで、富士古文献（宮下文書）にとって、きわめて重大な事件が人皇三十六代天智天皇10年（671）の8月に起こった。朝廷から（近江京から）「中臣藤原物部麿」なる人物が富士山麓を訪れて、この文書を読み「作正宇津須」という。つまり徐福筆録とされる文書の文章を正して、これを新たに写し改めたという。問題は「作正」にあり、現代語で

いえば「改訂」にほかならない。

その改訂の時期、即ち中臣藤原物部麿が富士山麓を訪れ、そこにある古文書を読み、かつ「作正字津須」という行為に出たのは、大海人皇子（後の天武）が、病床の天智から皇位継承の意を告げられたときである。大海人皇子は、腹心の中臣藤原物部麿を富士山麓派遣したのである。その目的は古代記録の入手とその変造である。つまり、この時点では古事記や日本書紀の編集はまだ行われていなかった。

皇位を狙う人物なら、その主張の正統（正当）性を訴えるために、新しく史書を作ることが必要となる。そのためには阿祖山太神宮保管の文書を眺めておくことが必要である。もしその文書が白目分の即位にとって不利なものであればそれを改訂すればよい。そして改訂版に基づいて新たに修史作業を開始した。

6. 文書を改定した中臣藤原物部麿は藤原不比等！

宮下文書の継承過程でもっとも大きな事件を引き起したこの人物について、三輪義熙も岩間尹も、またこの文書の研究者として著名な渡辺長義、鈴木貞一、吾郎清彦氏は、何もふれていない。つまり現在の中臣氏や藤原氏の系図に、このような人物に該当するものを見出せない。ただし、岩間尹によると、この中臣藤原物部麿とは、大織冠鎌足の「子」であるという。

大化改新で蘇我蝦夷が焼討ちにあったさい、その所蔵していた「国記」「天皇記」が焼失しそうになった。そのとき船史恵尺が火中から「国記」だけを辛うじて取り出した。蘇我蝦夷は「朝帝の宝庫を焼いて自殺した」という。その災害対策会議の席で、この「古記録滅失の祟り」が論議されたとき、田辺武居（甲斐国造）という人物が、その古記録の原典が富士山麓（阿祖山太神宮）にあることを述べたが、それを天皇は不問にしたという。

ただ、鎌足だけが、この田辺武居の話をきいて大いに喜び、自分の子の中臣藤原物部麿にその古記録の筆写を命じた。そこで物部麿は、田辺武居を案内として富士山麓に赴き、その古記録を写した。（天智10年（671））

この謎の人物は、大海人皇子（天武）側が政権（皇位）奪取後に備えて派遣した密使であるという仮定から推理される結論は、藤原不比等である。

藤原不比等はこの後、古事記、日本書紀の編集に携わり、日本の古代史は歪曲されることとなった。

7. 徐福集団は日本神話の神々となった

徐福が歴史的人物と考えられるようになった今日、日本古代史に現れる人物(神々)に比定されている可能性は高い。近年発表された書籍やインターネットで開示された徐福の比定例を挙げると、次のようなものがある。

- ① 天御中主：インターネット情報で、徐福＝天御中主説が展開されている。
- ② スサノオ：素佐男命の異名：スサノオはいろいろの名前で祭られているが、大山祇、速玉男、八千矛、牛頭天王、タカオカミ、雷、カグツチ、ホムスビなど。いずれも、徐福伝承との繋がりがある。
- ③ 神武天皇：「神武天皇＝徐福」論は、香港、台湾の学者によって唱える。
- ④ 大山津見命（大山祇命）佐賀県金立山金立神社と千葉県沼南町大井福満寺との類似性、

東三河の神山・石巻山の神社のご祭神が大山祇命。

- ⑤ニギハヤヒ命：饒速日命の別名 スサノオの子供で、一番活躍した人物が、三男の饒速日命。フルネームは天照国照彦天火明奇甕玉饒速日尊
別名：天火明、大歳、大物主、別雷、金山彦、少彦名、事解男
- ⑥熊野権現：三重県誌では、熊野権現は徐福としている。
- ⑦イザナギ神：牛窪記にイザナミ神と徐福を併記。熊野速玉神社のご祭神は「イザナギ命」。石上神宮のご祭神は、布都（ふつ）、布都斯、布留という名で、スサノオの父、スサノオ、スサノオの子3代を祀る。
「ふつ」は中国大陸時代の徐福の呼び名である。
- ⑧寒川神：「宮下文書」では、大山祇命＝寒川神＝徐福
- ⑨大歳（大年）神：スサノオ神と神大市姫神の間の子。ニギハヤヒ命と同一。
- ⑩大山くい神：松尾社の神、山頂神、石の神、酒の神、大山祇の孫、賀茂神
- ⑪大酒神：「大酒神社、旧名大避神」広隆寺の境内に鎮座。猿田彦。石神。
相州大山の神の別名は、酒解（さかわけ）神であるが、山城の酒解（サカトケ）神と同様、石を神体とする秦氏の祖神と考えられる。
大神神社の祭神は、酒神＝大物主神＝大国主神＝ニギハヤヒ命
- ⑫ヒルコ神＝恵比寿神；戸矢学「ヒルコ 棄てられた謎の神」

8. スサノオ＝大山祇命は徐福の子孫

「記紀」では、大和王権は初代神武天皇から始まり、皇祖神は天照大神という女性神にされている。しかし、神武天皇が大和に入る前にニギハヤヒ命が大和を治めていたと記載されている。

元伊勢籠神社社務所発行の「元伊勢の秘法と国宝海部氏系図」によれば、この神の名称は、彦火明命、亦名天火明命・天照御魂神・天照国照彦火明命・饒速日命である。

最近の通論では、このニギハヤヒ命が天照（アマテル）大神で、大和王権の「真の皇祖」であると考えられるようになってきている。

小倉一葉の近著「消された霸王」によれば、ニギハヤヒ命は「天照大神」であり、「皇大神」であったが、ある時期に現在の「大日靈女貴命」に取って代わられたと見ている。即ちニギハヤヒ命は「皇祖霸王」であり、物部氏の祖であった。物部氏の祖を祀る大和の石上神宮には、布都（ふつ）、布都斯（ふつし）、布留（ふる）という名で、スサノオの父、スサノオ、スサノオの子（ニギハヤヒ）というスサノオ3代が、祀られている。

徐福の中国大陸在住時の名は、徐市（じょふつ）であり、史記に載る正式名は市（ふつ）と呼ばれていた。石神神宮は、「ふつの神」＝「徐市」とその子孫を祀っていたことになる。

即ち、徐福はイザナギ神に比定され、その子の代にスサノオ神＝大山祇命が、孫の代にニギハヤヒ命が現れることになった。

東三河に存在した古書「牛窪密談記」には、徐福とイザナミ神が併記され、徐福＝イザナギ神であることを示唆していた。

奈良徐福研究会長の益田宗児氏は、鳥居貞義編『徐福さん』（2005）の論文に於いて、炯眼にも「徐福＝イザナギ神」である事を提言されている。注*1

尚、神武天皇の実在性については、日本の歴史学会では様々取りざたされているが、筆

者の調査した範囲では、紀元1世紀前半に大和盆地で即位していたと推察している。注*2

9. まとめ

徐福一行は、その先祖が日本列島で王朝を築いていたことを知り、その拠点である蓬莱山である富士山麓に至り「富士古文書」を編纂した。また、物部氏が「神代の万国史」を持っていたということから、日本の超古代史を述べる「古史古伝」は、ユーラシア大陸から渡ってきた、徐福一行がもたらした可能性が大きい。彼らは、古代イスラエルの石工集団を含み、日本列島各地に稲荷神社を設置し、イワクラ祭祀場を整えていったと思われる。

つまり、日本の古神道をもたらした物部集団は、徐福一行に含まれていたということが判明した。物部神道は、日本の神道の本流と考えられる。

神道秘伝をもつ富士古文献は徐福文献とも呼ばれ、徐福と物部氏との繋がりから、徐福一行と大和王権が関連をもつことが考えられる。

記紀によれば、スサノオ神の父神はイザナギ神であるから、スサノオの父が徐福であれば、**イザナギ神は徐福**ということになる。

スサノオ神と大日靈女貴神の契約によって5男3女が生まれた。そして男系の天ノオシホミミ尊の子孫が、ニニギ尊ーヒコホホデミ尊ーウガヤフキアエズ尊を経て、カムヤマトイワレヒコスメラミコト(神武天皇)となるから、**天皇家は徐福の子孫**であるといえる。

また、大山祇神の子供がコノハナサクヤ姫であり、天孫ニニギ尊と結婚して、ヒコホホデミ尊を生み、その子孫が神武天皇となる。

従って、大和王権を創った天皇家の男系・女系とも徐福の子孫であったということになる。即ち、ヤマト王権を築いた人々の祖が徐福一行ということになる。

以上

注

- *1. 奈良徐福研究会長の益田宗児氏は、鳥居貞義編『徐福さん』(2005)の論文に於いて炯眼にも「徐福＝イザナギ神」である事を提言されている。
- *2 有賀訓、「衝撃古墳には被葬者の名前が書かれていた～古代史の定説が根底から覆される～」学研ムー2012年11月号 No.384,p73-83)

この文献によると、「史記」記述で後漢の光武帝が西暦57年に「漢倭奴国王」に授与した金印には、池田仁三氏によるコンピュータ画像解析で、「常根津日子命」との記銘が見つかった。この人物は第3代安寧天皇(師木津日子命)の弟(古事記では子)であり、神武天皇は祖父に当たることから、神武天皇は西暦1世紀前半に存在したと推定される。

<著者プロフィール>

前田 豊 (まえだ ゆたか)

兵庫県生れ。大阪大学修士修了。繊維科学会社を経て、2002年より前田技術事務所代表。サトルエネルギー学会理事、意識科学研究会事務局長。著書「古代神都東三河」、「徐福王国相模」など多数。

II-5 徐福関連の交流

徐福の縁で友好交流

神奈川徐福研究会・会長
田島孝子



1. はじめに

1997年5月浙江省慈溪市徐福村の入り口に小さな小屋がありました。この中に祀られている徐福像に村の人達はごちそうをお供えしていました。この村は私に母のようなやさらぎとなつかしさと安心を与えてくれました。私と徐福の不思議な縁のはじまりでした。

この年に日本徐福会の数名が達蓬山中の徐福遺跡の視察に訪れており、12月には日中合作歌劇「蓬莱の国徐福伝説」の公演が慈溪市人民大会堂で行われました。

2. 日本徐福会

1991年5月13日、日本徐福会は東京で設立大会を行いました。巖谷大四会長は「徐福は日中文化交流の創始者」と位置づけ、飯野孝宥理事長は「徐福を通じて懇親交流する」ことを宣言しました。そして1994年10月20日、中国徐福会が設立されました。(日本徐福会会報より)

私は1998年から勉強会に参加しています。当時私のような素人が徐福会に受け入れてもらうには難しい時代でした。しかしながら徐福会も成立当時の勢いが無くなってきて、会員増加に力を入れていたおかげで入会できました。年4回行われる勉強会でいろいろな人との出逢いがあり、今でも交流の続いている人達もいます。2001年10月19日、10周年記念パーティで早乙女貢先生が会長に就任しました。2002年5月の会報で名誉会長となられた巖谷大四先生は「日本徐福会は、会員が集まって何かをしようという会ではなく、会員同士が友人となり話し合う、アジアの親睦をはかる会である。親睦という事が徐福そして徐福会の魂なのである。」とっております。(現在、日本徐福会は活動停止しています)



写真1. 映画徐福さん試写会(六本木中国大使館にて、早乙女貢様(左3))

3. 日中合作歌劇「蓬萊の国徐福伝説」

1997年11月、中国歌劇舞劇院（北京）と東京オペラ協会とによって制作された「蓬萊の国徐福伝説」が北京で初演されました。この年、この歌劇は北京、慈溪、上海等中国各地を巡演しました。日本初演は1998年4月鹿児島県串木野市で、その後、佐賀市、新宮市、富士吉田市と巡演し、4月17日18日に東京新宿で公演しました。私は東京公演から合唱団の一員として参加し、以降2003年まで日本各地、中国各地で34回公演しました。巡演の度毎に各地の友人と再会交流ができました。東京オペラ協会の東京公演には現在も参加出演しています。2011年は東日本大震災の為のチャリティ公演を東京で3回行いました。



写真2. 東京日中友好会館にて（石多先生(右3)）

4. 徐福記念館

1999年、私は浙江省慈溪市三北鎮人民政府と中国投資会社社長須田育邦氏の三者で寧波八雲旅游開發有限公司を設立し、徐福記念館の建設、運営、旅行を行っていました。中国の数ある徐福伝承地の中でこの地を選んだのは、ここが私と徐福のはじめての出会い場であり、又1993年か94年頃東京の大学生が数名達蓬山の山中にて3日間調査をしたが何も発見できなかったという事を当時の人民代表の人から聞いたからです。（この達蓬山の山中に徐福東渡遺跡の摩崖石刻がある。）



写真3. 横浜のホテル（羽田孜先生と台湾の徐先生）



写真4. 中国慈溪市

2000年3月30日、徐福記念館の開館式典を行いました。中国徐福会、日本各地徐福会の代表、上海・寧波在住の日本人、寧波の季恵利日本語学校の生徒、東京の麻布高校の生徒等沢山の客人を迎えて盛大に挙行されました。中国と日本の高校生による交流も行われ、村人にも喜ばれました。2009年達蓬山山中に新しく大きな徐福記念館が出来て資料はこちらに移転しました。

5. 徐福の縁で文化交流

2001年に徐福記念館の近くに徐福小学校が開校しました。徐福記念館開館一周年祝も兼ねて日本の友人が公演して下さいました。日本人間国宝・常磐津東蔵先生、日本舞踊花柳流の先生たち10名です。寧波大学、慈溪市のホテル等地元の民族芸能の人達と共演出来ました。2002年には杭州宋城大ホール、北京の徐福フォーラム等で公演し、以降毎年中国各地で日本文化紹介の公演を続けております。2009年は11月に実施。韓国清州島にも連云港市にも招待されて現地の人達と共演交流しています。2010年の上海万博では日本産業館にて横浜市代表で3公演を行いました。当日は参観者の人達にも舞台上上がり、交流を深めました。



写真5. 韓国清州島、常磐津東蔵先生



写真6. 上海万博日本館にて

6. 神奈川徐福研究会

2003年4月に発足し、神奈川県日本中国友好協会の中に事務局を置いています。2か月に一度、例会を続けています。発足当時は徐福研究者を講師にお招きしていましたが、現在は会員の研究発表の場になっています。徐福のゆかりの地をめぐる日帰りバス旅行を行うなど有意義な勉強会になっています。

最近では神奈川県の中に徐福関連地を多数みつけるきっかけとなった富士古文献の研究に力を注いでいます。1年をかけて渡辺長義著「探究幻の富士古文献」の通読を行いました。又この富士古文献の存在と価値を知り、世に広く知らせようとした三輪義熙著「神皇紀」とめぐり逢い、徐福研究会の有志がこの「神皇紀」をやさしい現代語に訳して2011年3月に出版しました。

2010年神奈川県観光課が神奈川北部の丹沢山系の観光地の振興に力を入れています。この地域は新宿と箱根を結ぶ鉄道（小田急線）が走っており、この小田急線に沿って在る伊勢原市、秦野市には、徐福伝承の色濃い大山山系、大日堂、寒川神社などの歴史的観光資源や鶴巻温泉などが続きます。また春は桜、夏はアジサイ、秋は紅葉と自然にも恵まれ、

1年を通して風光明美な所です。富士山の伏流水などの水資源にも恵まれ、食物もおいしい所です。地元の日中友好協会や観光課と協力して徐福の観光ルートの発展にも尽力いたします。



写真7. 神奈川徐福会バス旅行



写真8. 宮下文書保管蔵、宮下義孝氏（左）



写真9. 上海万博出席者（上海市内ホテル、左6 横浜市長）

7. まとめ

徐福と出逢って15年の月日が経ちました。徐福は友好の使者、平和の使者とも呼ばれています。2012年中日友好協会会長に就任した唐家旋先生は4月25日、東京の会場で次のように決意を述べられました。「2000年を超える中日往来を支えた大切な精神の絆、両国の持つ共通の文化、伝統価値をいっそう高揚させよう」と。

<著者プロフィール>

田島孝子（たじま たかこ）
神奈川県日本中国友好協会理事
神奈川徐福研究会会長
川崎市幸区下平間 292-3-208
044-511-4772

Ⅲ. 特別寄稿論文

徐福、西帰浦から航海を中止し帰国回航した理由

～韓国南海岸一帯と日本海沿岸に散在する遺跡について～
＜海流、潮流、風向を基礎にした研究＞

(社)濟州徐福文化国際交流協会理事長

禹 珪 日



1. 序論

先ず、徐福と其の一行達の韓国全羅南道、慶尚南道での寄航地、上陸地などの遺跡地がいたるところに散在しているが、果然これ等の伝説、遺跡地が徐福自身に依り作られたものか、でなければ海流と潮流、風向などにより、やむをえず本隊船団と離脱した相当数(1/3以上)の別途の船団に依り出来たものではなかろうか？

そして彼らが韓半島南海岸一帯に影響を与えた文化的な意義、そして所謂日本列島西側に沿って日本海沿岸を北上している太平洋黒潮沿岸一帯に散在している。

遺跡で有る京都の伊根、秋田の男鹿、青森の小泊などの遺跡地発祥の原因に対して一考する。

徐福第2次東渡以後には、その当時の移動手段では日本列島の太平洋側と日本海沿岸との間には日本列島が有り、海路では地理的、物理的にも不可能である事に対するその真相について研究する。

2. 第1次徐福東渡

2.1 第1次徐福東渡時の航路

徐福は始皇帝の命を受け、三神山に有るといふ不老草を求めの準備を、彼の故郷である江蘇省連雲港一帯をはじめ山東省一帯で航海のための準備を始め、造船工、乗組員、また1000名の童男童女、五穀の種、各種の家畜、百工(各種の技術者)、たちを選抜し、一応山東半島の北辺に有る竜口港に、準備が終わり次第集結させた。ここで最終的な点検を終え、BC219年竜口港から一番近い目先の遼東半島の先端に有る大連を目指して出航した。

これは経験のない外洋航海の危険性を避けて、北航路で有る沿岸航路をえらんだのである。大連の近海に到着した徐福は、韓国、中国の国境で有る丹東、義州を過ぎて韓半島を南下することになる。

南下の途中平壤の沖合いにある席島、大青島、徳積島、格列飛島を過ぎて韓半島の南端である濟州海峡の入り口、木浦の近海に至ることになる。

2.2 徐福1次東渡の出航時期

徐福の東渡の時期が航海に一番有利で有る秋として仮定した場合、秋の季節風である西北風の順風を得ることになり、又海流は秋と冬に発生して南下する渤海の海水表面寒流に乗る事になる。

また春か秋に出航したとすれば、濟州の南方で発生する対馬海流の支流である一名濟州

海流が北上するが山東半島と遼東半島に阻まれ南下する回帰海流に乗る事が出来る。これも済州島までの航路になるであろう。

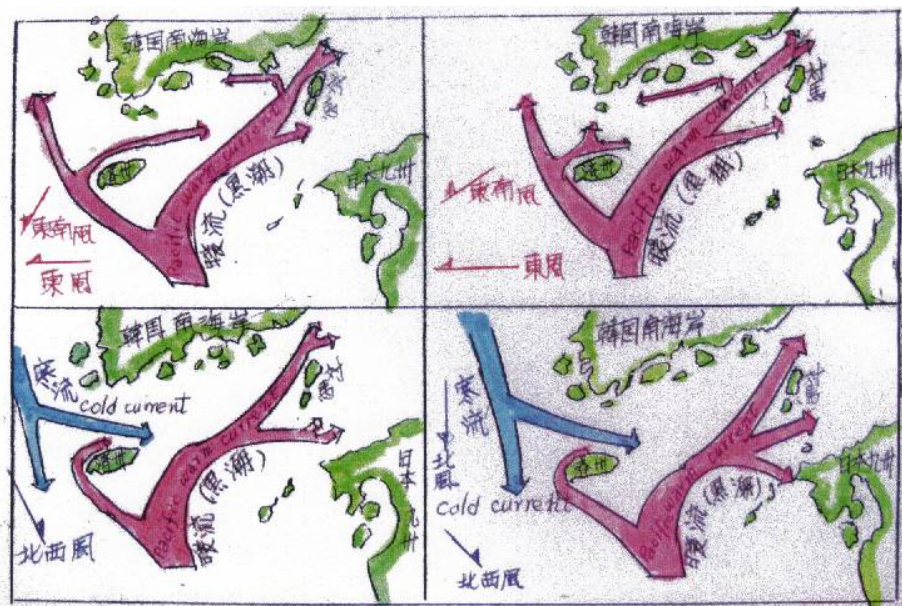
然し風向が此の季節には東風乃至東南風が主な風向きになる為、逆風となり不利な航海になると思われる。

また冬季には風浪が強い為これまた不利な航海時期であり、一番良い出航時期は秋であるとおもわれる。

済州海峡外季節別周辺海流図（風向図）

春 (Spring)

夏 (Summer)



秋 (Autumn)

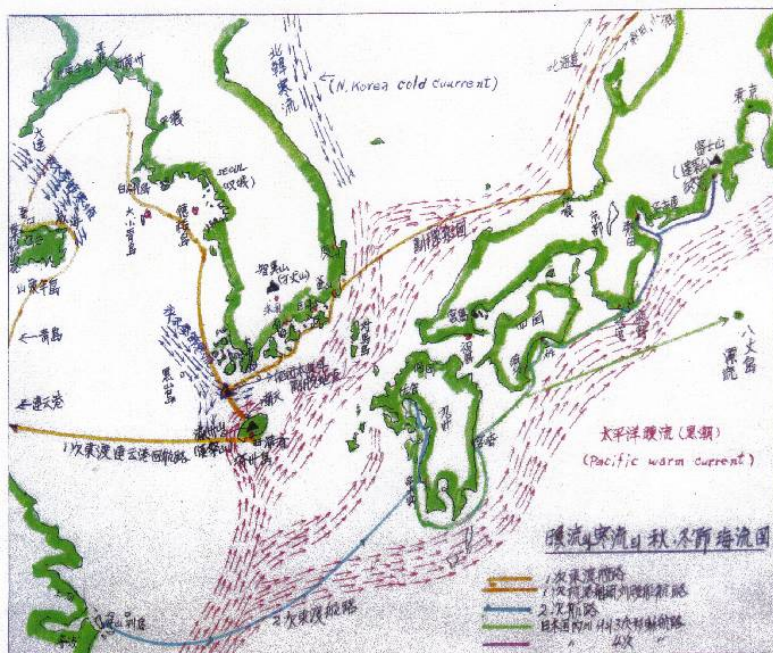
冬 (Winter)

図1 済州海峡の季節別周辺海流図と風向図

(Blog Naver から)

若し、秋に徐福船団が東渡出発したなら、台風など突変な事態が発生しない限り済州海峡の入り口である韓半島南端の木浦近海まで無事に、そして海流と順風に乗る、一番早く到着するであろう。竜口から木浦までの海上距離は約1000kmと看做して約10日の航海距離である。

図2. 暖流と寒流の秋冬季節別海流図 →



3. 徐福船団の継続南下航海

徐福一行が済州海峡を南下横断航海するなら次の様な多くの難関が待っているだろう。

1) 済州海峡一帯の海流と潮流に対して、その理解を深める必要が有る。海流は大きな海洋の中を流れる大きな江とすれば潮流は一日に6時間ごとに流向が変わる潮水の干満の差の為に起きる流れである。普通潮流の影響は海岸から約20km程度である。

済州島の海岸は楕円形で西海〔黄海〕に比べて、水深が深い方で朝夕が弱く干満の差が少なく地形に依り、流れの方角が一定でない為、その影響を無視してもいい程度である。

木浦地域の南海岸から20km範囲は水深が浅く干満の差が非常に多く、5mから6m程度に至るため潮の流速が非常に早い。これは木浦海岸から済州方向20kmぐらいの地点で、暖流と寒流が出会い西から東へ流れ、これが退潮の場合は二倍早くなる潮流と二つの海流が合流して何倍かの強力な流れとなる。そしてこの潮水は引き潮のときは西から東に、入り潮のときは東から西に反対に流られる。



図3 済州海峡での引き潮と入り潮時の流れの方向

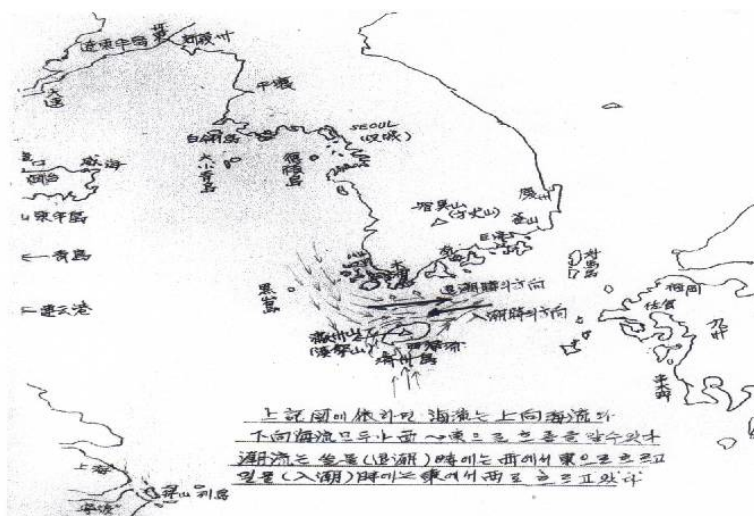


図4. 渤海湾寒流と対馬海流の支流が済州海峡で合流東にながれる

上記の状況に対して、韓国海洋環境工学誌〔第5巻第4号〕に掲載されている韓国南海岸における“2次元海水循環モデル”と言う論文の抄録を此処に転載する。

“2次元海水循環モデル”抄 録

韓国南海岸に於いての海水循環を調べる為に数値モデルを利用して開放境界での潮汐強制力による潮流の海水輸送量を利用した海流を再現して見た、主要4大分潮による潮流モデルの結果、済州海峡で最高東向流の強さが、西向流の強さより約二倍程度強く現れた。数値実験により計算された海流分布で巨済島の南に現れる半円形海流分布が現れたが其の分布が海底地形の変化に依り発生している事が数値実験を通じて解明した。潮流と海流を同時に考慮した海水循環モデルの結果済州海峡では南海に流入する東向流が優勢である反面、南海から西海の方に流出する西向流の強さが微弱と調査された。このような結果は長期的な観点から見ると物資交換を考えると、南海岸の海上浮遺物が済州海峡を通じて西海の方に移動する事が難しい原因の一つであると判断する事が出来る。

以上論文で見たように先に徐福船団が南海岸を経過して、徐福一行が済州島に行ったという説は成立することが出来ない。

“南海岸の高興半島のゴミは絶対に済州島に流れ行かない”と伝えられている。それでは南海岸一帯に残る徐福の伝説と遺跡は何であろうか？

4. 南海岸一帯に残る徐福の伝説と遺跡たち

南海岸一帯に残る遺跡伝説は徐福船団が済州海峡を横断する時、先程述べた潮流と海流の強い変化によって止むを得ず本意な本隊船団との別離に依って出来た別の多数の船団に依り出来たものである。

韓半島南端に有る木浦と済州島の距離は直線で142km有る。今の旅客船（18ノット基準）でも4時間半も掛かる距離で有る。潮流が影響を及ぼす距離は海岸線から約20km程度であり、其のうち木浦海岸線から済州方向10km位が一番強い影響力を出す。

80余隻に及ぶ徐福の大船団が2列又は3列の縦隊で10余日間航海をして木浦沿岸まで到着して引き継ぎ航海済州海峡を横断しようとするれば次の様な状況に直面するであろう。

1) 10余日の航海で先頭船団と後尾船団との航海距離の差異

航海距離の差異は、目先に見える可視距離内であっても海上では実は遠く、5時間から6時間の距離差が出来る。若し先頭船団が入り潮か満潮のとき木浦から10kmぐらいの地点を通過したとすれば、後続後尾船団が通過しようとする時点で、急変する強烈な引き潮となり南下している本隊と90度違う東方に流れ、抵抗のしようがなく引き裂かれ再会の期約なく韓半島の南海岸の方に行ってしまう事になる。

其の分離された船の数は分からないが1/3以上、半分ぐらいまでに成るかもしれない。此の事実を反証するのは、済州島に到着した徐福本隊は漢拏山の隅々まで不老草を捜したが不成功に終わり、今の西帰浦に有る正房の滝の前に集結して継続して東に向かって航海し、彼らが考えていた蓬莱山である日本の富士山に向かって航海を継げるか、又は失敗を

認め西の方の自分の故郷で有る中国の連雲港に帰るかを苦悶したが、船団分散のため食料など船積物資、人員の分散に依る不足などの為、到底航海を続ける事が出来ないと判断をし、失敗に依る始皇帝の処断などの危険性が有るにもかかわらず西帰浦という地名だけ残して故郷に帰ってしまった。

徐福が済州に滞在した期間は約6ヶ月程度ではないかと推測される。これは漢拏山での薬草の採集の外に、分散の為別れ別れに成った船団を待つ為にも最低此の位の時間が必要で有ったであろう。

6ヶ月程度が過ぎ季節が春に変わった場合、西にある徐福の故郷連雲港にかえるのに必要な東風が吹き此の順風に乗る、楽に帰る事が出来るであろう。

2) 韓半島南海岸での別に分離した徐福船団の行跡

これら徐福一行は南海岸一帯の島々に行跡と伝説が残り、白島、高興、珍島、筏橋などに上陸したという伝説を残し、南海島にも有名な一名南海刻書という題名石を残し、今でも現存している。又 巨濟島にも留宿地、そして海岸の絶壁に“徐福過此”と書刻したという跡がある。釜山にも碑石跡と地名伝説が残っている。今の東萊(区)は蓬萊が変わった地名だと言われている。

智異山(一名方丈山 三神山の一つ)の登山口である全羅南道求礼市にも、徐福一行が不老草探しの途中水浴したという徐市川と名がある川が今もながれている。彼らは主に船を利用した海路で移動したと考えられ、南海岸の沿岸に沿って流れる対馬海流に依り西から東へと移動したと推測される。

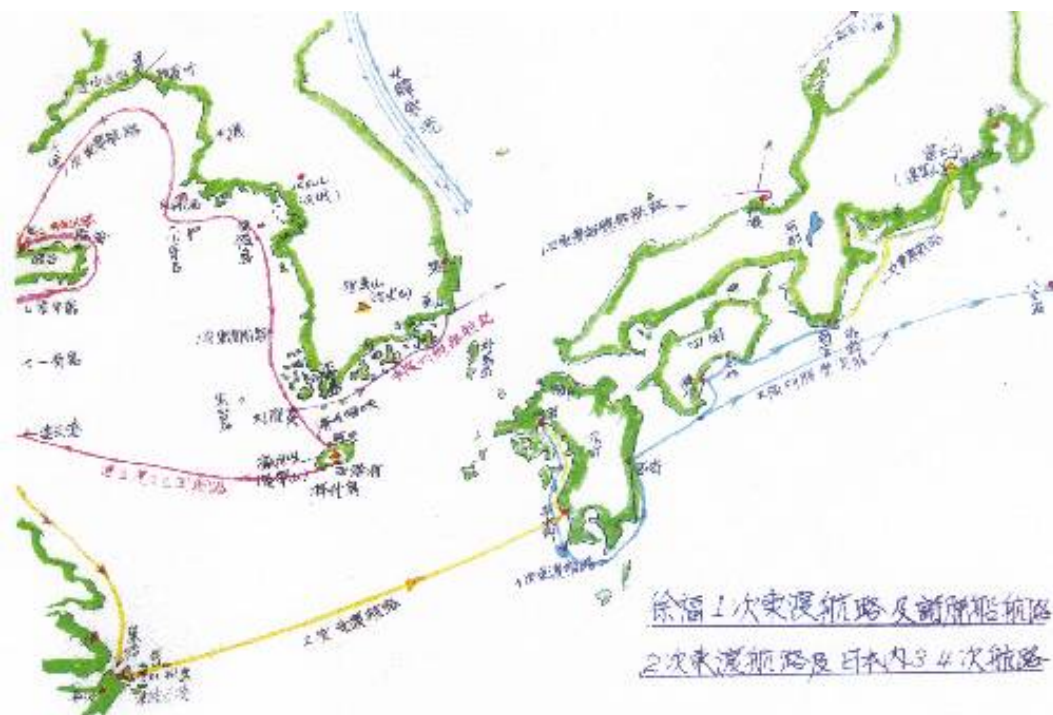


図5 徐福一次東渡航路と離脱船団航路
二次東渡航路と日本内三、四次航路



図6 現在の 求礼 除市川

此の海流は釜山を過ぎながら其の一部が北に方向を変えて、韓国東海岸の方に流向を変える。そして日本列島の日本海沿岸に沿って北上する黒潮と別れる。徐福別動一行の足跡はこうして新羅の古都である今の慶州一帯にも多くの伝説を残した。此の一帯は 三韓時代の辰韓（秦韓）が有った地域で、辰韓は12の部族が集まって出来た部族国家であり、秦から始皇帝の虐政を避けて流入してきた人たちで作られた国家である。この地域が今の韓国慶尚南道一帯に該当する。

“陳寿”の魏志東夷伝に依ると、此の12カ国の小国達は多くて5000名、少なくても400名程度の小部族集団であったと記されているが、若しかして徐福一行が定着して秦国の人たちの国である辰韓（秦国）の一員になったといとう蓋然性も充分あると思わせる。

3) 12カ国の部族集団で成った辰韓に対して

此の12カ国から或る辰韓は 其のうち一番大きい慶州地域の、斯盧国、勤嗜国、己抵国、不斯国、難彌離彌凍国、如湛国、戸路国、州鮮国、馬延国、優由国、軍彌国、冉亥国、等である。

陳寿の<三国志>辰韓條では、中国秦国の流民達が万里の長城などの労役を避け、韓に移住し、馬韓の東方に土地を得て辰韓を形成したと記して有る。

此の部分の歴史が徐福一行たちの行跡と関連性が有るのではないかと考えられる。慶南、蔚山郡、彦陽面の盤亀台、岩刻画の数多い勅物の壁画を見ると、数十種の鯨、“モリ”に撃たれる鯨、海馬、サメ、カメ、いろいろな魚、そして熊、獅子、猪、トラ、鹿、鳥類など、狩猟対象の陸上動物が数十種に亘り、精巧に描かれたこの壁画は世紀前後して彫られた物と言われているが、本当に鉄器時代でもない其の時、如何にして岸壁に自由自在に精巧に彫られているのか？ これには鉄製の道具が必ず必要だ。当時の原住民たちにこのような鋼鉄の道具が有っただろうか？ 徐福は始皇帝から東渡の許可を得るとき、海中の怪獣（鯨、鮫）退治するのに必要な連弩、弓弩手を要請し、此の許可を得たということを想起してみる。その様な理由で若しか、徐福一行が描いた壁画では無いのか？ この様にも考えてみる。



図7 盤この亀
台岩刻雨が有る
岸壁の全景

朝鮮後期の歴史学者で“星湖塞説”の著者・李翼の弟子である安鼎福の有名な史書“東史綱目”でも、辰と秦の通用に対して同じ発音と同じ意味で使われる、と記して有る。

この様にして徐福の一行のうち一部が韓半島の南部に定着して、この地に新しい文明の発展に寄与した事と考えられ又其の外の一部が黒潮に乗って再び東へと航海したと思われる。

4) 日本海沿岸に散在している徐福伝説と遺跡

先に記述した様に、韓半島南部一帯に定着又は放浪していた徐福と別れた一行は、対馬海流から分かれて北上する支流に依って釜山沖で左回転し、韓国東海岸を北上しながら盤亀台の遺跡がある蔚山を過ぎ、蔚珍の沖で北朝鮮から流れ来る北韓寒流 (N. Korea cold current) と衝突し、また此の対馬海流の支流は方向を90度、転換して再び右回転して東の方向の日本に向かうことになり、日本海の沿岸に沿って東北上していた本流で有る対馬海流と日本鳥取の沖合いで再び合流する事になる。徐福の二回目の東渡は日本の九州地方に到着、串木野、そして佐賀で定着其の地方に色々な文化を広め又再び東方に移動を始め、延岡、四国の須賀、土佐、熊野、新宮に三年余りとどまり、そして又移動をし始め愛知、熱田を過ぎ、最終地で有る富士吉田に至り、途中数多い伝説と遺跡を残すことに成った。

その当時の移動方法では、太平洋沿岸から日本海沿岸に移動することは不可能だと思わ

れたのに、これで解答が出来たと思われる。即ち、日本海沿岸の京都の伊根、秋田の男鹿、青森の小泊などにある徐福遺跡達は、徐福二次東渡の数年前の一次東渡の時分離



した別動徐福一行の遺跡たちである。

図8 京都”伊根“に有る徐福神社



図9 秋田男鹿にある徐福一行の墓
(以上池上氏撮影)

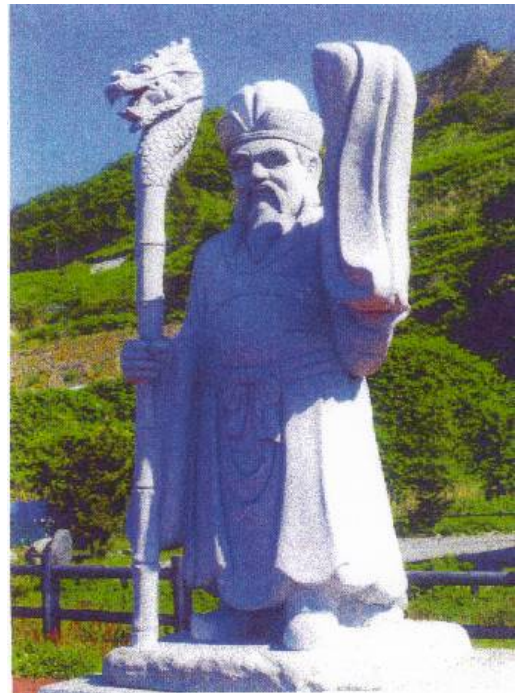


図10 青森小泊にある徐福石像→

5. 結 論

徐福はBC219年に秦始皇帝の命を受け、多数の人員と物資などを準備して東渡の航海に入った。此のとき徐福は本当に不老不死の霊薬の存在を確信してこれを求めるだけの理由で航海を始めたのか？ でなければ霊薬の存在を半信半疑の状態ですぐ、斉国出身の自分は何時粛清されるか分からない状況を認識して、此の状態から脱出する為東にある大きな島国に有るといふ蓬萊山を目指して航海の途中、平原広沢の地に出会い集団亡命をしたということ排除することは出来ないだろう。

彼の準備状況のうち童男、童女各500名計1000名を同乗させた本当の理由を推測することが出来る。これは集団亡命移民に於いて、一部世代の空白状態を無くすため、未成年者で有る中間世代を作る為におこなったと考えられる。

では、何の理由で第一次東渡のとき済州島まで行ったにも拘わらず、所期の目的を放棄して帰国する事に決心したので有ろうか？という事である。求薬の目的が失敗して帰国した場合、必ず、始皇帝の厳しい問責が有りうる。その危険性を冒して帰国したという事だ。此れは徐福が済州西帰浦から帰国しなければならない絶対的な問題が発生した為で有る。此れは本論で主張した様に済州海峡横断航海のとき思いにも依らない、潮流、海流の事故で船団の多くの部分が分散離脱失われ集団亡命に絶対必要な人員、物資、装備、などを失った為である。此の状態では所期の目的で有る集団亡命移住が不可能である事が判ったので、故郷に帰るといふ重大な決心をするに到ったということだ。

事態がこのようになり、徐福本隊から不本意に離脱した多くの徐福一行達が、韓半島南海岸沿岸に多くの遺跡と伝説を残し、これに依って韓半島南部に新しい文明の種を播き、此れが育てられ今日に到ったと看ることが出来るので有り、それから謎に包まれていた日本に於いての日本海沿岸に有る徐福遺跡地に対するその存在原因を説明することが出来ることに成った。

そして済州海峡横断航海に対して、韓国の歴史上これを裏づける十分な資料がある。元（蒙古）が滅び明国に替わる寸前、高麗末の崔瑩將軍が蒙古の残党、牧胡勢力を掃討する為済州島に出兵したとき、済州海峡の潮流、海流の状態を良く知っていたにも拘わらず、軍隊を移送するのに二ヶ月半も掛かったという事実があり、そして壬辰倭乱、即ち豊臣秀吉の朝鮮半島侵攻のとき、朝鮮の名将李舜臣提督が此の潮流と海流の強烈な流速と変化を利用して数倍にいたる莫強な日本の水軍を殲滅した事実等と、そしてその外にも日本と中国との貿易船〔主に陶磁類〕が海峡の入り目である”本浦”近海で座礁沈没し宝船として最近よく発見されているのを後記しながら結論を閉じる。

<著者プロフィール>

禹珪日 (WOO KYU IL)

財団法人 済州徐福文化国際交流協会 理事長

1032年 日本愛知県で出生 終戦後1946年帰国〔上田中学3年〕

徐福関係＝論文、韓国、中国、日本 各地の伝承地、遺跡地, などの探訪記、翻訳本など10数編, 発表。

経歴 合同通信社 記者、韓国銀行、勤務

学歴 1962年 高麗大學校經營大學院 卒

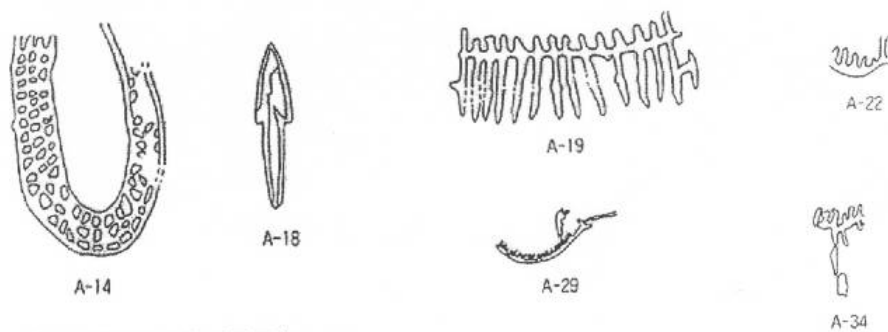
現在、ソウルに2社 済州に2社の 株式会社4社の 代表理事会長

※参考, 添附 盤龜台動物岩刻画写真2枚

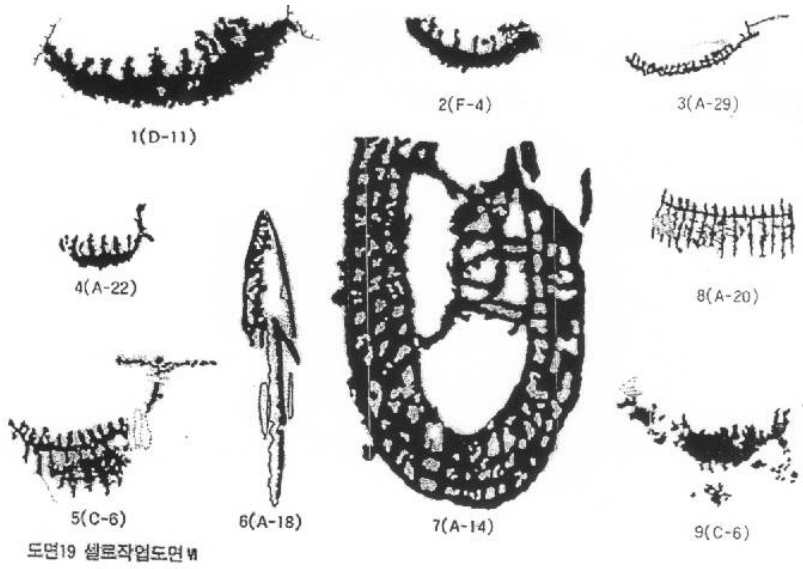
인물상(안면) (1/10)



도구상① (1/10)



도면11. 반구대암각화 개별그림



동물상(고래목 ①)

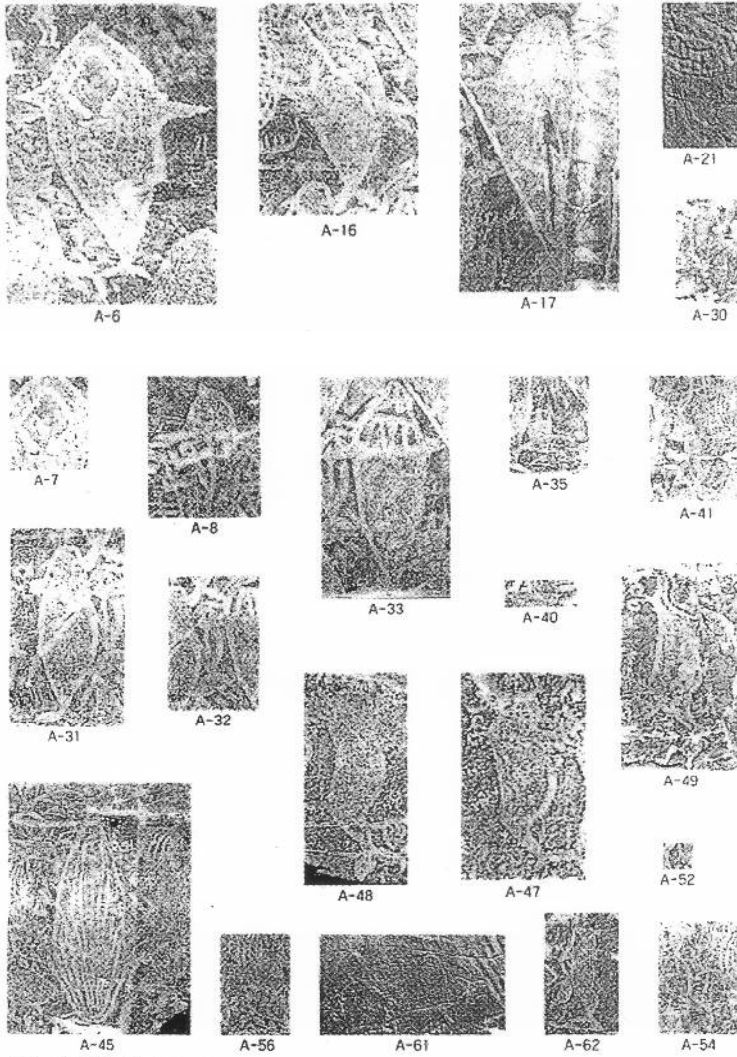


사진5. 반구대암각화 개별사진 1

あとがき

日中友好40周年に向けて、徐福フォーラム in 神奈川 2012 の企画が成されたのは、昨年の秋でありました。

前回の徐福フォーラム in 神奈川が開催されたのが2007年12月でありましたから、5年ぶりの神奈川徐福フォーラムであり、神奈川徐福研究会のメンバーも皆5年の歳を重ねています。

企画時点で、お元気であった中濱勝也氏が、本年春100歳を超えるご母堂を見送られて、しばらく経った後、急遽倒れられ、帰らぬ人となってしまおうとは、思いもかけぬことでした。御冥福をお祈り申し上げます。

不老不死の霊薬を求めて、日本列島に渡来した「徐福さん」も、不死の成果を摘むことは出来なかったが、現代の我々も同様でありましょう。

徐福研究を通じて、国際友好に尽力された、故中濱勝也氏を偲んで、嘗てのご親友岡本明久様がお寄せくださった哀悼の辞を、次ページに掲載させていただきます。

今般の徐福フォーラムでは、日本の各地の徐福伝承について、最新の情報を集めて、徐福さんと縁のある人々の間で、情報を共有しようとして、第Ⅰ編「各地徐福伝承」に取りまとめました。

また、従来行われてきた徐福伝説の発掘と、それを基にした地域振興を中心とする徐福研究の進め方を、見直すべき時期が来ていると考え、「徐福研究の行方」というテーマで、パネル討論を行うことを企画しましたが、その方向性として、

- 1) 徐福の日本列島渡来を科学的に証明する具体的手法を提言・実証すること、
- 2) 徐福渡来を前提とした、歴史、宗教、技術、国際関係などを含む、総合文化・文明論を構築すること、を提言したいと思います。

そこで、今般投稿頂いた原稿の中、これらに関係する論文を、第Ⅱ編「徐福に関連した技術・歴史・文化・交流」に分類して掲載しました。

また、特別寄稿として、はるばる韓国済州島から当フォーラムに参加下さいました、禹珪日・済州徐福文化国際交流協会理事長の徐福東渡に関する投稿論文を掲載させて戴きました。

当方の呼びかけに対して、ご多忙の中、皆様のご協力を戴き、100頁を超える資料集を完成することが出来ましたことを、心から感謝申し上げます。

末筆ながら、徐福に縁ある方々のご多幸とご健勝を祈念し、あとがきとさせていただきます。

2012年12月3日

神奈川徐福研究会・フォーラム実行委員長 前田豊

中濱勝也さんを悼む

中濱さんが急逝されたとお知らせを戴き、呆然となった。温厚なお人柄は誰にも慕われ愛された。長寿でお母さんが亡くなられて程なく、後を追うように旅立たれた。

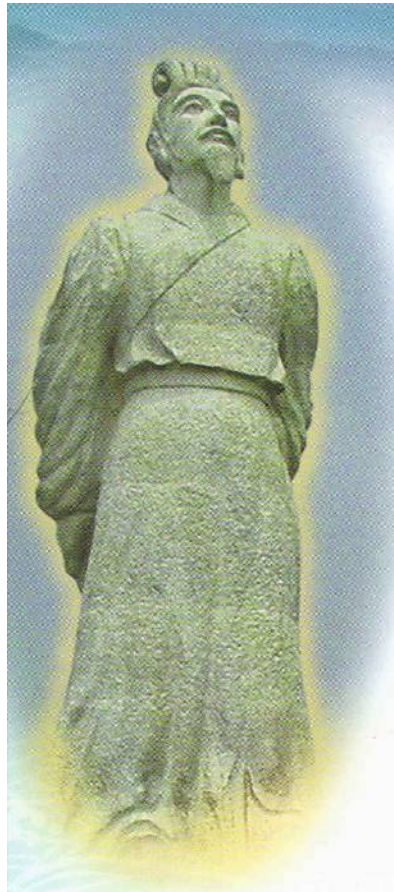
徐福研究会では独自の視点で徐福論を展開された。例えば、富士古文書と日本書記との比較検証である。また中国から渡来した秦氏については、「徐福の後継者・秦河勝とその一族」、「秦氏と遠江」など数々の論文を発表されている。

中濱さんは大阪外国語大学印度語学科を卒業後、日本楽器製造（現ヤマハ）に入社され、アメリカなど海外勤務が多く、グローバルなお仕事で活躍された。日本と外国との関係を常に意識されて、スケールの大きい思考を貫く生き方をされたのである。

徐福研究会が取り持つご縁で中濱さんにご面識をいただく幸運に恵まれ、個人的にも示唆に富む影響を受けた。映画「徐福さん」が完成した時には、ご自身の発案でホームページを立ち上げて下さり、DVDの普及にご尽力戴いた。私に取っては尊敬する先達であり、大変お世話になった恩人である。命日は7月20日。享年76歳。

深く哀悼の意を表し、中濱さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。 合掌

岡本明久



2012年12月3日

神奈川徐福研究会発行